仙台市文化財調査報告書第52集

南小泉遺跡

都市計画街路建設工事関係第2次調査報告

昭和58年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第52集

南小泉遺跡

都市計画街路建設工事関係第2次調査報告

昭和58年3月

仙台市教育委員会

序　　文

昨年度から実施している都市計画街路、川内・南小泉線建設工事にともなう発掘調査は、今年度は仙台バイパスと接続する付近の調査を行いました。予定では、昨年度調査を行った第1次調査区北側の部分も行うことになっていましたが、いろいろな問題があり、来年度に持ち越しになりました。

昨年度調査を実施したところは、過去の分布調査から、遺構の濃密なところと推定されていましたが、今年度調査箇所は、南小泉遺跡としては、中央部南端にあたり、昨年度の調査結果とも合せてみると、時期としては平安時代以降で、しかも、遺構数は少ないのではないかと予想されておりました。その結果は以下にまとめて報告してありますので、是非ご一読の上、ご批評下さい。前述しましたように、調査が来年度まで伸びたことにより、当都市計画街路建設に伴う調査の細部にわたる分類、考察も、来年度の調査報告書中で扱いたいと思います。

さて、昨年度実施した、この第1次調査以来、南小泉遺跡内での調査は、今回の第2次調査を含めて、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会で4ヶ所で実施しており、当遺跡の内容が序々に明らかになりつつあります。一方、このような実態は、我々、文化財保護行政にたずさわっている者にとりましては、憂うべき問題でもあります。遠見塚古墳を含めて、この一帯の保存、保護を考える場合、今をおいては、その時期を逸すると考えられます。このことをふまえて、仙台市の都市開発と自然環境の調和という観点からも、これからも努力してまいる所存であります。

最後になりましたが、皆様の文化財へのご理解とご協力をお願い申し上げます。

昭和58年3月

仙台市教育委員会

教育長　藤井　　黎

例　　言

1．本書は都市計画街路、川内・南小泉線建設工事に先行する第２次調査の報告書である。

2．内容は事実報告に主力をおき、考察は若干である。次年度に第３次調査を予定しており、そのおりに３年間の資料に基ずき、分類、考察したい。

3．本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の１：25,000仙台東南部地形図である。

4．土層、遺物の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人・日本色彩研究所色票監修の新版標準土色帖を使用した。

5．本書の原稿執筆担当は、目次に示したとおりである。なお編集は工藤が担当した。

6．本書作成にともなう図面、遺物整理は「Ⅲ、調査要項」に記載してある整理参加者全員で行った。

7．遺物の写真撮影は、小島真由美が担当した。

8．内黒土師器は、その実測図にスクリーントンを貼って表現した。

9．「付１」の三辻利一氏の胎土分析に使用した南小泉遺跡の資料は、昨年度、第１次調査のものである。

10．磁北方向は真北に対して西偏７°０′である。

目　　次

序文
例言
Ⅰ．はじめに……結城慎一 1
Ⅱ．調査要項……工藤哲司 1
Ⅲ．遺跡の位置と環境……〃 4
Ⅳ．基本層位……〃 4
Ⅴ．発見遺構と遺物……〃 8
　1．住居跡……〃 11
　2．土壙……〃 17
　3．小溝状遺構……〃 25
　4．ピット……〃 30
　5．性格不明遺構……〃 31
　6．溝跡……〃 34
Ⅵ．遺物・遺構の総括……〃 50
　1．遺物の総括……〃 50
　2．遺構の総括……〃 56
Ⅶ．まとめ……〃 61
註記
写真図版…… 66
付1．仙台市周辺の窯跡および遺跡出土土器の胎土分析……三辻利一 77
付2．胎土分析結果について……結城慎一 82

Ⅰ．はじめに

昨年度からはじまった都市計画街路、川内・南小泉線の調査は、今年度は、仙台バイパス接続点付近、対象面積約1000㎡のうち約550㎡を調査した。当市で把握している南小泉遺跡のほぼ中央部南端に当たる位置である。

はじめに、昨年度、図上で設定したように、計画街路中心杭No．0～No．5の間のⅠ区に、現場で調査範囲として縄張りしたグリットは4－c～f、5－c～f、6－c、d、7－c、d南半であり、第3次調査区ということになる。(註)

当初は、昨年度調査を実施したⅢ区の第1次調査区北側の畑地にも調査区を設定することになっていたのであるが、用地買収の遅れにより、来年度にその部分の調査を延期することになった。

(註) 仙台市教育委員会「南小泉遺跡」仙台市文化財調査報告書第35集(1982・3)のP5参照。

Ⅱ．調査要項

遺構の名称　南小泉遺跡（仙台市文化財登録番号C－102）

調査地点　仙台市古城三丁目

調査面積　約550㎡（対象面積約1000㎡）

調査期間　昭和57年6月22日～8月12日（延38日）

調査主体　仙台市教育委員会

調査担当　仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係　主事　結城慎一、工藤哲司

調査参加者　〈現地調査〉

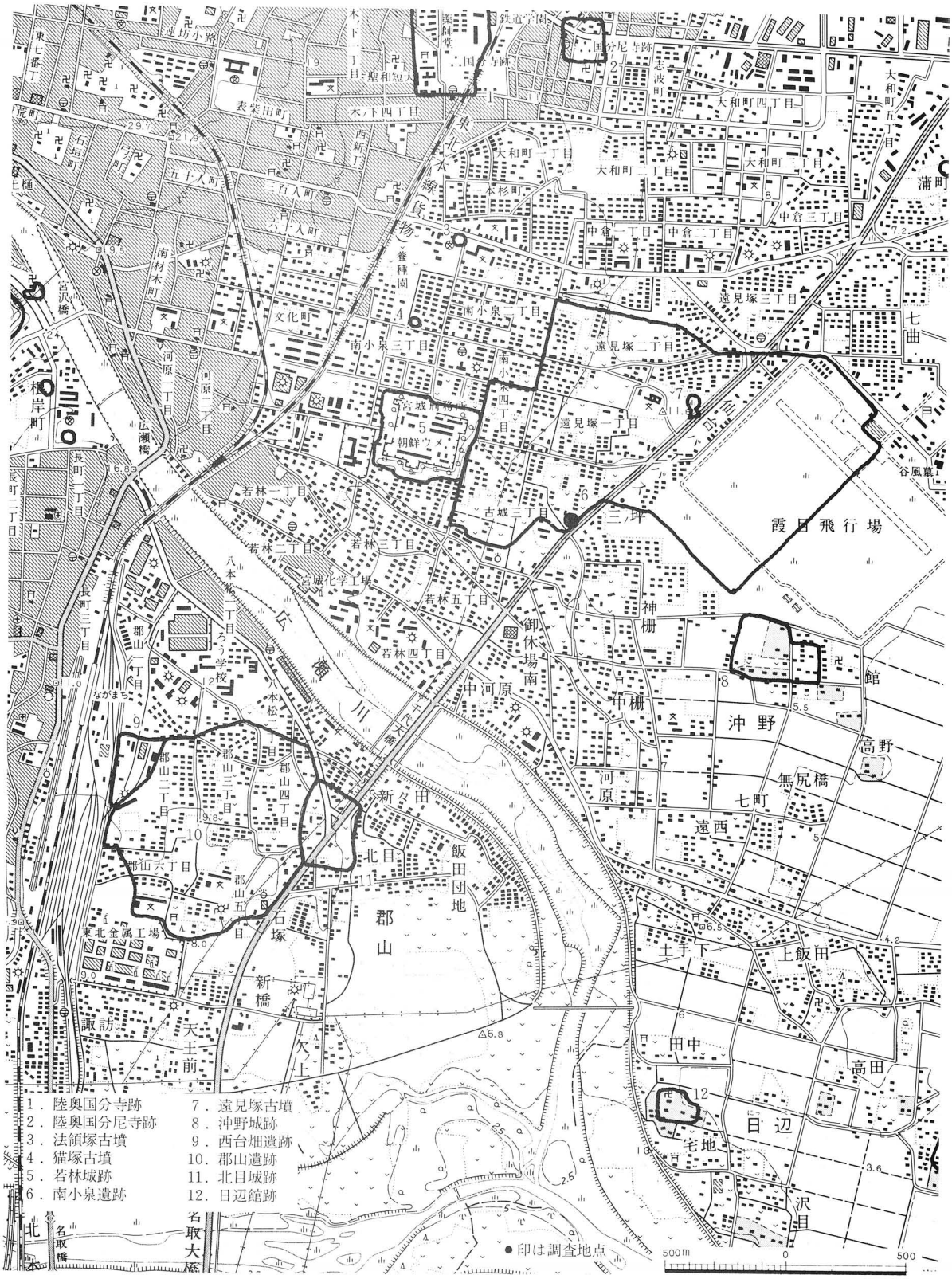
吉田俊一、菅野三郎、黒滝ふくえ、鈴木悦子、村上まつえ、渡辺みつゑ、芦野ヒデ子、兼子ミヨ子、佐々木由紀、松本寿一、只野宗一、佐藤和子、佐藤愛子

〈現地調査～整理〉

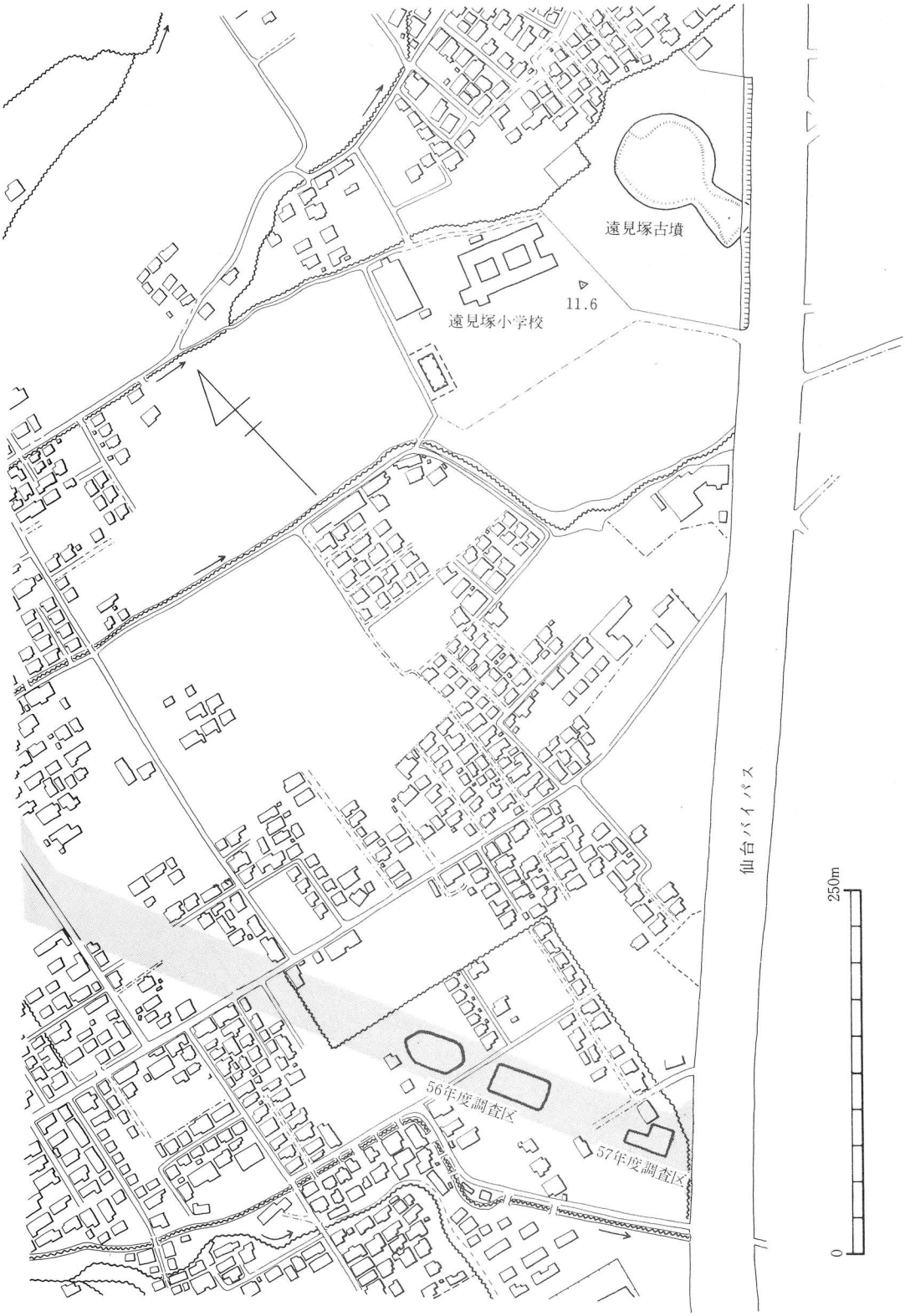
小林広美、赤間郁子、神尾恵美子、神尾紀以子、渡辺紀雄、熊谷峯子

〈整理〉

荒井　格、菊地雅之、相沢尚子



第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第２図　発掘調査区とその周辺

Ⅲ．遺跡の位置と環境

南小泉遺跡は仙台平野の北部に位置し、国鉄仙台駅の南東約3.5kmの所にある。遺跡は広瀬川北岸に発達した自然堤防上に立地している。沖積平野にあっては、その奥部にあたる。遺跡の標高は11m 前後であるが、自然堤防の発達状況の差異や後背湿地となっている所もあり、緩やかな起伏が認められる。

遺跡の範囲は、東西約1600m，南北約900m にも及び、仙台市内では最大規模の遺跡となっている。遺跡が残っているのは弥生時代の中期からで、弥生時代の遺構は遺跡の東部を中心としている。その後、古墳時代から平安時代まで各時期の古代集落が営まれている。古墳時代中期には、遺跡の中心部に東北地方第３位の規模を有する主軸長110m の前方後円墳である遠見塚古墳が築かれている。

中世から近世については、陶磁器の採集や、この時期と考えられる溝跡、墓壙等の発見はあるが、古代に比べるとさらに不明な点が多い。

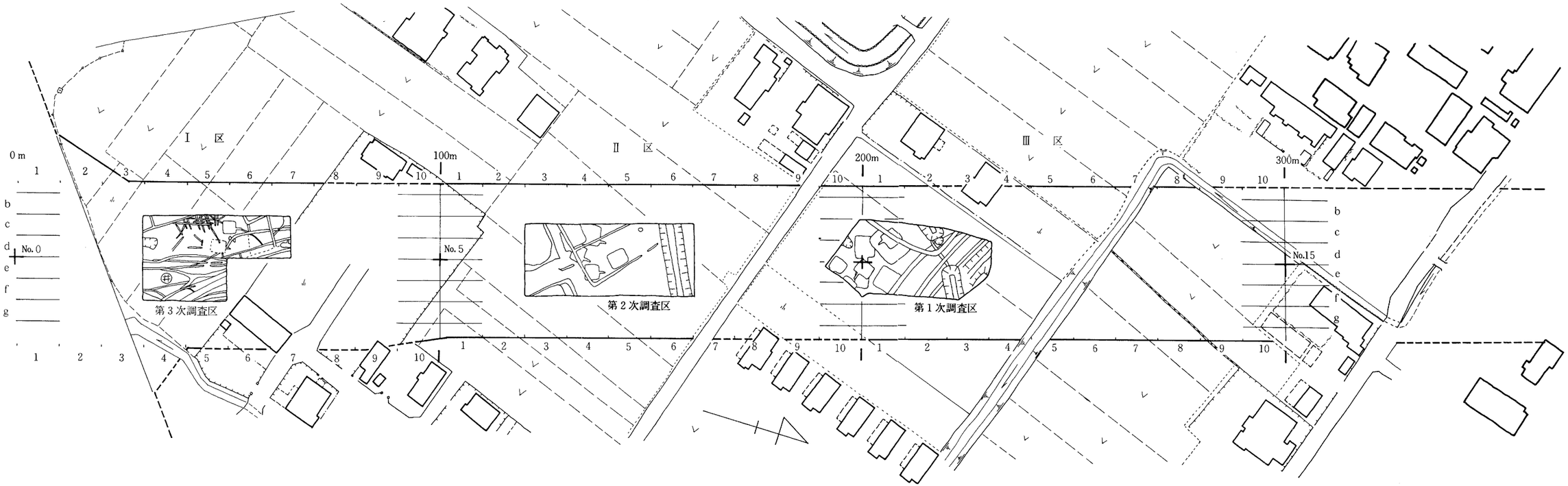
南小泉遺跡の周辺には、他にも多くの遺跡が存在しており、弥生時代としては西台畑遺跡があり、古墳時代としては南小泉遺跡の西方に、法領塚古墳や猫塚古墳がある。歴史時代になると多賀城以前の官衙跡と考えられる郡山遺跡や陸奥国分寺、同尼寺跡が見られるようになり、仙台平野の中心的地区になってくる。さらに、中世から近世初頭にかけては、北目城や若林城、また沖野城が築かれ、古来この地域は歴史の足跡の絶えることがなかった。

同遺跡周辺は、近年まで仙台近郊の田園地帯となっていたが、最近は急速に宅地化が進行して、田畑は年々減少している。このまま宅地化が進行すれば、南小泉遺跡として残るのは、史跡指定された遠見塚古墳と、霞ノ目飛行場地内だけとなる恐れがある。

Ⅳ．基本層位

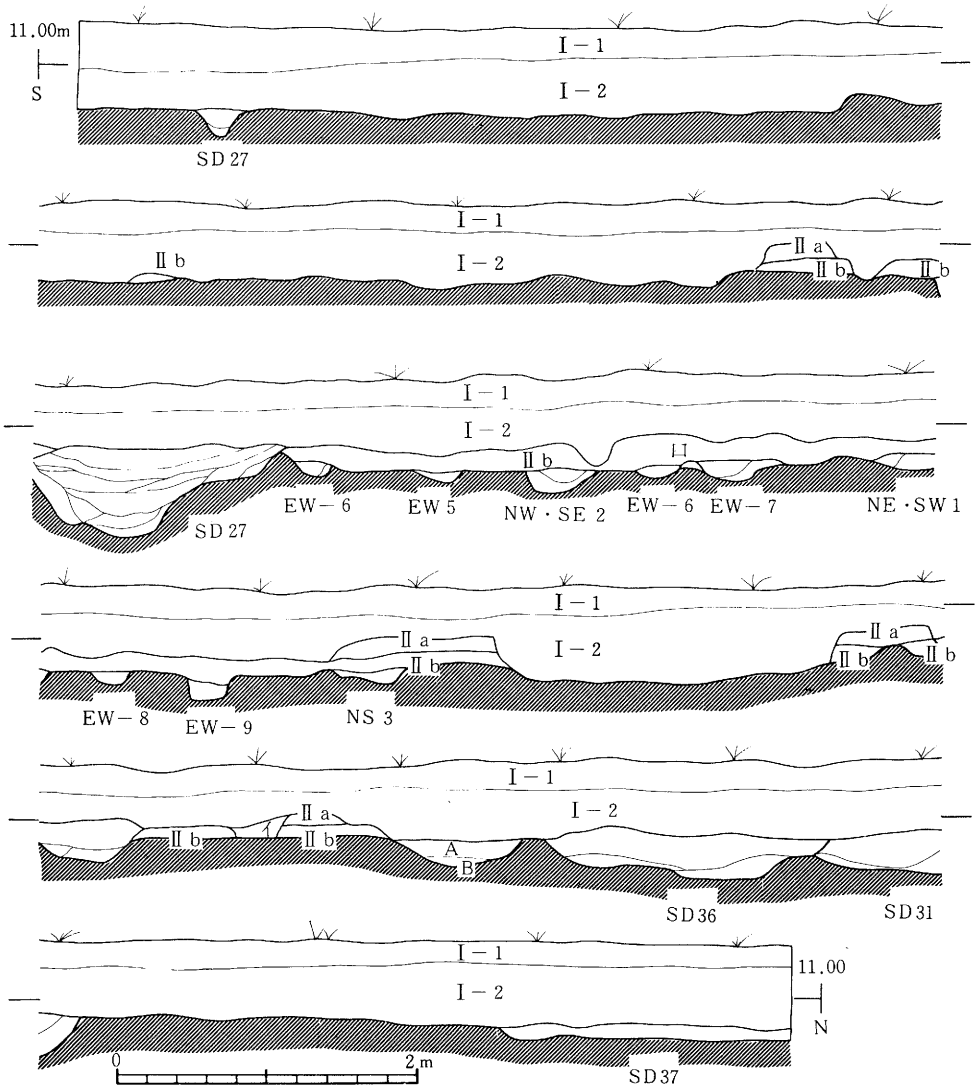
Ⅰ層　畑の耕作土で60～120cmあり、上下２層に分けられる。上部のⅠ－１層は、にぶい黄褐色シルトからなる現耕作土層で、下部のⅠ－２層は、にぶい黄褐色砂質シルトからなる天地がえしによる耕作土層である。調査区の北西部には、Ⅰ－２層の下に更に旧水田と考えられるグライ層とその底面に酸化鉄を多量に含む層も認められた。

Ⅱ層　天地がえしの比較的浅い所では、部分的にやや黒味を帯びた少量の遺物を含む層が10～20cmの厚さに検出された。この層も上下に２分される。上部は褐色を呈するシルト層で、下部はにぶい黄褐色を呈している。この層の上面では数個のピットが検出されたが、他の大部分の遺構は、この層を除去した後に検出されている。



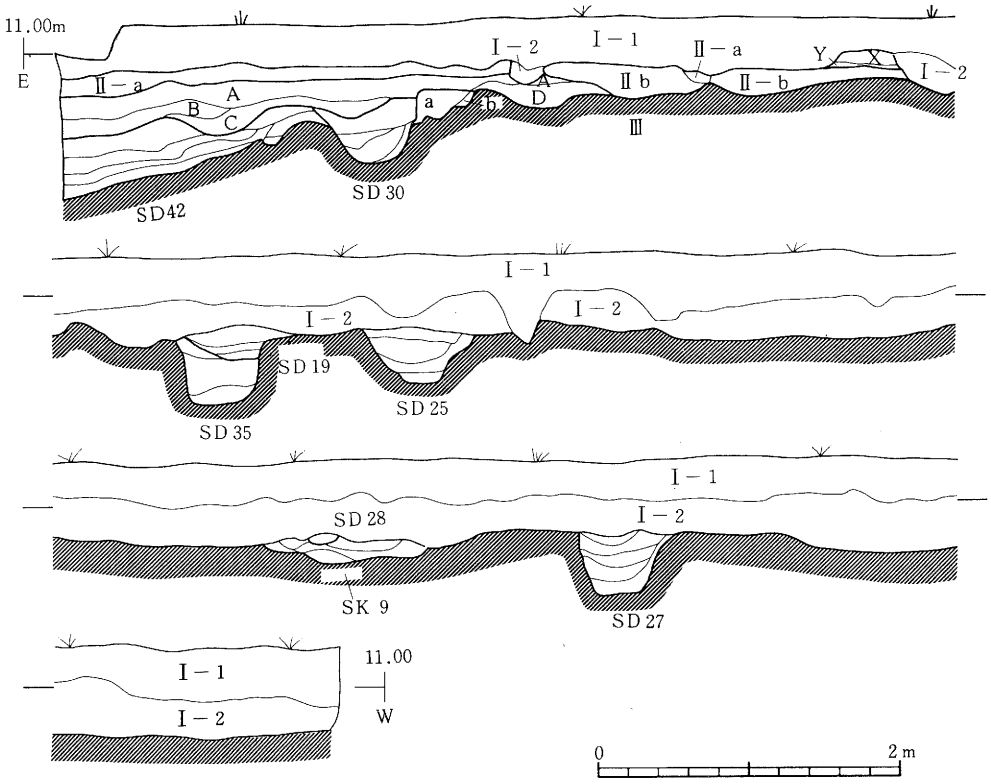
第３図　調査区・グリット配置図

Ⅲ層　この層の上面において大部分の遺構が検出された。部分的に、あるいは深さによって土色、土質は多少異なるが、この地区の地山となっており、層中からの遺物の出土はない。



層　位	土　　色	土　　質	そ　の　他
Ⅱ－1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シ　ル　ト	しまりなし・耕作土と思われる
Ⅱ－2	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	粘性・しまりやや有り
Ⅱ－a	10YR4/4　褐　　色	シ　ル　ト	しまり若干有り
Ⅱ－b	10YR5/3　にぶい黄褐色	シ　ル　ト	粘性・しまりやや有り
Ⅲ	10YR5/4　にぶい黄褐色	シ　ル　ト	粘性若干有り　　地山
A	10YR3/2　黒　褐　色	粘土質シルト	粘性・しまりやや有り
B	10YR3/3　暗　褐　色	粘土質シルト	粘性・しまりやや有り
イ	10YR3/3　暗　褐　色	シ　ル　ト	粘性・しまりやや有り
ロ	10YR3/3　暗　褐　色	粘土質シルト	粘性・しまり有り

第4図　調査区西壁土層断面図



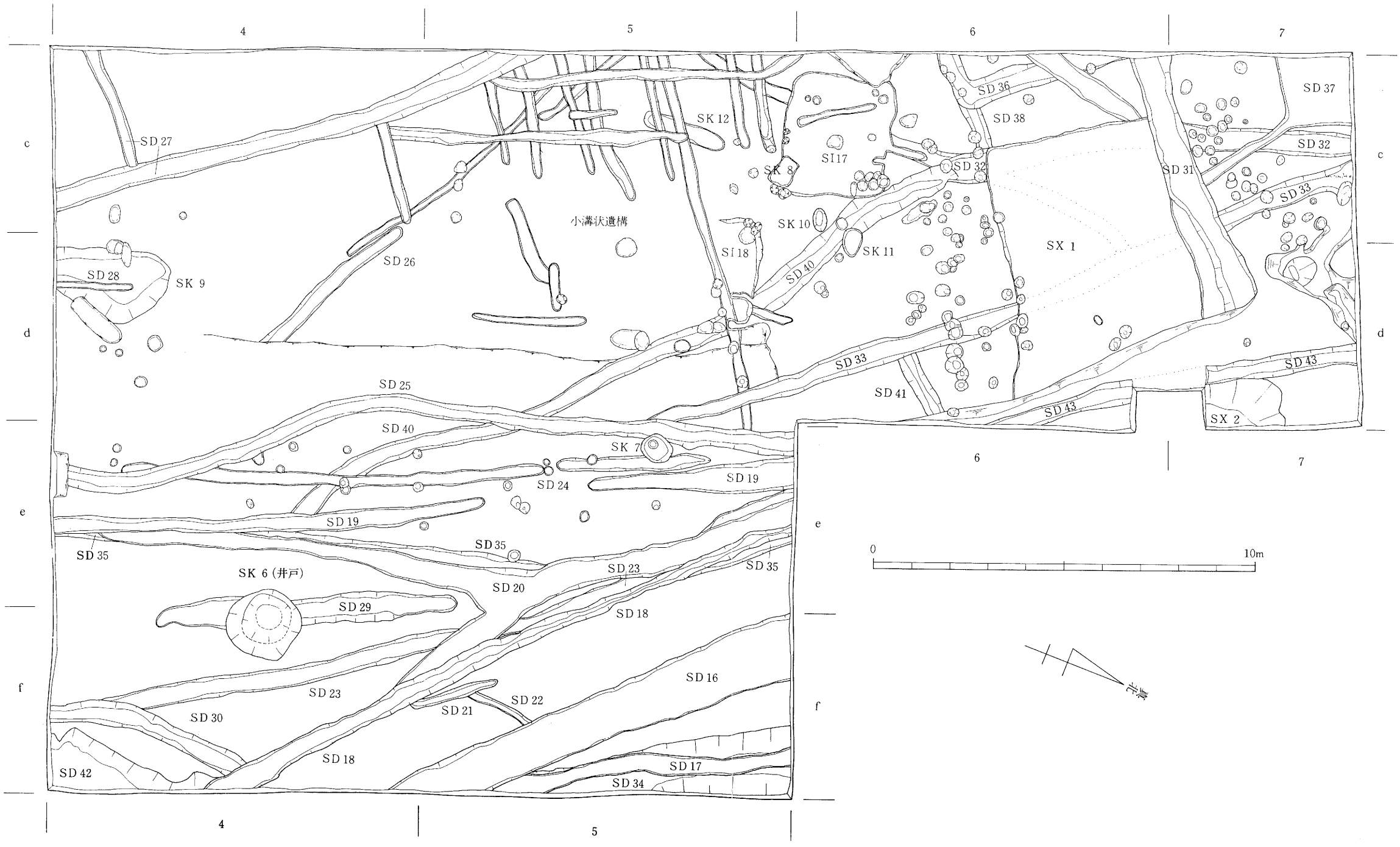
層・位	土　　色	土　　質	そ　の　他
Ⅰ－1	10YR4/4 褐　色	砂質シルト	しまりがない
Ⅰ－2	10YR4/4 褐　色	砂質シルト	酸化鉄，マンガン粒を少量含む
Ⅱ	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	
Ⅲ	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む
A	10YR6/4 にぶい黄橙色	砂質シルト	酸化鉄を少量含む
B	10YR5/3 にぶい黄褐色	シ　ル　ト	酸化鉄を含ふ，粘性が強い
C	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む
D	10YR3/3 暗褐色	シ　ル　ト	酸化鉄を含む
a	10YR4/2 灰黄褐色	シ　ル　ト	酸化鉄を含む，粘性有り
b	10YR6/3 にぶい黄橙色	シ　ル　ト	酸化鉄を含む，粘性有り
X	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む
Y	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む，しまりが強い

第５図　調査区南壁土層断面図

Ⅴ．発見遺構と遺物

本調査区における発見遺構は、竪穴住居跡２軒（ＳＩ17．18）、井戸跡１基を含む土壙７基（ＳＫ６～12）、溝28条（ＳＤ16～43）、小溝状遺構（17条１群）、ピット146個がある。

各遺構の概要は次の通りである。



第6図　第3次調査区遺構配置図

1．住　居　跡

（1）17号住居跡

〔平面形、保存状況、重複〕　南東角付近を８号土壙に切られ、北西角付近を攪乱壙により削平されているが、比較的保存状況は良い。平面形は、東西軸がやや長いが、ほぼ方形を呈す。重複関係は、32、40号構、小溝状遺構（ＮＥ－ＳＷ１）を切っており、８号土壙に切られている。また、住居跡の埋没過程において、堆積土の11層上面から掘り込まれた溝が、住居跡の西寄りに、幅20cm、長さ220cmに渡って検出された。

〔規模〕　17号住居跡は、南北軸2.85m、東西軸3.20m を計る。かなり小規模な竪穴住居跡である。

〔堆積土〕　堆積土は５～15cm程度残存する。全体的に自然堆積の状況を呈し、壁際付近では土層の細分が可能であったが、中央付近は、全体的に暗褐色のシルト層が分布している。カマド部分の堆積土には焼土や炭化物が少量含まれているが、一般的なカマドの周辺の状況と比較すると、その密度は非常に低いようである。

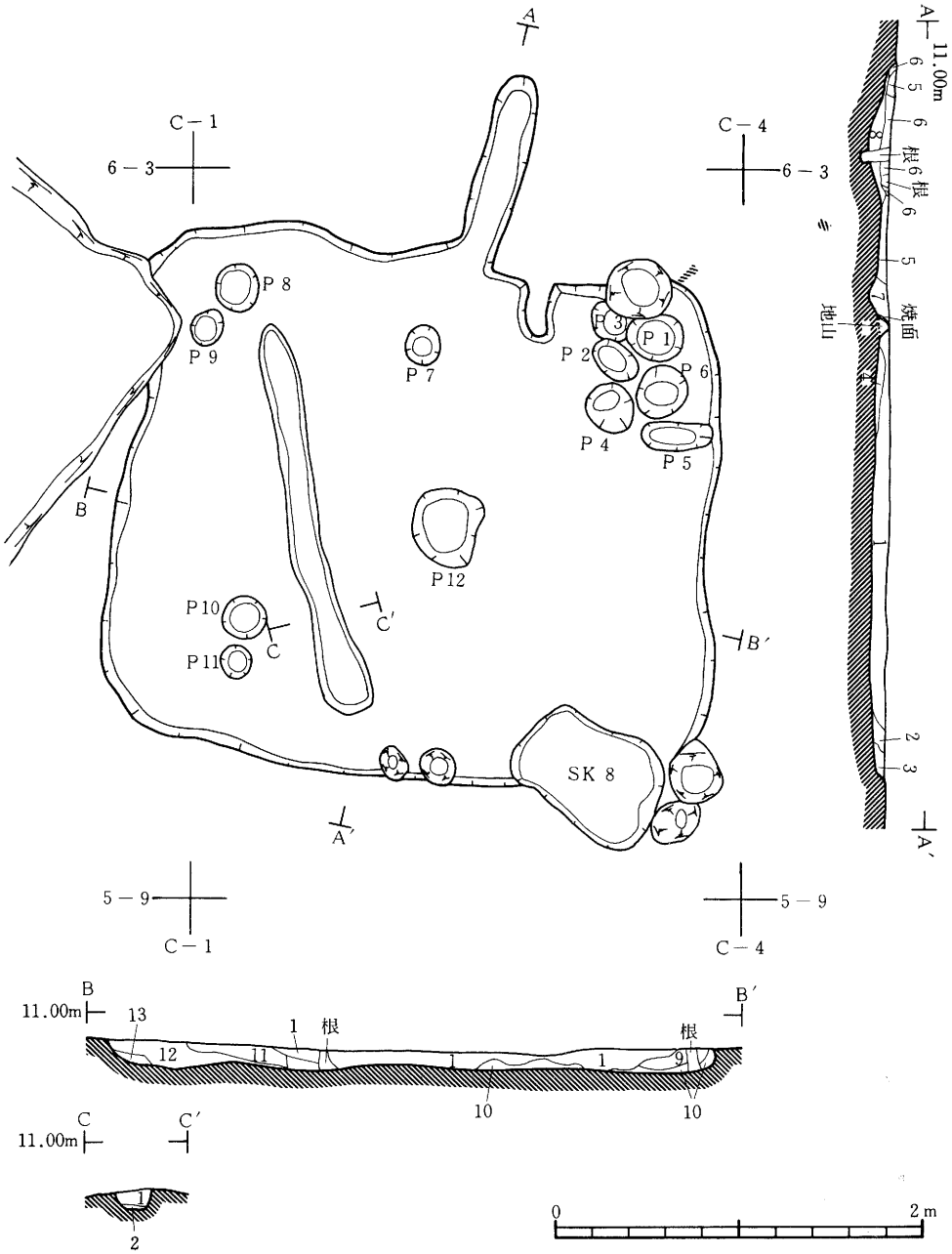
〔壁、床面〕　壁面は、四辺とも緩い凹凸が認められる。床面からの立ち上りは丸味をもって立つが、その傾斜は緩い所と急な所がある。床面はほぼ平坦である。中央付近は、かなり良くしまっているが、壁面に近くなるにつれて、ややしまりなくなってくる。

〔柱穴〕　ピットは東北角付近に６個、西北角付近に２個、南西角付近に２個、カマド付近に１個、住居跡中央に１個の計12個検出された。各角のピットは、柱穴になる可能性もあるが、柱痕跡の検出できたものはなく、また南東角にはピットが検出されなかったので、柱穴と断定することはできない。

〔カマド〕　カマド本体は残存していないが、煙道の底面付近と、カマド右袖の基底部が残っている。煙道は幅25cm、長さ110m を計り、北壁の中央よりやや東に寄った所に接続している。煙道の中軸線は、住居跡の東辺及び西辺からそれぞれ約150cm（５尺）、約180cm（６尺）の所に位置する。カマド本体は、右袖の基底部が幅20cm、長さ34cmの範囲で残っている。カマドの焼土面は完全に失われ、その痕跡も残っていない。

〔遺物出土状況〕　堆積土中からの遺物出土量は少なく、土師器及び須恵器片が11点出土したにすぎない。床面からは実測可能な土師器２個体と須恵器１個体分及び小破片が26点出土した。実測図に示した３個体は、全て住居跡東壁中央付近からまとまって出土したものである。須恵器甕は上部を大きく欠損しているが、正立の状態で出土し、土師器２個体は、この須恵器の北側に横転しかかった状態で出土した。

〔出土遺物〕　土師器甕１は深鉢に近い形態のもので、体部と口縁部の境がわずかに緩くくび



17号住居跡観察表

規　模	方　向	壁残存高	カ マ ド	周　溝	主柱穴	重　複	備　考
南北軸2.85m 東西軸3.20m 面　積9.12㎡	南　北　軸 N－6°－W 東　西　軸 N－96°－W	東4～7cm 西5～11cm 南2～7cm 北2～8cm	位置 北壁中央付近 燃焼部　不明 煙　道　111×24	な　し 床面標高 10.72m	不　明		

第7図　17号住居跡実測図

17号住居跡

	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
平面形	円形	楕円形	円形	円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	楕円形
規模	30×26	28×17	25×24	29×25	49×26	30×27	22×19	26×25	22×19	25×24	18×17	46×41
深さ	7	16	6	29	10	25	12	21	5	7	4	19
堆積土	シルト	シルト	シルト	シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト

17号住居跡

層位	土色	土質	その他
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	焼土を微量に含む　しまり有り
2	10YR5/6 褐色	粘土質シルト	しまり有り
3	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	明黄褐色土のブロックに含む　しまり有り
4	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	炭化物を微量に含む　しまり有り
5	10YR5/6 褐色	粘土質シルト	明黄褐色土焼土，炭化物を混入　しまり有り
6	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化物，焼土混入　しまり有り
7	10YR3/4 暗褐色	シルト	焼土混入　しまり有り
8	10YR5/6 褐色	粘土質シルト	しまり有り
9	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化物，灰，焼土混入　しまり有り
10	10YR5/4 褐色	シルト	しまりやや有り
11	10YR5/4 褐色	粘土質シルト	しまり有り
12	10YR3/4 灰黄褐色	粘土質シルト	しまり有り
13	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	しまり有り

17号住居跡　小溝セクション東西ベルト

層位	土色	土質	その他
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	ややしまり有り
2	10YR5/4 黄褐色	砂質シルト	やや粘性有り　ややしまり有り

れている。底部には木葉痕が認められ、ロクロは使用されていない。土師器甕２は、１より小形で、体部と口縁部の境は著しくくびれ、口縁は強く外反する。１と同様に底部に木葉痕を有し、ロクロは使用されていない。１、２ともロクロは使用されていないが、時期的には表杉ノ入式期（平安時代）のものと考えられる。須恵器甕３は、底部から体部中程までの破片で、赤褐色に焼けており、かなり軟質である。

（２）18号住居跡

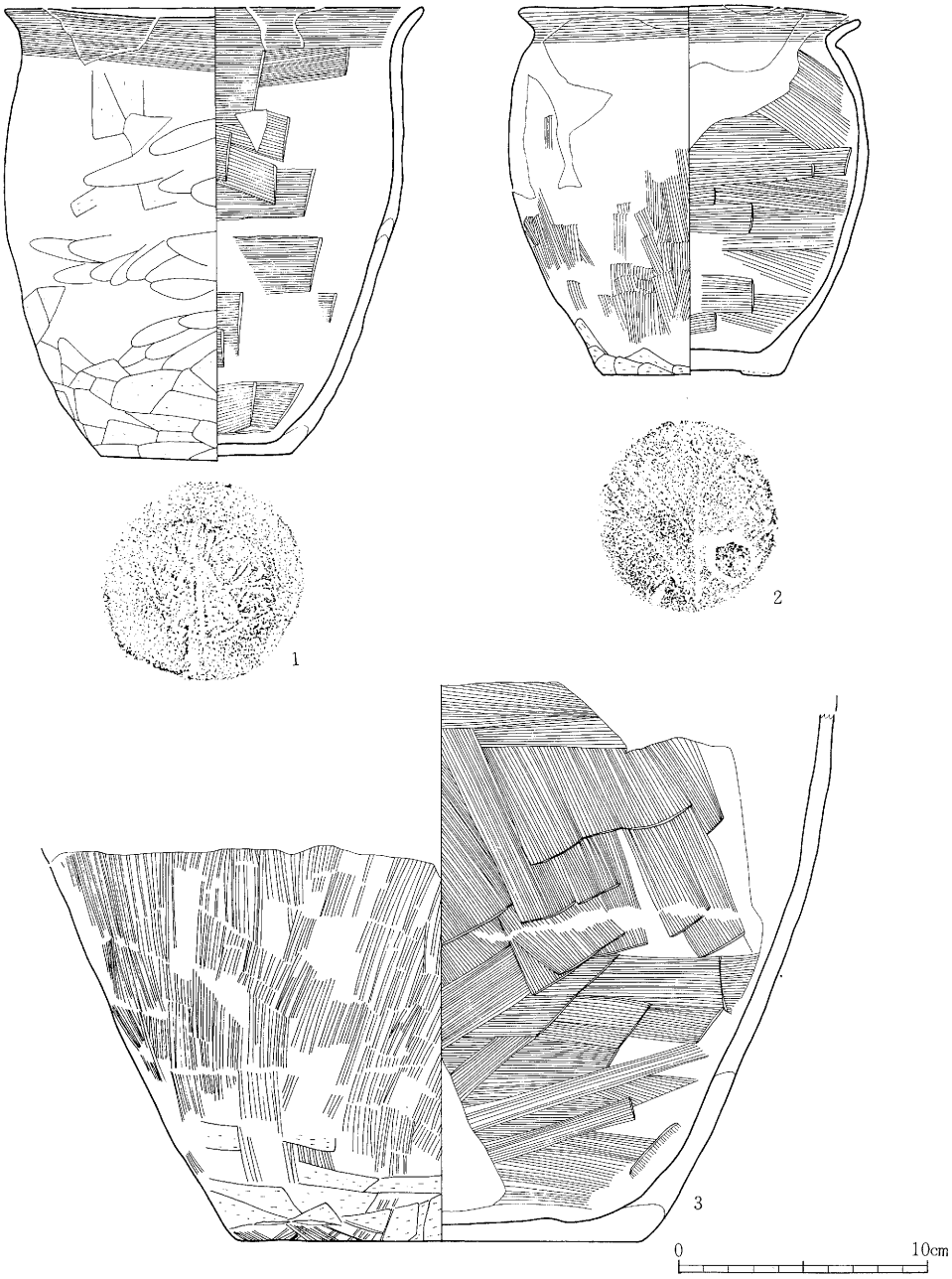
〔平面形、保存状況、重複〕　カマドの周辺部及び北壁の西側が部分的に残存するだけの住居跡で、保存状況が極めて悪い。北西角がほぼ直角に折れていることから、平面形は正方形または長方形と考えられる。重複関係は40号溝及び小溝状遺構（ＳＷ７）を切っている。

〔規模〕　北壁の西半と、西壁の北端を除く四壁のほとんどが失われているために、その規模は明らかでない。ただし、ピット１～９及び１号土壙はこの住居跡に関係すると思われるので、南北４ｍ、東西3.5m を超えるものと推察される。

〔堆積土〕　住居跡全体が削平されているため、堆積土が残っていたのはカマド周辺の極めて限られた部分である。この部分は、カマドを反映して、焼土及び炭化物の混入する割合が多くなっている。

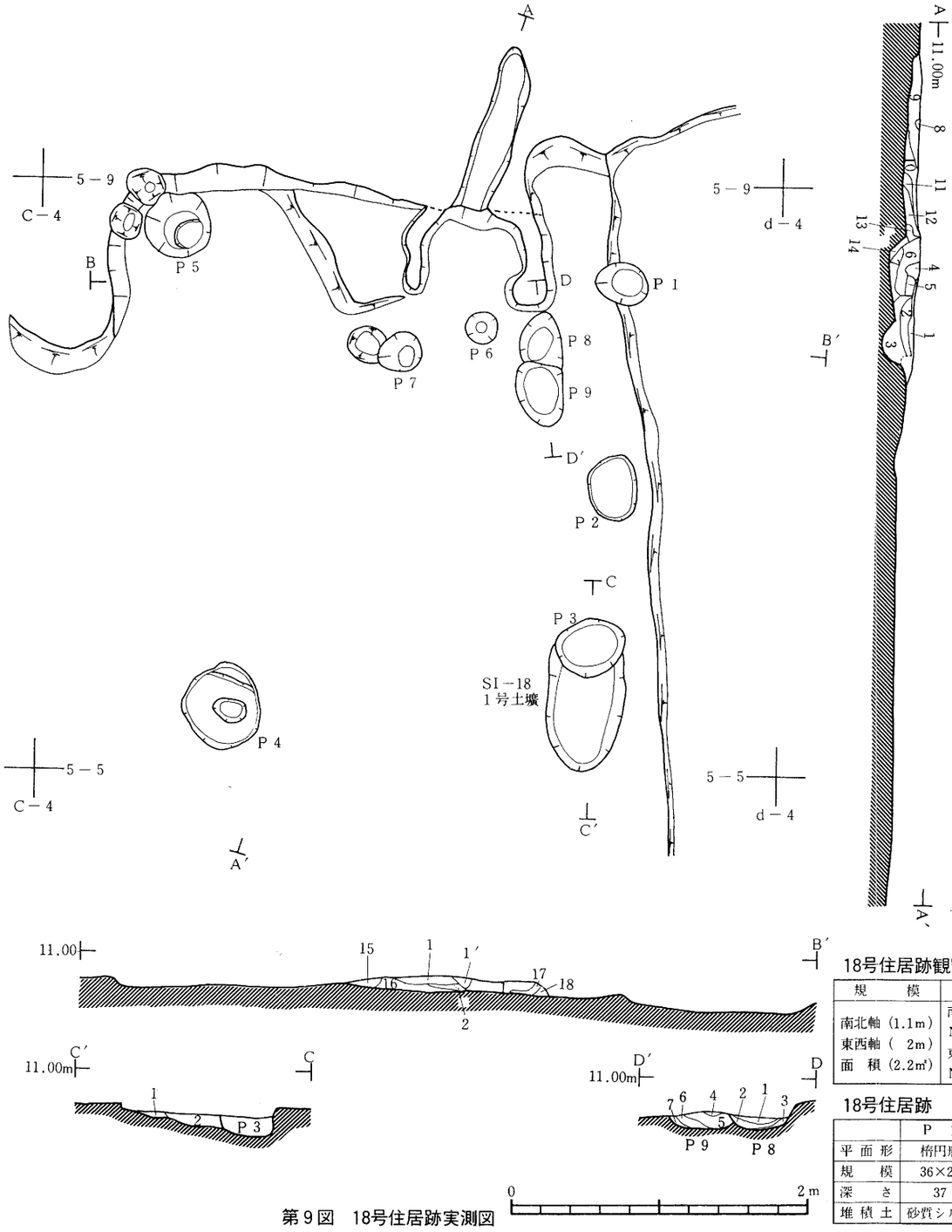
〔壁、床面〕　壁は、残存部分では緩やかな立ち上りを呈している。床はカマドの西側にわずかに残っているだけであり、他の部分については削平により不明である。

〔柱穴〕　ピットは９個検出されたが、柱痕跡が認められたものはない。配置関係からみると、各角に位置する、または位置すると思われるＰ１、３、４、５を柱穴と考えることもできるが、配列が不規則であるために、この住居跡の柱穴となりうるかどうか不明である。



遺物No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
1	土師器	甕	床	ヨコナデ	ナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	18.1	16.8	7.9	⅔		55－2
2	土師器	甕	床	ヨコナデ	ハケ目	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	14.8	13.6	7.1	完		55－1
3	須恵器	甕	床		タタキ目	ヘラケズリ		ヘラナデ	ヘラナデ	(22.3)		16.3	⅓		55－6

第8図　17号住居跡出土遺物



第９図　18号住居跡実測図

18号住居跡

層位	土色	土質	その他
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	焼土、炭化物をつぶ状に含む，黄褐色土を含む
1′	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	焼土，炭化物をつぶ状に含む
2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	焼土，炭化物のブロックを含む，黄褐色土を含む
3	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	黄褐色土を含む
4	10YR3/4 暗褐色	シルト	焼土，炭化物をつぶ状に含む
5	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	焼土，炭化物をつぶ状に含む
6	10YR3/3 暗褐色	シルト	焼土，炭化物のブロックを含む　土器片を含む
7	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	
8	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	
9	10YR5/4 褐色	シルト	土器片を含む
10	10YR3/4 暗褐色	シルト	焼土，炭化物をつぶ状に少量含む　黄褐色土を含む
11	10YR5/4 褐色	シルト	
11	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	黄褐色土を含む
13	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	
14	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物をつぶ状に含む　黄褐色土を含む
15	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	焼土をつぶ状に含む　マンガン粒を含む
16	10YR4/4 褐色	シルト	
17	10YR3/4 暗褐色	シルト	黄褐色土を含む
18	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	マンガン粒を含む

18号住居跡　１号土壙

層位	土色	土質	その他
1	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	褐色土のブロックを含む
2	10YR5/6 黄褐色	シルト	褐色土の小ブロックを含む

18号住居跡　8.9ピット

層位	土色	土質	その他
1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	少量の炭化物，酸化鉄を含む
2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	
3	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色土を含む
4	10YR3/3 暗褐色	シルト	焼土，炭化物をブロックに含む
5	10YR4/3にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を少量含む
6	10YR4/4 褐色	シルト	酸化鉄を微量含む
7	10YR5/4にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄を少量含む

18号住居跡観察表

規模	方向	壁残存高	カマド	周溝	主柱穴	重複	備考
南北軸（1.1m） 東西軸（ 2m） 面積（2.2㎡）	南北軸 N－4°－W 東西軸 N－94°－W	東なし 西5～6㎝ 南なし 北3～8㎝	位置 北壁中央付近 燃焼部 72×65㎝ 焼道 115×27	なし 床面標高 10.73m	不明		南半削平

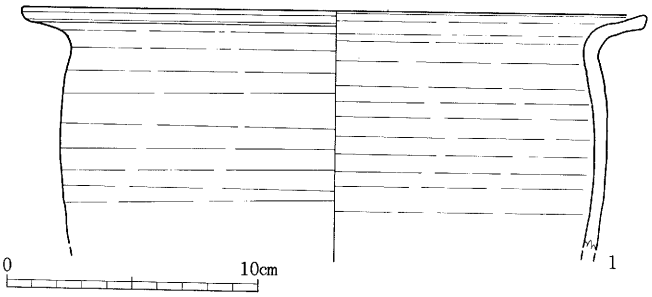
18号住居跡

	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9
平面形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	円形	円形	楕円形	楕円形	楕円形
規模	36×28	42×34	48×38	54×52	46×46	22×22	30×27	34×28	46×45
深さ	37	5	19	12	32	12	13	8	10
堆積土	砂質シルト	シルト	シルト	シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	シルト	シルト

〔カマド〕　カマドは住居跡北壁（中央付近と思われる）に付設され、煙道の底部とカマド本体の両袖基底部が残存している。煙道は、幅25cm前後、長さ115 cmを計る。煙道の中軸線は、住居跡及びカマド本体の中軸線よりやや東に傾いている。袖部は右側が幅20cm（焚口付近は幅35cm)、左側が幅15～20cmで、床面よりの高さが15cm前後残存している。残存寸法は、幅が内側で63cm、外側で105 cm、奥行きは63cmを計る。燃焼部の焼面は全く残存していない。

〔遺物出土状況〕　出土した遺物は、全て小破片で、カマド内、煙道内の堆積土中から出土したものがほとんどである。床面からは内黒の土師器坏の底部付近の破片が１点出土しただけである。

〔出土遺物〕　出土遺物は全て小破片であるため、実測できたのは図示した土師器甕が１点あるだけである。器面はロクロ調整され、体部と口縁部の境付近がわずかに緩くくびれ、口縁部は強く外反し、口唇部は外側に向いて平坦になっている。床面から出土した土師器坏の底部には糸切り痕が認められるので、これらの出土土器は表杉ノ入式期と考えられる。



遺物No.	種	器形	外面調整			内面調整			法量			残存	分類	写真図版
			口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
1	土師器	甕	ロクロ	ロクロ		ロクロ	ロクロ		(9.4)	25.0		1/6		

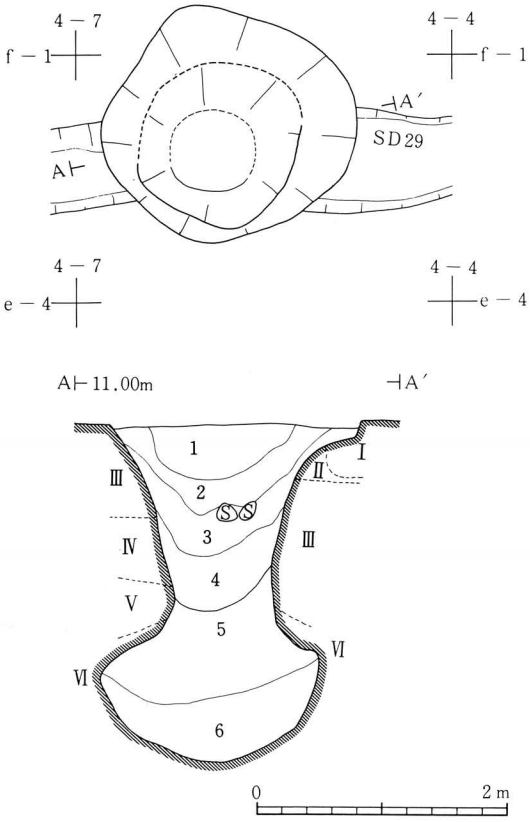
第10図　18号住居跡出土遺物

2．土　　壙

（1）６号土壙（井戸跡）

〔平面形、断面形、重複、規模〕　平面形は確認面で長軸203 cm、短軸190 cmの不整円形を呈す。底面は、確認した範囲で直径60cm、推定約70cmの円形を呈する。断面形は、確認面からの深さ140 ～160 cmまでは立ち上りの急な擂鉢状を呈するが、ここから下は壁面の地山が砂を多く含むために崩落し、壁面が深くえぐられて偏平な球形を呈する。このため、全体的な断面形は、頚の長い壺のような形状を呈している。深さは確認面から270 cmを計る。29号溝を切っている。

〔堆積土〕　堆積土は５層に分けられたが、これは更にグライ化の弱い１～４層までの上部堆積土層と、グライ化が進行し、水分を多く含む５～６層の下部堆積土層とに大別される。上部



第11図　6号土壙（井戸跡）実測図

堆積土層中には、近世瓦、無釉陶器、施釉陶器片をはじめ、土師器、須恵器片等、多くの遺物が含まれているが、下部堆積土中には植物遺体が多く含まれるだけで、他の遺物はほとんど含まれない。

〔出土遺物〕　人工遺物としては石臼の破片、二次加工痕のある剝片・土師器・須恵器・無釉陶器の擂鉢・施釉陶器の皿、古代及び近世の瓦が出土している。自然遺物としては、直径5cm程の木片をはじめとする多くの植物遺体と、カラス貝の貝殻（外皮）がある。

層位	土　色	土　質	そ の 他
1	10YR 4/3にぶい黄褐色	砂質シルト	小石混入
2	10YR 4/2 灰 黄 褐 色	粘土質シルト	5cm台石混入
3	10YR 3/3 暗　褐　色	砂質シルト	18cmぐらいの石混入
4	10YR 3/1 黒　褐　色	粘土質シルト	
5	10YR 4/1　灰　色	粘土質シルト	木片を多量に含む
6	10YR 3/1 暗 緑 灰 色	粘土質シルト	
Ⅰ	10YR 4/2 灰 黄 褐 色	粘土質シルト	
Ⅱ	10YR 6/4にぶい黄橙色	砂質シルト	
Ⅲ	10YR 6/4にぶい黄橙色	砂質シルト	暗褐色土を含む
Ⅳ	10YR 5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	
Ⅴ	10YR 6/3にぶい黄橙色	粘土質シルト	
Ⅵ	10YR 6/4にぶい黄橙色	砂質シルト	

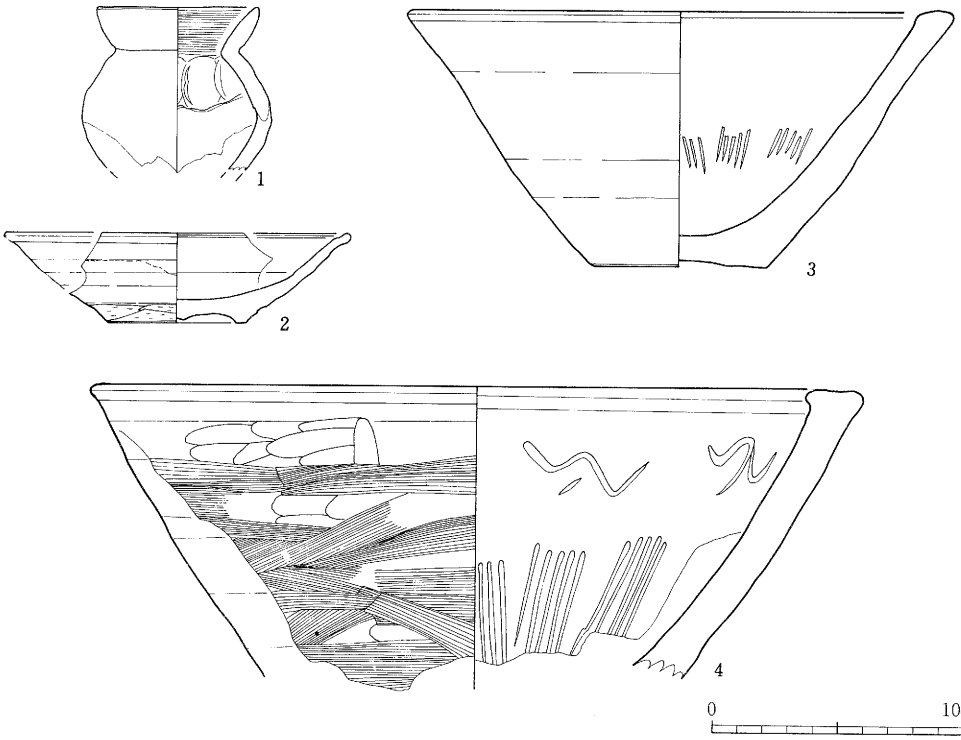
（2）7号土壙

〔平面形、断面形、重複、規模〕

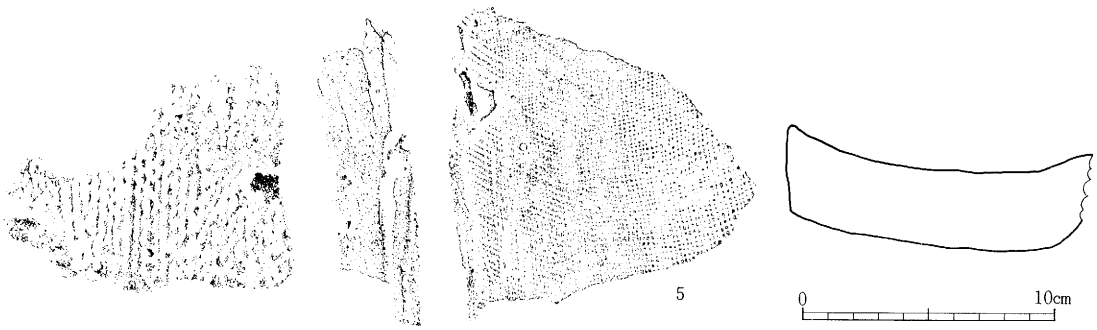
平面形は確認面で長軸83cm、短軸69cmの不整円形を呈し、断面形は舟底状を呈し、深さ16cmを計る。24、25号溝を切っている。底面の東南寄りに直径25cm、深さ14cmのピットがある。

〔堆積土〕　3層からなり、大部分は炭、焼土を含む黒褐色シルトであるが、壁面には、にぶ

写真1　6号土壙（井戸跡）断面

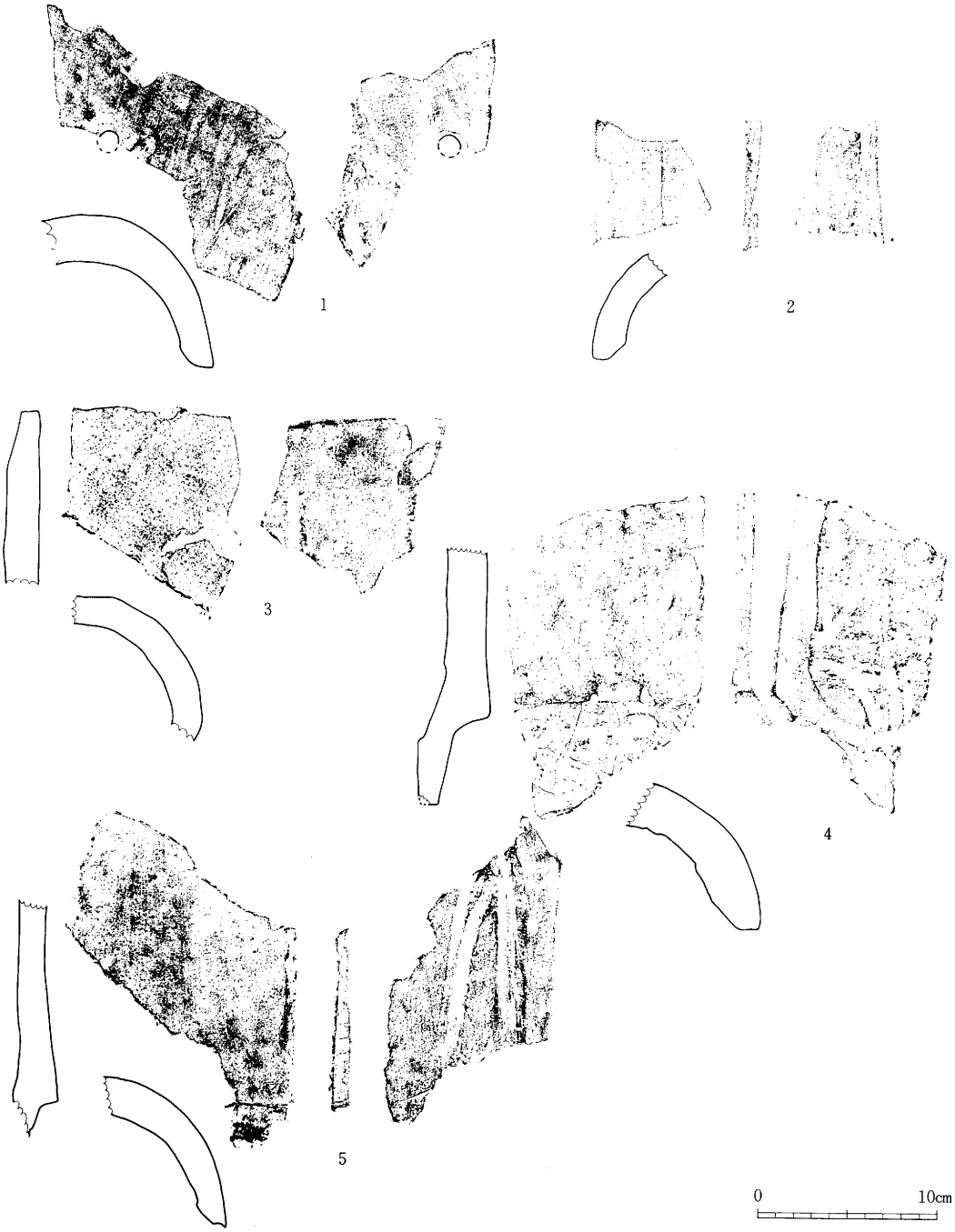


遺物No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
1	土師器	坩	1～2層				ヨコナデ	ナデツケ		6.5	6.4		⅓		
2	施釉陶器	坏	1～4層	ロクロ	ロクロ	ケズリ出し	ロクロ	ロクロ	ロクロ	3.6	13.6	5.4	¼		56－3
3	無釉陶器	擂鉢	5層					筋目		10.2	31		¼		
4	無釉陶器	擂鉢	4層	ヘラナデ	ヘラナデ		ロクロ	筋目		(11.6)	21.2	7.4	¼		56－1，2



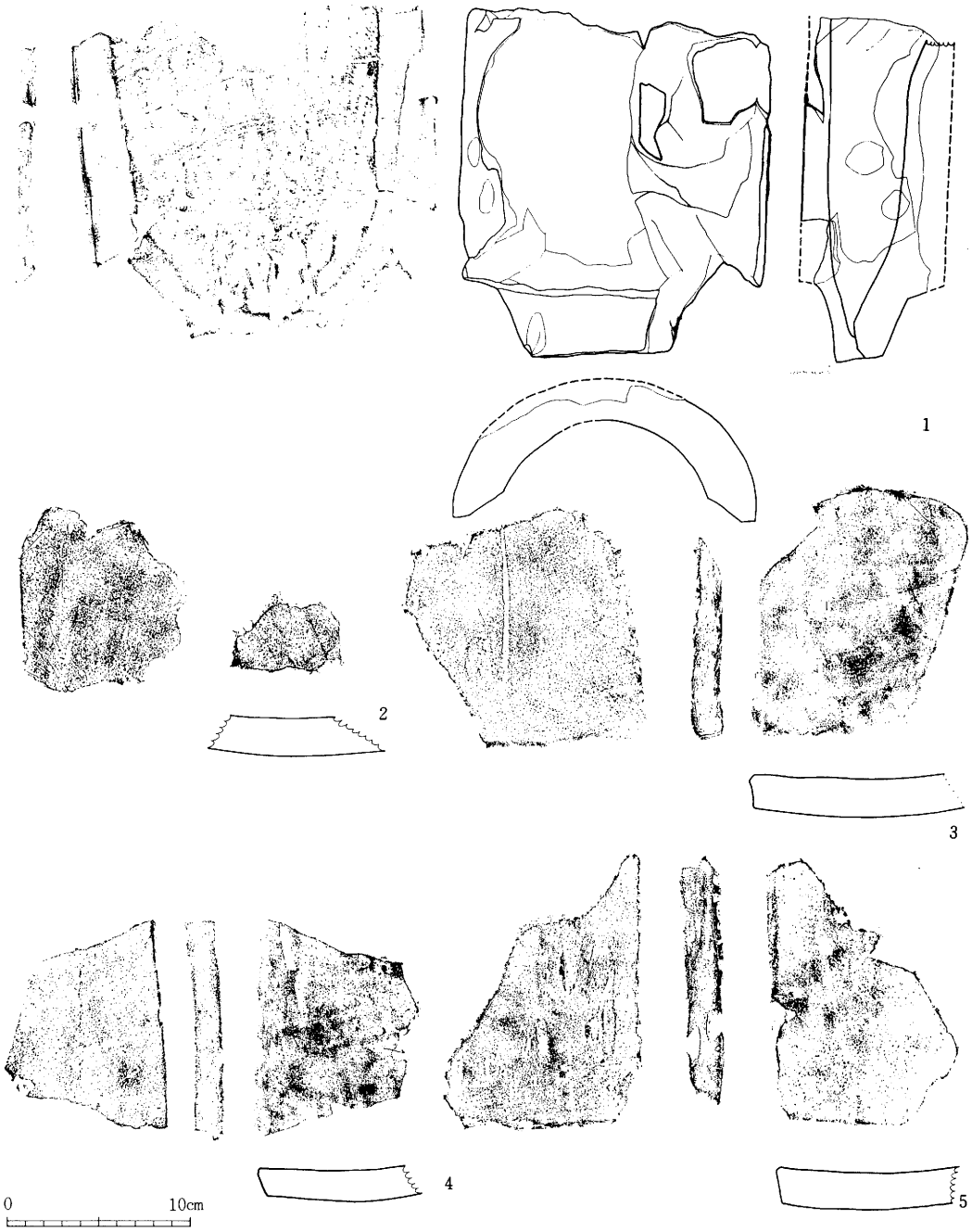
遺物No.	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	法量			残存	時期	写真図版
						長さ	幅	厚さ			
5	瓦	平瓦	表土	布目	縄目	(12.1)	(12.2)	3.1		古代	

第12図　6号土壙(井戸跡)出土遺物(1)



遺物No.	種別	器種	層　位	外面調整	内面調整	法　量			残存	時　期	写真図版
						長さ	幅	厚さ			
1	瓦	丸瓦	1～2層	ヘラナデ	布　目	(9.3)	(12.1)	2.6		近　世	57−4, 5
2	瓦	丸瓦	2 層	ヘラナデ	布　目	(7.0)	(6.6)	1.6		近　世	
3	瓦	丸瓦	2 層	ヘラナデ	布目・ヘラナデ	(7.6)	(10.4)	1.7		近　世	
4	瓦	丸瓦	1～2層	ヘラナデ	布　目	(14.2)	(8.0)	2.5		近　世	
5	瓦	丸瓦	1～2層	ヘラナデ	布目・ヘラナデ	(13.2)	(8.5)	2.1		近　世	

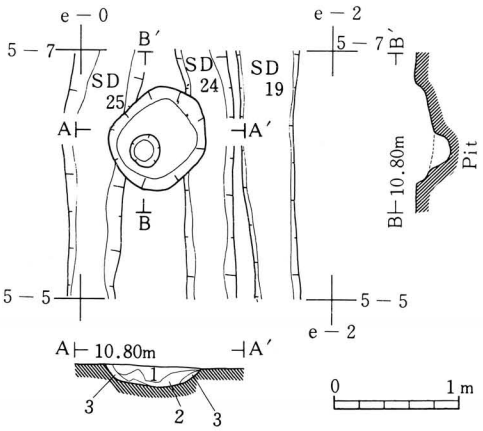
第13図　6号土壙(井戸跡)出土遺物(2)



遺物No.	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	法量			残存	時期	写真図版
						長さ	幅	厚さ			
1	瓦	丸瓦	4 層	ヘラナデ	布 目	(17.6)	(16.5)	(7.9)		近 世	56−4, 5
2	瓦	平瓦	1〜5層	ヘラナデ	ヘラナデ	(10.2)	(9.6)	2.1		近 世	
3	瓦	平瓦	4 層	ヘラナデ	ヘラナデ	(13.1)	(11.2)	2.1		近 世	
4	瓦	平瓦	4 層	ヘラナデ	ヘラナデ	(12.0)	(7.9)	1.7		近 世	
5	瓦	平瓦	4 層	ヘラナデ	ヘラナデ	(14.4)	(11.0)	2.0		近 世	

第14図　6号土壙(井戸跡)出土遺物(3)

い黄褐色シルトが堆積する。壁面自体に焼けた痕跡はない。遺物の発見はない。



第15図　7号土壙実測図

層位	土　色	土　質	そ の 他
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	炭，焼土灰を多量に含む
2	10YR2/3 黒褐色	シルト	焼土を少量含む
3	10YR5/4にぶい黄褐色	シルト	
ピット	10YR4/4 褐色	シルト	

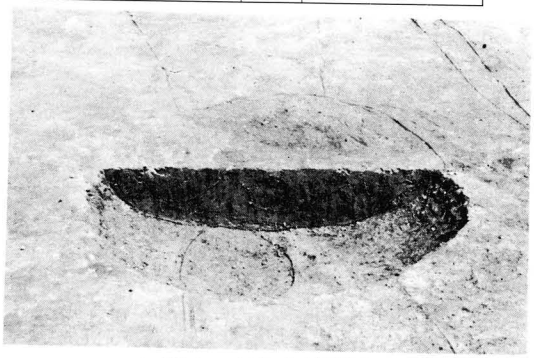


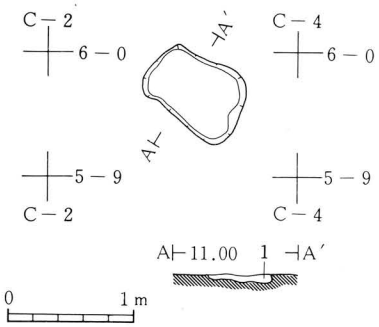
写真2　7号土壙断面

（3）8号土壙

〔平面形、断面形、重複、規模〕　平面形は長軸80cm、短軸57cmの不整方形を呈する。断面形は浅いU字形を呈し、(深さは4～6cmと浅い。)7号住居跡を切っている。

〔堆積土〕　灰黄褐色シルト1層の堆積で、明黄褐色のブロックを含む。遺物の混入なし。

層　位	土　色	土　質	そ の 他
1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	明黄褐色土をブロック状に含む 粘性やや有り　しまり有り



第16図　8号土壙実測図

（4）9号土壙

〔平面形、断面形、重複、規模〕　溝状を呈する土壙で、西辺は直線的に伸びているが、東辺の北側が大きく脹んで、不整形となっている。南側は調査区外へ伸びる。長軸は調査範囲で300cm、短軸190cmを計る。深さは中央部で24cmを計り、断面形は壁の立ち上りの緩い舟底形を呈する。東壁中央部を攪乱壙によって切られ、また、堆積土の上部を28号溝によって切られている。

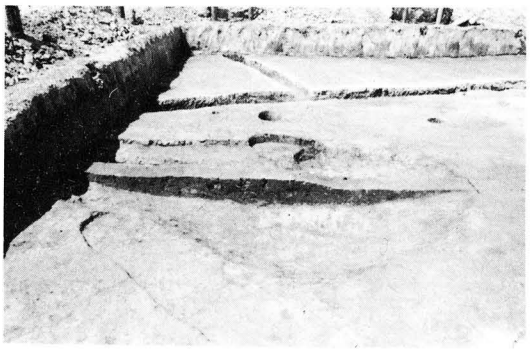
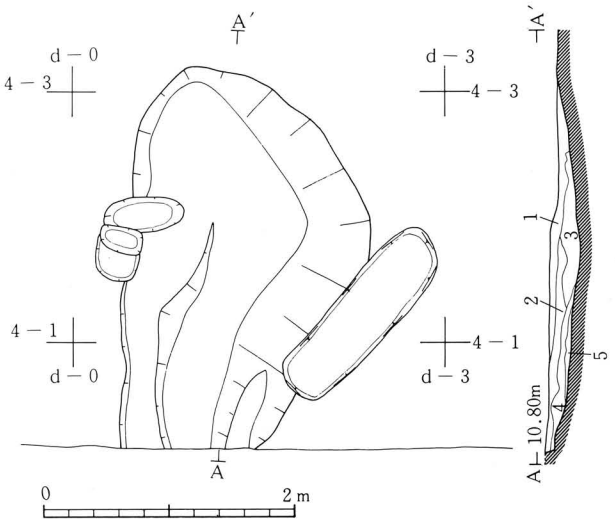


写真3　9号土壙断面

〔堆積土〕　南北ベルト位置で５層に分けられた。黒褐色、暗褐色の粘土質シルトが主体となり、部分的に暗褐色の砂質シルトが堆積する。出土遺物はない。



層位	土　色	土　質	その他
1	10ＹＲ3/2　黒褐色	粘土質シルト	しまり有り
2	10ＹＲ3/2　黒褐色	粘土質シルト	しまり有り
3	10ＹＲ3/2　黒褐色	粘土質シルト	しまり有り
4	10ＹＲ3/4　暗褐色	砂　質シルト	しまり有り
5	10ＹＲ3/4　暗褐色	粘土質シルト	しまり有り

第17図　９号土壙実測図▶

（５）10号土壙

〔平面形、断面形、重複、規模〕　平面形は、長軸58cm、短軸37cmを計る楕円形を呈する。断面形は、東壁側中央部で軽い段がつくが、略舟底形を呈し、深さは26cmを計る。重複はない。

写真４　10号土壙断面

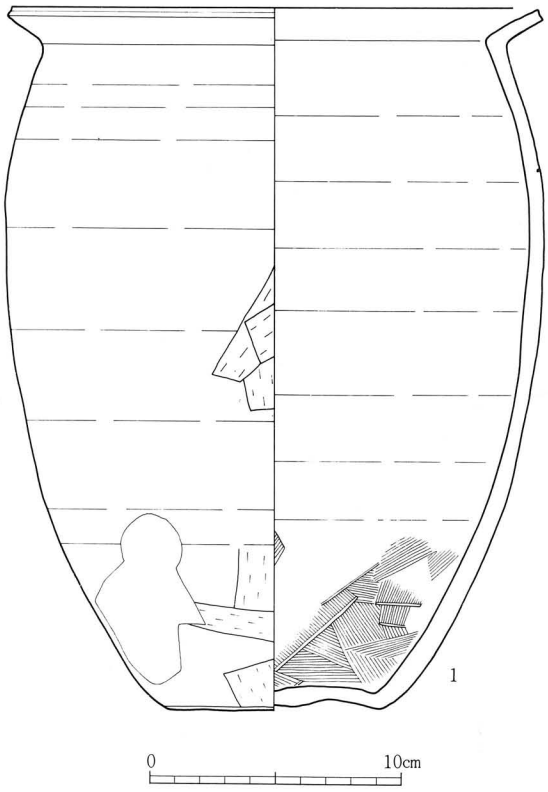
層位	土　色	土　質	そ　の　他
1	10ＹＲ2/3黒褐色	シ　ル　ト	
2	10ＹＲ3/3暗褐色	シ　ル　ト	
3	10ＹＲ3/3暗褐色	粘土質シルト	
4	10ＹＲ5/4褐　色	粘土質シルト	褐色土ブロックに暗褐色土混入
5	10ＹＲ5/4褐　色	粘土質シルト	暗褐色土を含む
6	10ＹＲ3/3暗褐色	粘土質シルト	暗褐色土を含む

第18図　10号土壙実測図▶

〔堆積土〕　６層に分けられた。このうち、第18図５、６層は、土壙内に横転していた状態で

出土した土師器甕で充満していた土層である。土壙の埋土は、褐色から黒褐色シルト、または粘土質シルトで、甕内の埋土は褐色及び暗褐色の粘土質シルトである。なお、出土時における甕の上部は、わずかに落ち窪んではいるものの、落ち込んだ形跡がないので、土壙に甕が入った時点で、すでに甕内にはかなり締まった状態で土がつまっていたと考えられる。これは、甕内埋土が縦方向に分層されることからも裏付けできるようである。

〔出土遺物〕　上記の通り、土師器甕が1点、横転した状態で出土した。器高が27.9cmあり、内外面ともロクロ調整され、その後、外面は一部ヘラケズリ、内面も一部ヘラナデ調整されている。

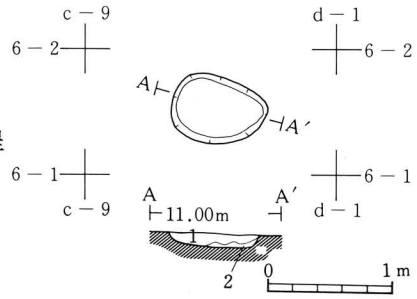


第19図　10号土壙出土遺物

遺物No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
1	土師器	甕		ロクロ	ロクロ	ヘラケズリ	ロクロ	ロクロ	ヘラナデ	27.9	21.2	8.6	4/5		55－3

（6）11号土壙

〔平面形、断面形、重複、規模〕　平面形は長軸73cm、短軸55cmを計り、楕円形を呈する。断面形は舟底状を呈し、深さは11cmを計る。40号溝を切っている。



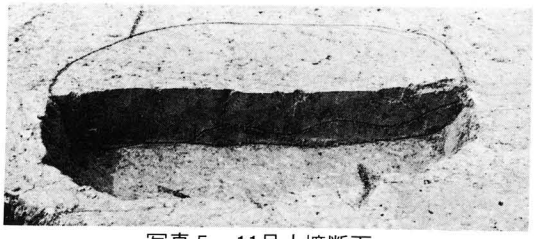


写真5　11号土壙断面

11号土壙

層位	土色	土質	その他
1	10YR4/4褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む
2	10YR4/6褐色	シルト	マンガン粒酸化鉄を少量含む

第20図　11号土壙実測図

〔堆積土〕　褐色の粘土質シルト及びシルトの２層からなる。

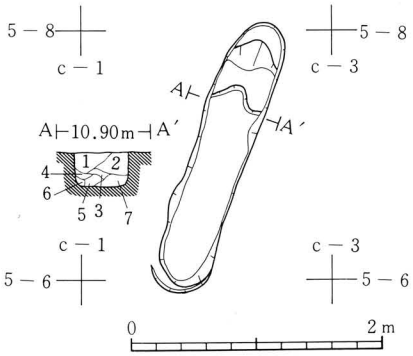
〔出土遺物〕　出土遺物は土師器の甕及び坏の小片が各１点出土したにすぎない。

（７）12号土壙

〔平面形、断面形、重複、規模〕　溝状の細長い楕円形を呈する。長軸 227 cm、短軸46cm、深さ27cmを計る。横断面はＵ字形を呈し、縦断面は両端部に軽い段を有するが、概ね舟底状を呈する。南北方向と東西方向の小溝状遺構（ＮＳ１、ＥＷ６、７）によって切られる。

〔堆積土〕　堆積土は７層に細分された。黒褐色シルトが主体で、壁下端部には褐色ないしにぶい黄褐色シルトが堆積している。

〔出土遺物〕　出土遺物には、外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキされた土師器坏が１片ある。



層位	土　色	土　質	その他
1	10ＹＲ3/2　黒　褐　色	シルト	ややしまり有り
2	10ＹＲ2/3　黒　褐　色	シルト	しまり有り
3	10ＹＲ3/2　黒　褐　色	シルト	
4	10ＹＲ3/2　黒　褐　色	シルト	酸化鉄を少量含む
5	10ＹＲ2/2　黒　褐　色	シルト	炭化物を少量含む
6	10ＹＲ4/3にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄を含む
7	10ＹＲ4/4　褐　色	シルト	酸化鉄を含み　しまりなし

第21図　12号土壙実測図

３．小溝状遺構

小溝状遺構は、調査区の西側中央部で18条検出された。検出範囲は東西９ｍ、南北12ｍに及ぶ。検出した18条のうち13条については、調査区の西側へ更に伸びている。27号溝、17、18号住居跡に切られており、12号土壙を切っている。

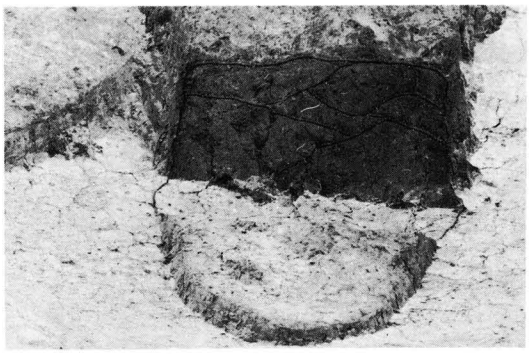
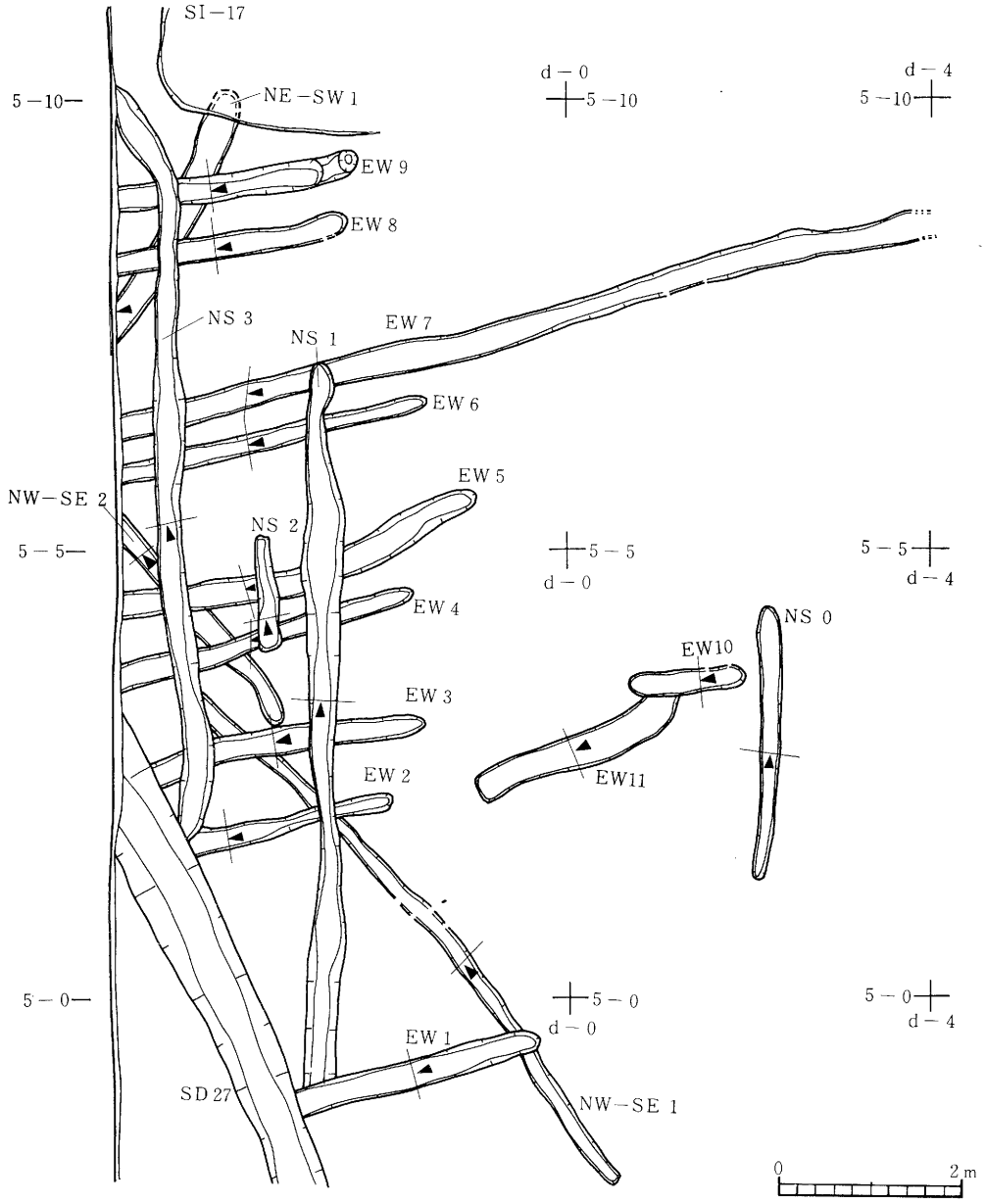


写真６　12号土壙断面

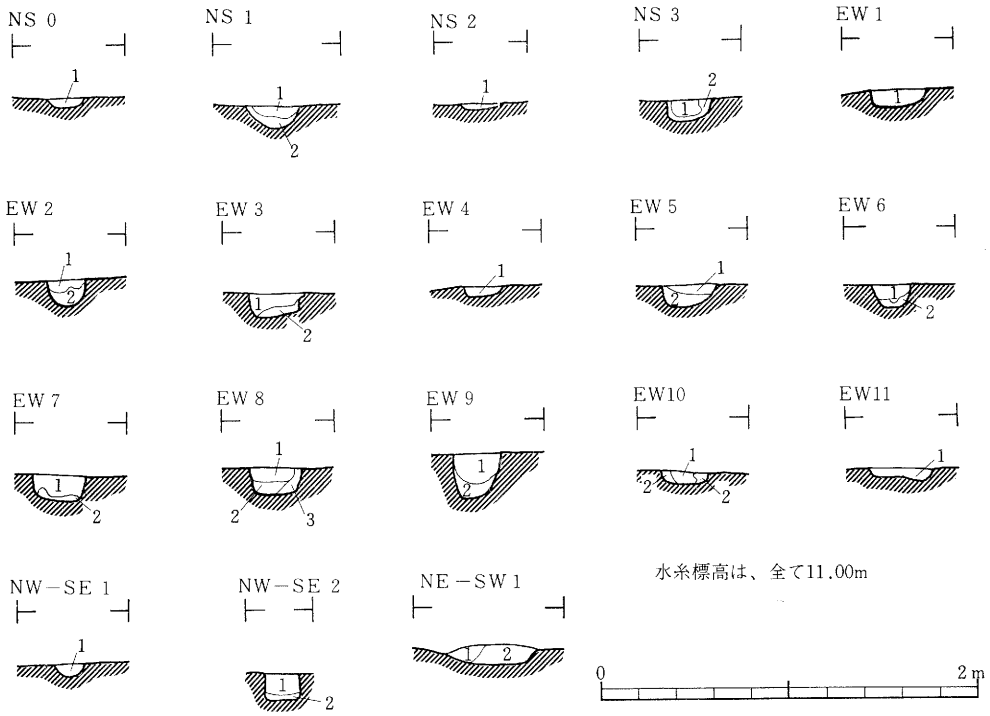
小溝状遺構の溝の上面幅は、最大で42cm、最小で18cmを計るが、平均すると30cm前後幅である。確認面からの深さは３cm～20cmと溝によって異なり、同一溝にあっても位置によって異っている。堆積土は、基本層と同質の褐色から黒褐色のシルト、または粘土質シルトが堆積しているが、この中に、地山と同質の小ブロックが比較的多く含まれるのが特徴である。水性堆積を示しているものはない。

18条の各小溝は、その方向によって四つのグループに分けることができる。第１は南北方向

のもの（NS０～３）、第２は東西方向のもの（ＥＷ１～９）、第３は北西－南東方向のもの（ＮＷ－ＳＥ１～２）、第４は北東－南西方向のもの（ＮＥ－ＳＷ１）である。これら４グループは、各グループのまとまりによる新旧の関係がある。南北方向のものが新しく、次に東西方向のもの、続いて北西－南東方向及び北東－南西方向の順になっている。北西－南東方向と北東－南

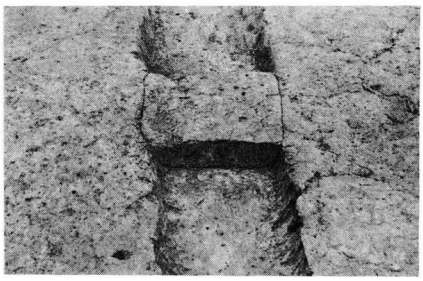


第22図　小溝状遺構平面実測図

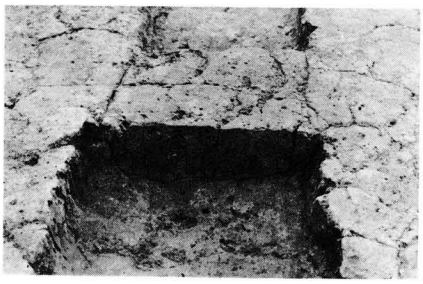


方向	層位	土色	土質	その他
南一北 (NS)	0－1	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	黄褐色土のブロックを多く含む
	1－1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	焼土マンガン粒を微量含む
	1－2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	褐色土のブロックを多く含む
	2－1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	褐色土のブロックを多量に含む
	3－1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	褐色土の小ブロックを少量含むむ
	3－2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	褐色土のブロックを多量に含む
東一西 (EW)	1－1	10YR4/4 黄褐色	シルト	酸化鉄を含む，褐色土のブロックを含む
	2－1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	褐色土のブロックを少量含む
	2－2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	まだら状に黄褐色土を含む
	3－1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	褐色土のブロックを含む酸化鉄を少量含む
	3－2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む
	4－1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	褐色土をまだら状に含む
	5－1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	褐色土の斑点を含む
	5－2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	黄褐色土を小ブロック状に含む
	6－1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む，褐色土をまばらに含む
	6－2	10YR4/6 にぶい黄褐色	粘土質シルト	黄褐色土を小ブロックを含む
	7－1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	褐色土のブロックを含む
	7－2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	
	8－1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む
	8－2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	黄褐色を粒状に含む
	8－3	10YR5/6 黄褐色	シルト	マンガン粒を少量含む　粘性有り
	9－1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む
	9－2	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	暗褐色土をまばらに含む　酸化鉄を少量含む
	10－1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む　褐色土をまばらに含む
	10－2	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	酸化鉄マンガン粒を含む
	11－1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	下層の方に褐色土の小ブロックを含む
北西一南東 (NW－SE)	1－1	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む　黄褐色土をまだらに含む
	2－1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	
	2－2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む
北東一南東 (NE－SW)	1－1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	
	1－2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	暗褐色土を少量含む

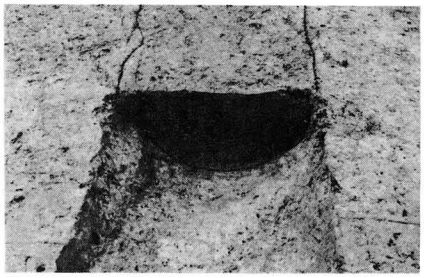
第23図　小溝状遺構断面実測図



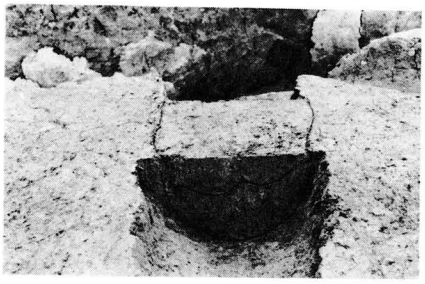
NS－0



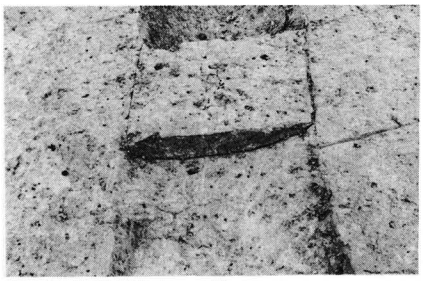
EW－1



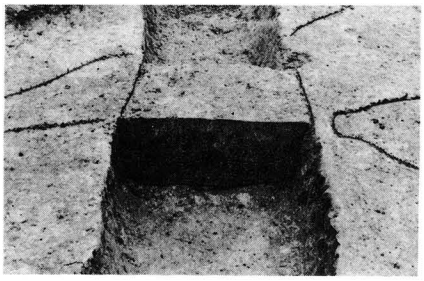
NS－1



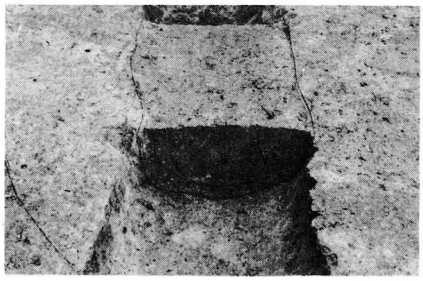
EW－2



NS－2



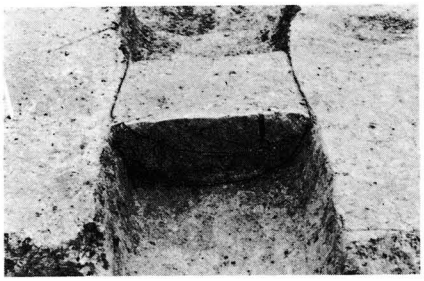
EW－3



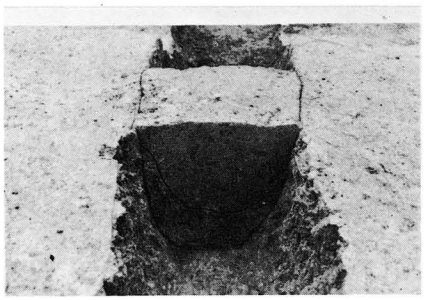
NS－3

EW－4

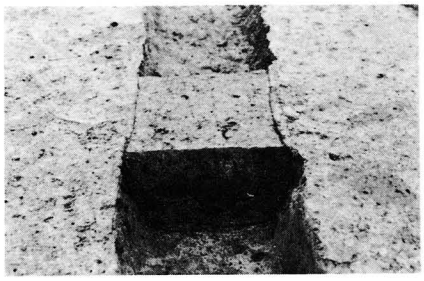
写真７　小溝状遺構断面（１）



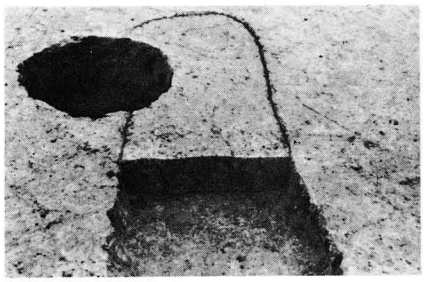
EW－5



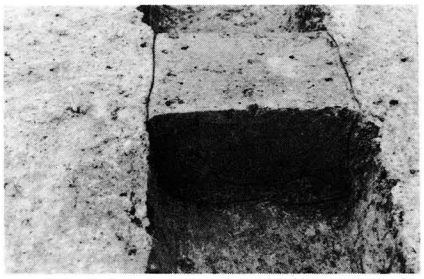
EW－9



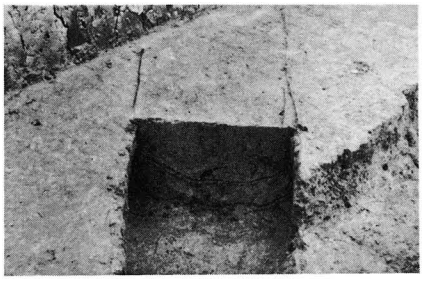
EW－6



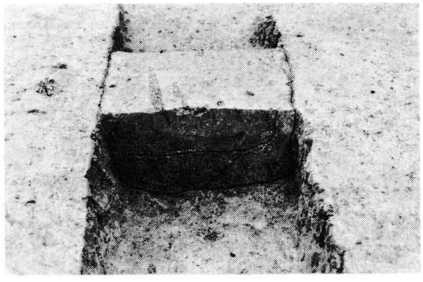
EW－10



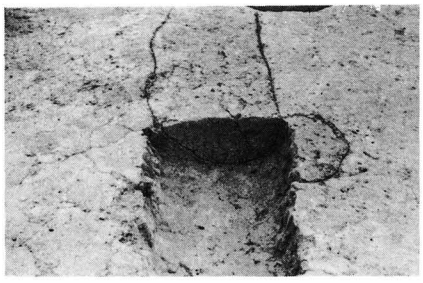
EW－7



NW・SE－2



EW－8



NE・SW－1

写真８　小溝状遺構断面（２）

西方向の小溝状遺構にも新旧の差があると考えられるが、調査区内では明らかにすることができなかった。また、東西方向のＥＷ１小溝状遺構は、上記の基本的新旧パターンと異なり、南北方向のＮＳ１を切り、最も新しく掘られたと考えられる。

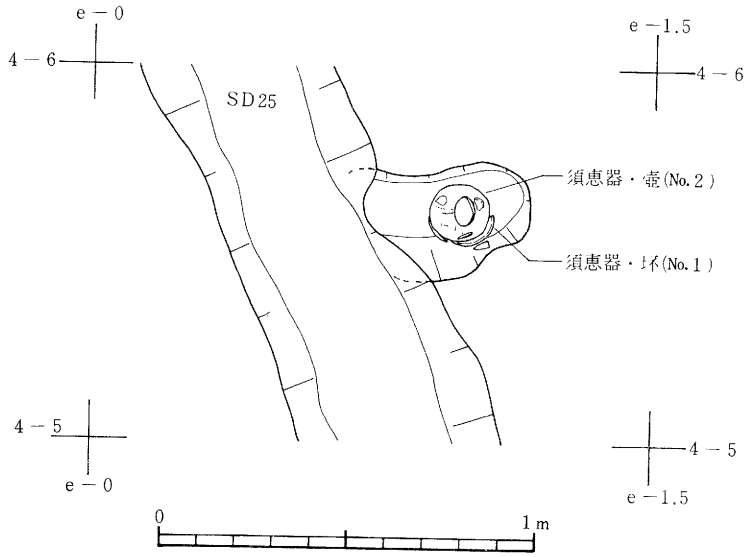
本調査における小溝状遺構は、２条１組と考えられるもの（ＥＷ２と３、ＥＷ４と５、ＥＷ６と７、ＥＷ８と９、ＮＳ１と２、ＮＷ－ＳＥ１と２）があり、一つの特徴となっている。このことについては後述する。

４．ピット

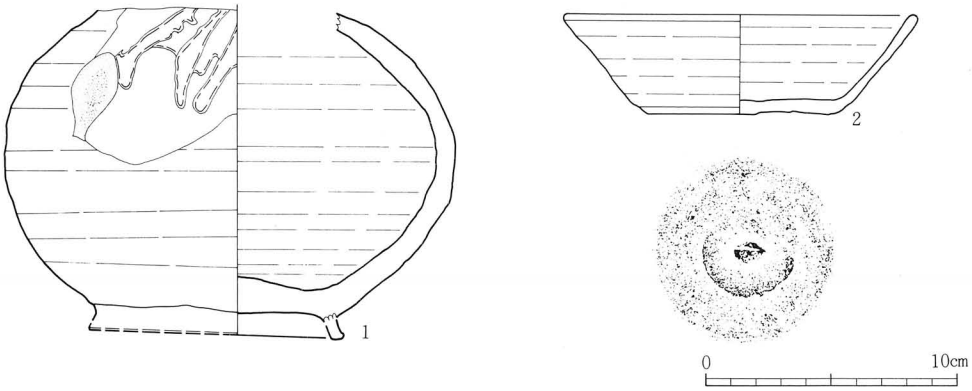
ピットは146個検出されたが、24号溝周辺のピット群のように列状を呈するものも見られたが、建物を構成するような明確なプランを確認できなかった。多くのピットの中にあって、ピット９からは特異な状況で遺物が出土している。

〈ピット９〉

25号溝を切る長軸（残存部）42cm、短軸22cmの不整楕円形を呈し、深さ30cmのピットであるが、この底面より須恵器２点が出土した。１点は口径14cm、器高４cmで、底面に回転ヘラ切り痕を有する坏で、他は、残存部高12.6cm、体部径18cmの壺である。壺は坏の上に重ねられた状態で出土している。坏は口縁の一部が欠損し、壺は長頸と考えられる口頸部が欠損している。両者の欠損部は埋納以前のものである。(写真55参照)



第24図　ピット９遺物出土状況図



遺物No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
1	須恵器	壺			回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ		ロクロ	ロクロ	(12.6)		(10.2)	⅔		55－5
2	須恵器	坏		ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	ロクロ	4.0	14.0	7.4	完		55－4

第25図　ピット９出土遺物

５．性格不明遺構

（１）１号性格不明遺構

〔平面形、規模、重複〕　西辺と、これに直角に接続する南辺が検出されたが、東辺は耕作によって削平を受けている。北側は31号溝の北側まで伸びているが、壁が立たず、範囲は不明であった。検出部分の状況から判断すると方形プランと考えられる。重複関係は、31、32、33、39号の各溝を切っている。残存部での規模は、南北６ｍ以上、東西6.5m 以上である。

〔壁、底面〕　壁面は、西壁は直線的に伸びているが、南壁は中央部分が内側に脹んでいる。壁の立ち上りは緩い。底面はほぼ平坦であったが、南壁寄りには不定形の浅い落ち込みが認められた。この落ち込みも壁は緩く立ち、底面は平坦である。

〔堆積土〕　堆積土は10cm前後と浅く、にぶい黄褐色粘土質シルト層が全体的に堆積している。周辺の地山層と差の少ない堆積層であるが、遺物や炭化物を少量含む。

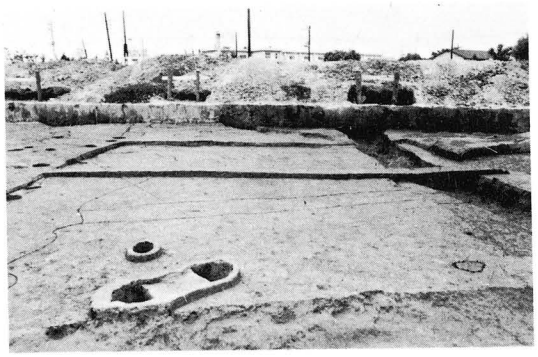
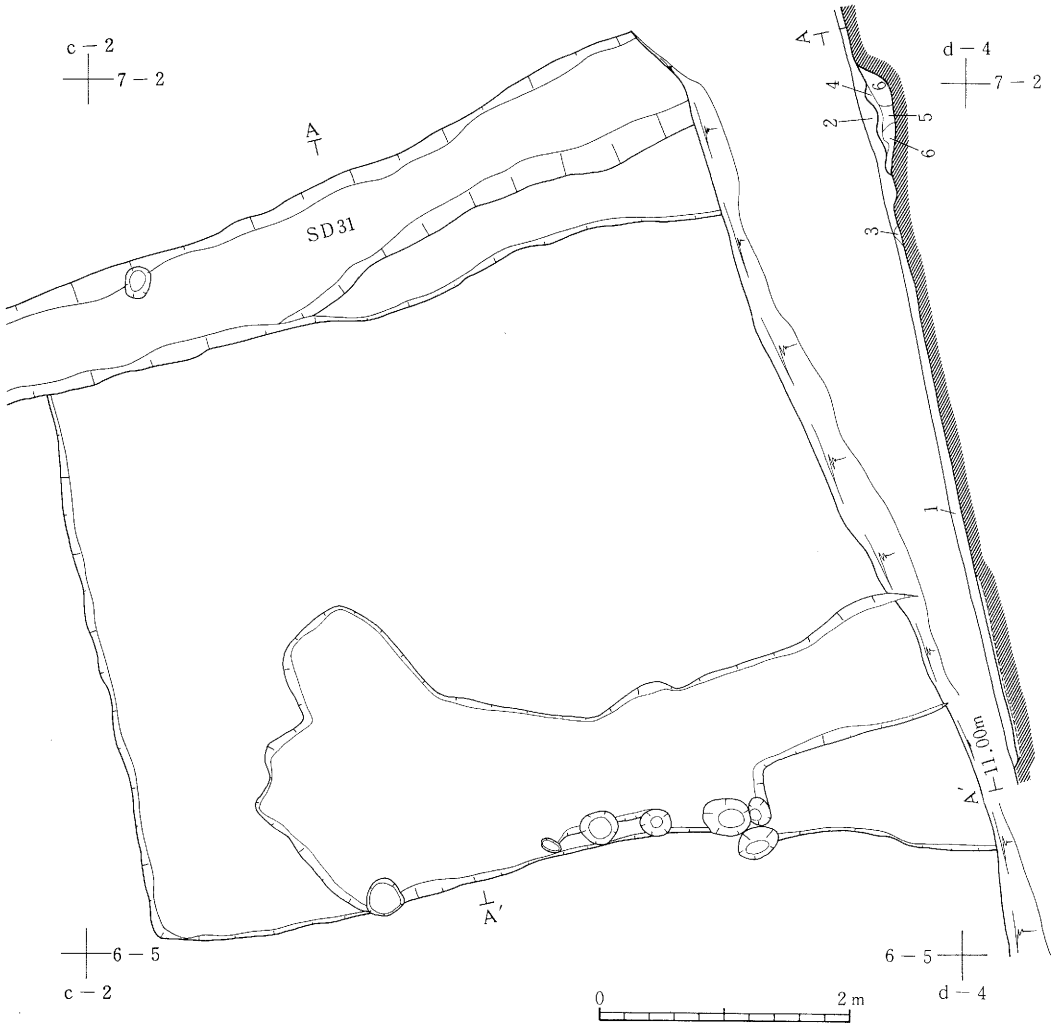


写真９　１号性格不明遺構断面

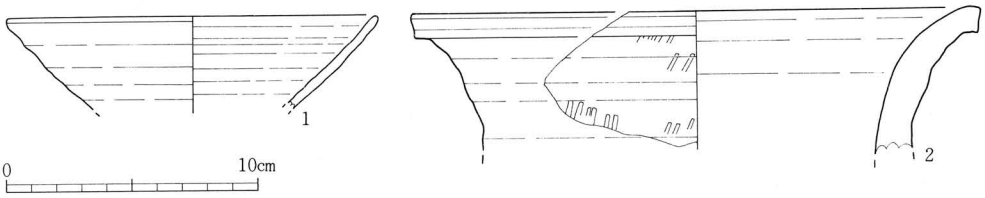
なお、1号性格不明遺構の南側と北側周辺部に、小さなピットが多数検出されているが（第6図参照)、ピットの集中する両辺部の中間にはピットがほとんど検出されないことから考えると、これらのピット群は1号性格不明遺構に何らかの関係があることも考えられる。

〔出土遺物〕　堆積土中より弥生土器、土師器、須恵器の小破片と、これに混ってフイゴ羽口の破片と鉄滓が少数出土している。特に北東側からの出土が多い。



層位	土　色	土　質	そ　の　他
1	10YR4/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄・マンガン粒を含む，粘性，しまり有り
2	10YR4/4 褐　色	シルト	酸化鉄を含む　粘性やや有り・しまり有り
3	10YR5/6 黄褐色	シルト	粘性・しまり有り
4	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	粘性・しまり有り
5	10YR3/3 暗褐色	シルト	粘性・しまり有り　31号溝堆積土
6	10YR5/6 黄褐色	シルト	粘性・しまり有り　灰黄褐色土のブロックを含む　31号溝堆積土

第26図　1号性格不明遺構実測図



遺物No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底部			
1	須恵器	坏	2層	ロクロ	ロクロ		ロクロ	ロクロ		(3.7)	14.6		⅓		
2	須恵器	甕	1層	ロクロ	タタキ目 ロクロ		ロクロ	ロクロ		(10.6)	22.6		(⅙)		

第27図　1号性格不明遺構出土遺物

（2）2号性格不明遺構

〔平面形、規模、重複〕　2号性格不明遺構は、調査区の北東部にその北西部4分の1程が検出された不定形の落ち込みである。検出された範囲では、東西195㎝、南北215㎝を計る。確認面よりの深さは33㎝を計る。43号溝によって西端部を切られている。

〔壁、底面〕　壁面は全体が緩やかな傾斜面となっており、底面は緩い起伏をもっている。

〔堆積土〕　にぶい黄褐色から灰黄褐色シルト層からなり、東壁部で5層に細分された。層中には酸化鉄やマンガン粒を多く含み、水の影響を多く受けたようである。この落ち込みの堆積後も、この付近（調査区北東部）は凹地となっていたことを示すように、その上部には落ち込み堆積土に類似する土層が30～70㎝の厚さで堆積している。（第29図A～F層）

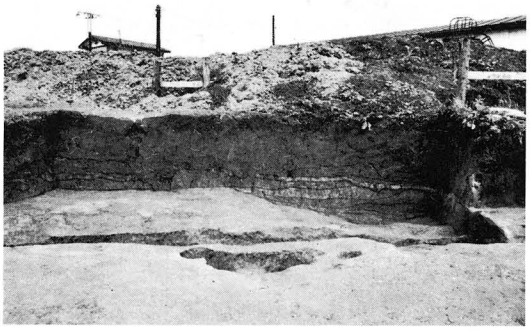
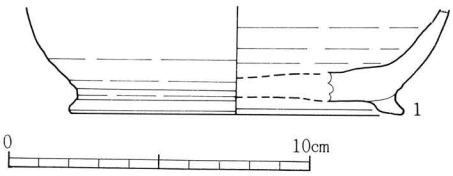


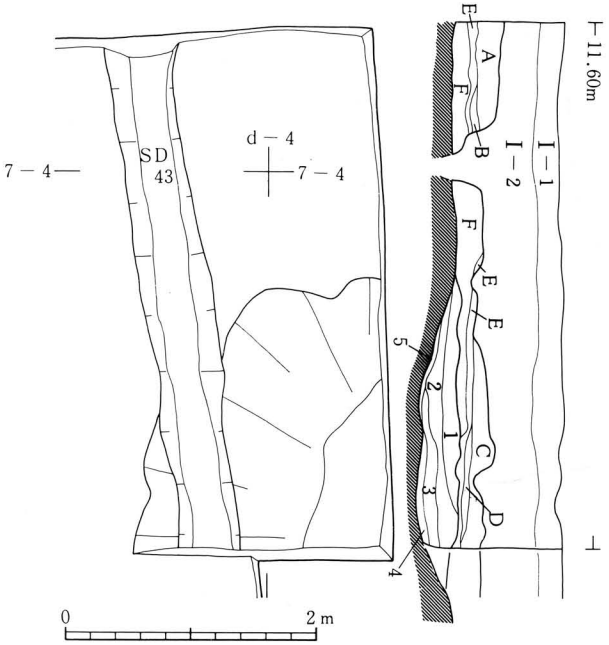
写真10　2号性格不明遺構断面



遺物No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
1	土師器	高台付坏	1層		ロクロ	ロクロ		ロクロ	ロクロ	(3.6)		10.8	(⅙)		

第28図　2号性格不明遺構出土遺物

〔出土遺物〕　落ち込み内からは、表に示した通り18点の遺物片が出土したにすぎなかったが、上部のA～F層中からは193片と多くの遺物が出土している。出土遺物はいずれも小片で、図化できるものは第28図に示した高台坏1点だけである。



第29図　2号性格不明遺構実測図 ▶

層位	土　色	土　質	その他
I－1	10YR4/4　褐　色	シルト	
I－2	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト	
A	10YR3/4　暗褐色	シルト	酸化鉄を含む　暗灰色土のブロックを含む
B	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄を含む
C	10YR4/4　褐　色	シルト	酸化鉄を含む　暗灰色土のブロックを含む
D	10YR6/1　褐灰色	シルト	酸化鉄を含む
E	10YR5/2　灰黄褐色	シルト	酸化鉄・マンガン粒を多量に含む
F	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	マンガン粒を含む
1	10YR1/2　灰黄褐色	シルト	酸化鉄・マンガン粒を含む　粘性あり
2	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄・マンガン粒を含む
3	10YR5/2　灰黄褐色	シルト	酸化鉄を含む
4	10YR5/4にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄を含む　粘性あり
5	10YR5/2　灰黄褐色	シルト	酸化鉄・マンガン粒を含む　しまり有り

6．溝　　跡

（1）16号溝

〔形態、規模、方向〕　上面幅138㎝、底面幅118㎝、深さ12㎝で、断面形は浅い逆台形を呈する。調査区東半の北壁から東壁まで、N－45°－Wの方向で直線的に伸びている。底面は、わずかに南が低くなっている。

〔重複〕　17、22、34号溝を切っている。

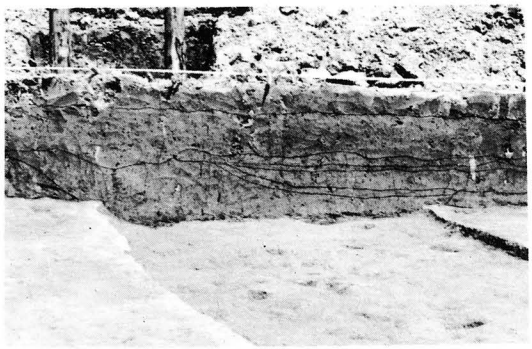
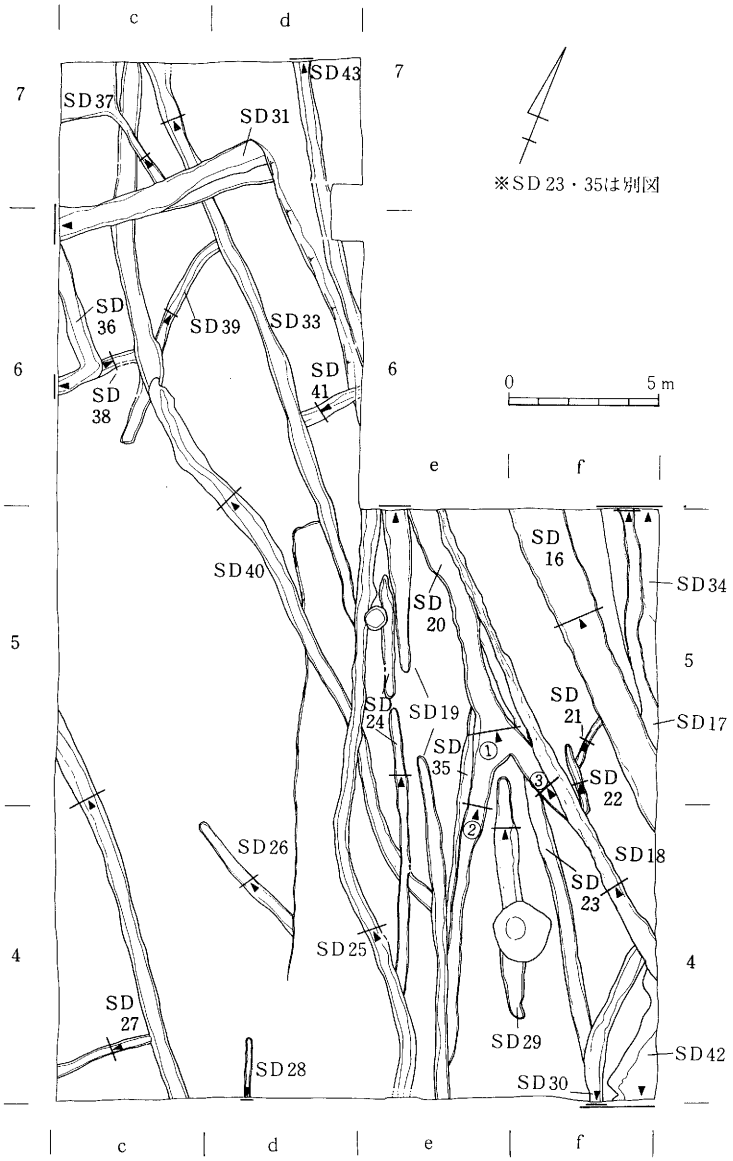
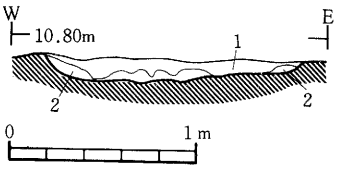


写真11　16号滑断面



第30図
溝断面実測位置図 ▶

層位	土　色	土　質	そ　の　他
1	10YR5/3灰黄褐色	粘　土	酸化鉄をブロック状に含む　粘性しまり有り
2	10YR5/4　褐　色	粘土質シルト	酸化鉄をブロック状に含む　粘性しまり有り



第31図　16号溝土層断面図 ▶

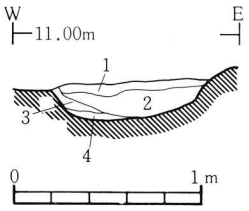
〔堆積土、出土遺物〕　堆積土は、灰黄褐色粘土と褐色粘土質シルトの２層からなる。底面の凹部には点々と白色火山灰が堆積している。出土遺物は断面四角形の釘状の鉄製品が１点あるだけである。

（2）17号溝

〔形態、規模、方向〕　上面幅84cm、底面幅約70cm、深さ20cmで、断面形は舟底状を呈す。調査区東半の北壁から東壁まで、N－33°－Wの方向で小さく蛇行して伸びている。底面の傾斜は、検出部の中央が2、3cm高いが、両端部では差がない。

〔重複〕　34号溝を切り、16号溝に切られている。

〔堆積土、出土遺物〕　堆積土は4層に細分され、褐色から黒褐色の粘土質シルト及びシルトからなる。出土遺物はない。



層位	土　色	土　質	そ　の　他
1	10YR3/4暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む
2	10YR4/4褐　色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む
3	10YR4/4褐　色	粘土質シルト	酸化鉄を少量を少量含む
4	10YR3/1黒褐色	シ　ル　ト	酸化鉄を少量含む

第32図　17号溝土層断面図

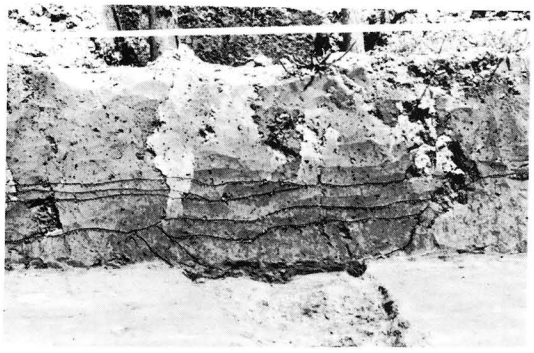


写真12　17号溝断面

（3）18号溝

〔形態、規模、方向〕　上面幅47cm、底面幅約20cm、深さ10cm前後で、断面形は舟底形を呈す。16号溝と平行し、その西側にN－47°－Wの方向で直線的に伸びている。底面の傾斜はほとんどない。

〔重複〕　20、21、23、30、35、42号溝を切っている。

〔堆積土、出土遺物〕　堆積土は南部ではにぶい黄褐色砂質シルト1層からなる。層中には白色火山灰の小粒が混入している。出土遺物はない。

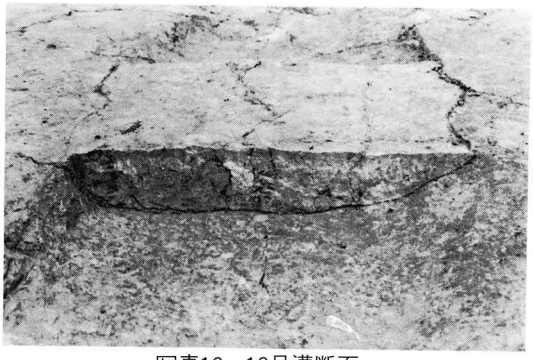
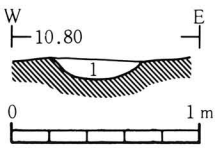


写真13　18号溝断面

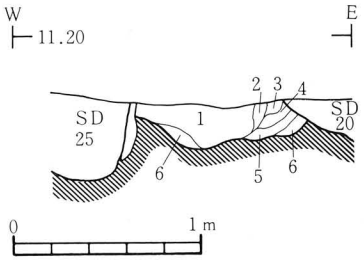


層位	土　色	土　質	そ　の　他
1	10YR5/3にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む

◀　第33図　18号溝土層断面図

（4）19号溝

〔形態、規模、方向〕　上面幅約55cm、底面幅45cm、深さ5～20cmを計る。断面形は舟底形を



層位	土　　色	土　質	そ　の　他
1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄を多量に含む
2	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄を含む，粘性あり
3	10YR6/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄を含む
4	10YR3/3 暗褐色	シルト	酸化鉄を含む，粘性あり
5	10YR5/3にぶい黄褐色	シルト	しまりあり
6	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄を少量含む

◀　第34図　19号溝土層断面図

呈す。検出範囲の中央やや北寄りのところで浅くなり、途中が切れている。方向は調査区南壁から北西に直線的に伸び、その後、弧の内側を西に向けて緩く曲がるが、調査区北端では再び北西方向に直線的に伸びる。全体的な方向としてはN－25°－Wである。底面は両端が北端に比べて約10cm低くなっている。

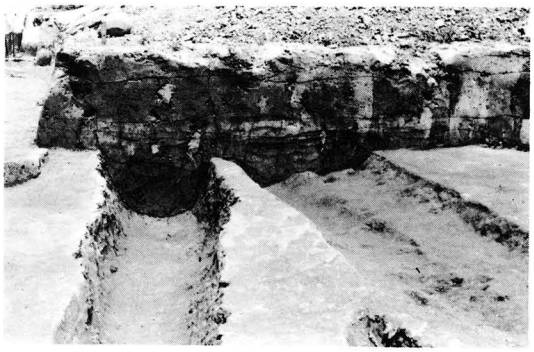


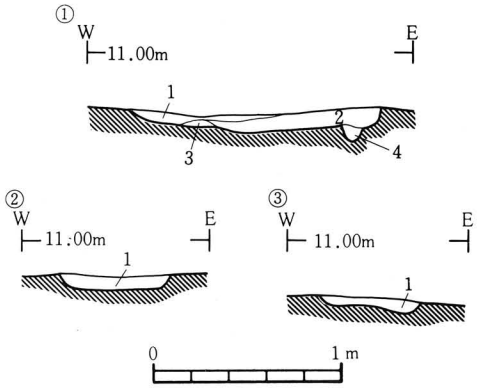
写真14　19・25号溝断面

〔重複〕　40号溝を切り、20、35号溝によって切られている。25号溝は北壁で重複しているが、間に攪乱があるため、その関係は不明である。

〔堆積土、出土遺物〕　堆積土は調査区北壁で6層に細分された。暗褐色から灰黄褐色のシルトからなる。出土遺物には土師器の細片が7点あるだけである。

（5）20号溝

〔形態、規模、方向〕　調査区の南壁から伸びてきた溝と、東壁から伸びてきた溝とが、途中で合流して北壁に向って伸び、Y字状を呈す。西側の支流は上面幅約60cm、底面幅約50cm、深さ約10cm、東側の支流は上面幅約55cm、底面幅約40cm、深さ約10cmを計る。合流後は規模を増し、上面幅約135cm、底面幅約120cm、深さ約10cmとなる。断面形はどの部分も浅い逆台形を呈する。合流後の方向はN－37°－Wとなっている。また分岐点の角度は、中心から西側が27°、



層　位	土　　色	土　質	そ　の　他
①－1	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色土・褐色土・黒褐色土の小ブロックを含む
①－2	10YR5/3にぶい黄褐色	シルト	黒褐色土のブロックを含む
①－3	10YR4/6 褐色	砂質シルト	
①－4	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	
②－1	10YR5/3にぶい黄褐色	シルト	上面に薄い砂層有り ①－2層に対応
③－1	10YR3/1 黒褐色	シルト	にぶい黄褐色土・黒褐色土の小ブロックを含む

第35図　20号溝土層断面図

東側が24°とほぼ等しくなっている。

〔重複〕　19、23、29、35号溝を切っており、18号溝によって切られている。

〔堆積土、出土遺物〕　黒褐色から灰黄褐色シルトないし砂質シルトが堆積している。出土遺物は土師器の細片が11点あるだけである。

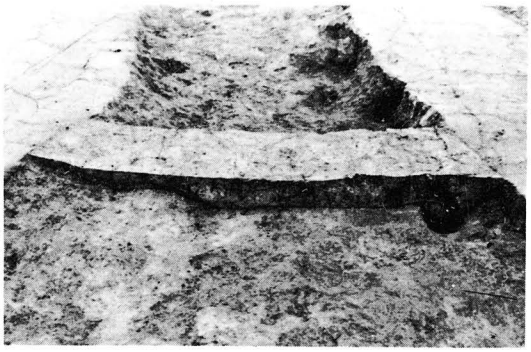


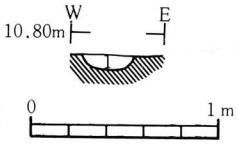
写真15　20号溝断面

（6）21号溝

〔形態、規模、方向〕　小規模の溝で、上面幅25cm、底面幅18cm、深さ８cmを計る。断面形は舟底状を呈す。南端を18号溝に切られているが、126 cmの長さで検出されている。溝の方向はN－39°－Wを向く。底面の傾斜は認められない。

〔重複〕　22号溝を切り、18号溝によって切られている。

〔堆積土、出土遺物〕　堆積土は暗褐色シルト１層からなる。出土遺物はない。



第36図
21号溝土層断面図

層位	土　色	土　質	そ　の　他
1	10YR¾　暗褐色	シ　ル　ト	酸化鉄を含む　粘性有り

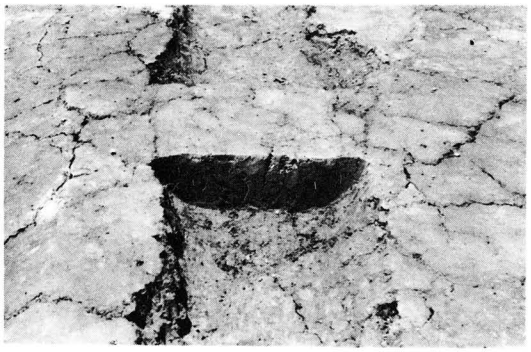
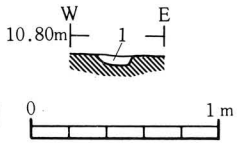


写真16　21号溝断面

（7）22号溝

〔形態、規模、方向〕　21号溝と同様に小規模な溝で、上面幅18cm、底面幅12cm、深さ５cmを計る。断面形は舟底状を呈す。北端を16号溝、南端を21号溝に切られ、160 cmだけ残る短い溝である。方向はN－５°－Eを指す。底面には傾斜は認められない。



第36図
22号溝土層断面図

層位	土　色	土　質	そ　の　他
1	10YR⅚　褐　色	シ　ル　ト	酸化鉄を含む

写真17　22号溝断面

〔重複〕　16、21号溝に切られている。

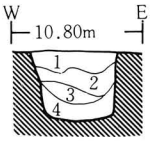
〔堆積土、出土遺物〕　堆積土は酸化鉄を含む褐色シルト１層からなり、出土遺物はない。

（8）23号溝

〔形態、規模、方向〕　調査区の南壁から北西方向に、北壁近くまで直線的に伸び、35号溝と重なった所で途切れ、立ち上りの急な壁となる。上面幅44cm、底面幅34cm、深さ36cmを計り、断面形は逆台形を呈す。方向はN－34°－Wを指す。底面は緩い起伏があるものの、全体としてはほぼ平坦となっている。

〔重複〕　35号溝を切り、18、20、30号溝によって切られている。

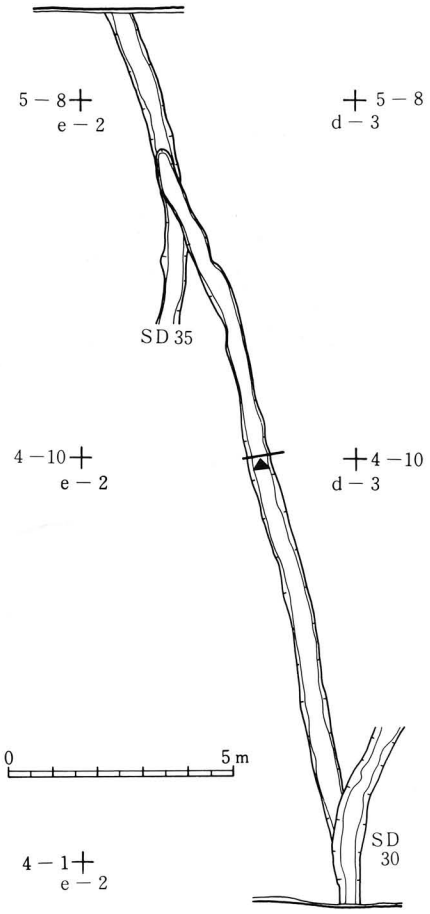
〔堆積土、出土遺物〕　堆積土は4層に分けられ、上部2層は、にぶい黄褐色と灰黄褐色のシルト層からなり、下部2層は、にぶい黄褐色の粘土質シルトからなる。出土遺物は、土師器甕の細片1点と石鏃が1点である。



第38図
23号溝土層断面図

層位	土　色	土　質	そ の 他
1	10YR5/4にぶい黄褐色	シ ル ト	しまり有り
2	10YR5/2 灰 黄 褐 色	シ ル ト	粘性有り
3	10YR5/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	
4	10YR5/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄, マンガン粒を含む

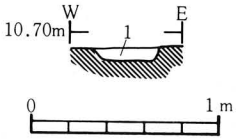
写真18　23号溝断面



第39図　23号溝平面図

（9）24号溝

〔形態、規模、方向〕　調査区中央に直線的に伸びて検出された。南北両端とも調査区内で途切れ、中央よりやや北側の一部も、途中で切れ



第40図
24号溝土層断面図

層位	土　色	土　質	そ の 他
1	10YR5/4にぶい黄褐色	シ ル ト	酸化鉄マンガン粒を含む

ている。上面幅35cm、底面幅20cm、深さ6cmを計り、断面形は浅い逆台形を呈す。方向はN－28°－Wを指す。底面は、北西側が約10cm程低くなっている。

〔重複〕　7号土壙及び25号溝によって切られ、40号溝を切っている。

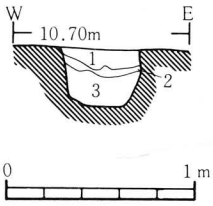
〔堆積土、出土遺物〕　堆積土はにぶい黄褐色シルト層からなり、出土遺物はない。

(10) 25号溝

〔形態、規模、方向〕　調査区南壁よりS字状に蛇行した後、直線的に北西に伸びる。上面幅43cm、底面幅30cm、深さ30cmを計る。断面形は逆台形を呈す。方向はN－16°－Wを指す。底面は南西側が約10cm低くなっている。

〔重複〕　24、33、40号溝を切り、7号土壙に切られている。

〔堆積土、出土遺物〕　堆積土は3層に分けられるが、全て、にぶい黄褐色を呈するシルトからなる。出土遺物はない。



第41図
25号溝土層断面図

層位	土　色	土　質	そ　の　他
1	10YR5/3にぶい黄褐色	シルト	やや粘性有り しまり有り
2	10YR6/3にぶい黄褐色	シルト	
3	10YR5/3にぶい黄褐色	シルト	マンガン粒，酸化鉄を含む やや粘性有り

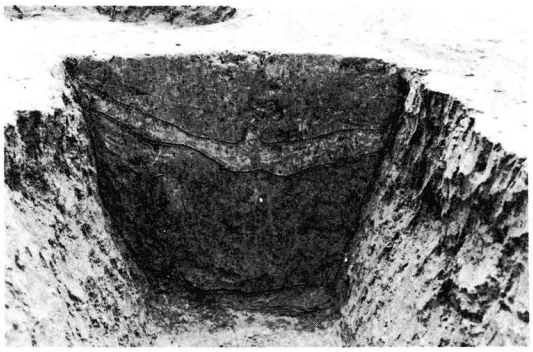


写真19　25号溝断面

(11) 26号溝

〔形態、規模、方向〕　調査区中央より、やや南寄りで検出された。南東部は削平されて切れており、北西端は南東残存端部より440cmの所で立ち上がる。上面幅36cm、底面幅26cm、深さ14cmを計り、断面形は逆台形を呈す。方向はN

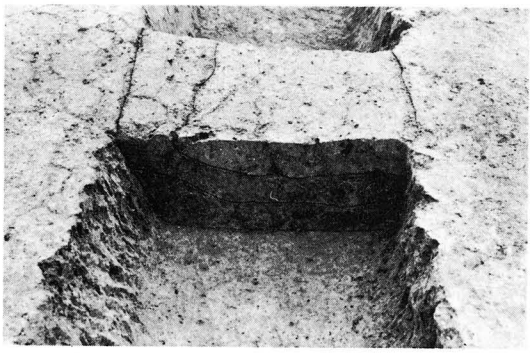
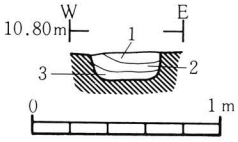


写真20　26号溝断面



第42図
26号溝土層断面図

層位	土　色	土　質	そ　の　他
1	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を少量含む
2	10YR5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む
3	10YR4/6 褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む　しまり有り

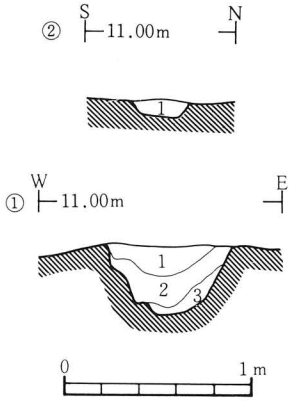
－63°－Wを指す。直線的に伸びる。底面は北西側が13cm程低くなっている。

〔重複〕　重複はない。

〔堆積土、出土遺物〕　堆積土は３層に分けられ、１層は黄褐色、２層はにぶい黄褐色、３層は褐色を呈し、土質はいずれも砂質シルトである。出土遺物はない。

(12) 27号溝

〔形態、規模、方向〕　調査区南壁の西端近くから、西壁中央やや南寄りに向って直線的に伸びる溝に、これより細い溝が調査区西壁南端から直線的に伸びて直角に接続し、Ｔ字状を呈す。太い方は上面幅65cm、底面幅35cm、深さ35cmを計り、断面形は舟底形に近い逆台形を呈す。細い方は上面幅30cm、底面幅20cm、深さ９cmを計り、断面形は浅い逆台形を呈す。方向は、太い方で計測すると、Ｎ－38°－Ｗを指す。底面は双方とも、ほぼ平坦となっている。



層位	土色	土質	その他
①－1	10YR3/2 黒褐色	シルト	マンガン粒を含むしまり有り
①－2	10YR5/3にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄マンガン粒を含む
①－3	10YR3/2 黒褐色	シルト	
②－1	10YR3/2 黒褐色	シルト	マンガン粒を含むしまり有り

第43図　27号溝土層断面図

〔重複〕　重複はない。

〔堆積土、出土遺物〕　太い方の堆積土は３層からなり、１層は黒褐色シルト、２層はにぶい黄褐色シルト、３層は黒褐色シルトとなっている。細い方は、太い方の第１層と同様の黒褐色シルト層１層からなる。出土遺物には、弥生土器、土師器、須恵器の細片のほか、鉄滓や滑石製紡錘車がある。

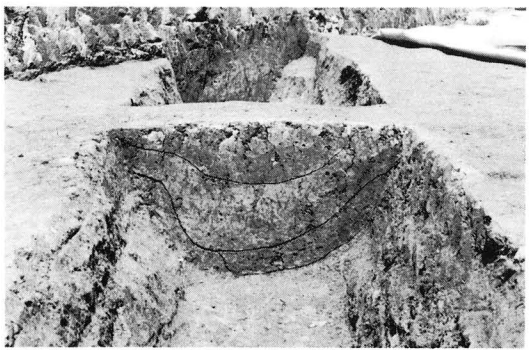


写真21　27号溝断面①

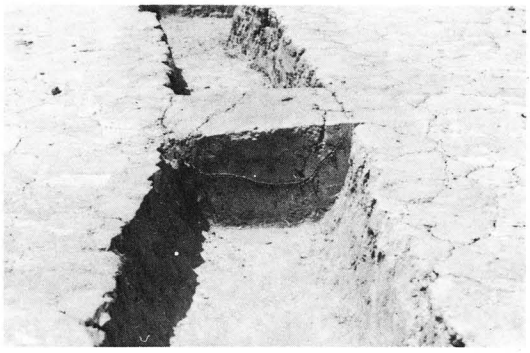


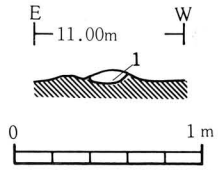
写真22　27号溝断面②

(13) 28号溝

〔形態、規模、方向〕　調査区南壁中央よりやや西側で、壁より200 cmの所まで検出された、直線的な小形の溝である。上面幅20cm、底面幅14cm、深さ6 cmを計り、断面形は舟底形を呈す。方向はN－19°－Wを指す。底面に傾きは認められない。

〔重複〕　9号土壙を切っている。

〔堆積土、出土遺物〕　堆積土はにぶい黄褐色砂質シルト1層からなる。遺物は、土師器、須恵器片のほか、古瓦片が1点出土している。



第44図
28号溝土層断面図

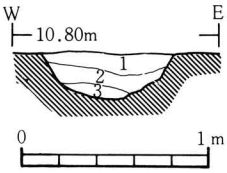
層位	土　色	土　質	そ の 他
1	10YR5/3にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む しまりが強い

写真23　28号溝土層断面▶

(14) 29号溝

〔形態、規模、方向〕　調査区南東部に、両端が途切れて検出された。上面幅68cm、底面幅約30cm、深さ23cmで、断面形は舟底状を呈す。方向はN－25°－Wで直線的に伸び、底面は中央付近がわずかに凹むが、両端部には差が認められない。

〔重複〕　20号溝を切っており、6号土壙に切られている。



第45図
29号溝土層
断面図

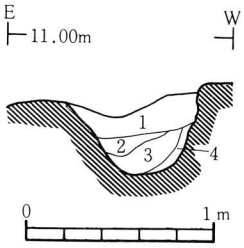
層位	土　色	土　質	そ の 他
1	10YR5/4にぶい黄褐色	シ ル ト	酸化鉄を含む 粘性がない
2	10YR5/4　褐　色	シ ル ト	酸化鉄を含む粘性を少し含む
3	10YR3/4　暗 褐 色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む

〔堆積土、出土遺物〕　堆積土は3層に分けられ、1層はにぶい黄褐色シルト、2層は褐色シルト、3層は暗褐色粘土質シルトからなる。出土遺物は土師器片が1点あるにすぎない。

(15) 30号溝

〔形態、規模、方向〕　調査区の南東角付近に、南東方向に内側を向けた弧状に検出された。上面幅65cm、底面幅30cm、深さ45cmで、断面形は舟底状を呈す。弦の方向はN－2°－Eを指す。底面は南西側が5 cm程低くなっている。

層位	土　色	土　質	そ の 他
1	10YR5/3にぶい黄褐色	シ ル ト	酸化鉄を含む　しまり有り
2	10YR5/2 灰 黄 褐 色	粘土質シルト	酸化鉄を含む　しまり有り
3	10YR5/2 灰 黄 褐 色	粘土質シルト	酸化鉄を含む
4	10YR5/3にぶい黄褐色	シ ル ト	酸化鉄・マンガン粒を含む，粘性有り



第46図　30号溝土層断面図

〔重複〕　23、42号溝を切り、18号溝に切られている。

〔堆積土、出土遺物〕　堆積土は4層に分けられ、1層がにぶい黄褐色シルト、2、3層は灰黄褐色粘土質シルト、4層はにぶい黄褐色シルトからなる。出土遺物はない。

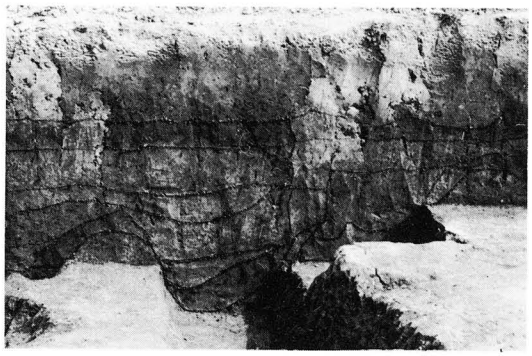
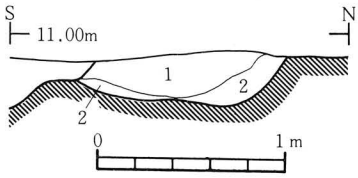


写真24　30号溝断面

(16) 31号溝

〔形態、規模、方向〕　調査区北部で検出され、調査区西壁から東壁方向へ直線的に伸びるが、東側は削平を受けている。残存部の東半部では、東側壁面に浅い段を有する。確認面から段の上面までの落差は5cm前後で、この部分は西半部に比べて溝幅が広くなっている。西半側は上面幅約80cm、底面幅約55cm、深さ28cmを計り、断面形は舟底状を呈す。溝の方向はN－43°－Eを指す。底面はほぼ平坦である。



層位	土　色	土　質	そ　の　他
1	10YR5/2灰黄褐色	粘土質シルト	粘性あり　しまり有り
2	10YR5/6黄 褐 色	シ　ル　ト	粘性あり，灰黄褐色土をブロック状に含む

第47図　31号溝土層断面図

〔重複〕　33、37、40号溝を切り、1号性格不明遺構によって切られている。

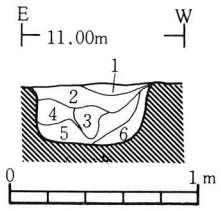
〔堆積土、出土遺物〕　堆積土は2層に分けられ、1層は灰黄褐色粘土質シルト、2層は黄褐色シルトからなる。出土遺物はない。

(17) 32号溝－欠番－40号溝に同一

(18) 33号溝

〔形態、規模、方向〕　調査区中央の7号土壙のところから、調査区北壁西寄りに直線的に伸びる。南端は25号溝に切られた所で途切れ、以南は不明である。上面幅62cm、底面幅45cm、深

層位	土　色	土　質	そ　の　他
1	10YR5/4にぶい黄褐色	砂	しまりなし
2	10YR6/3にぶい黄橙色	砂質シルト	酸化鉄を含む　しまりなし
3	10YR5/2　暗灰黄色	砂質シルト	酸化鉄を含む
4	10YR5/2　灰 黄 色	砂質シルト	酸化鉄を含む
5	10YR4/6　褐　色	粘土質シルト	しまり有り
6	10YR4/4　褐　色	粘土質シルト	しまり有り



第48図　33号溝土層断面図

さ31cmを計り、断面形はU字形を呈する。方向はN－42°－Wを指す。底面は北西側が約20cm低くなっている。

〔重複〕　39、41号溝を切り、25、31号溝及び1号性格不明遺構に切られている。

〔堆積土、出土遺物〕　堆積土は6層に分けられた。1層はにぶい黄褐色砂、2層はにぶい黄褐色砂質シルト、3層は暗灰黄色砂質シルト、4層は灰黄色砂質シルト、5、6層は褐色粘土質シルトからなる。出土遺物には、鍬先形の鉄製品が1点ある。

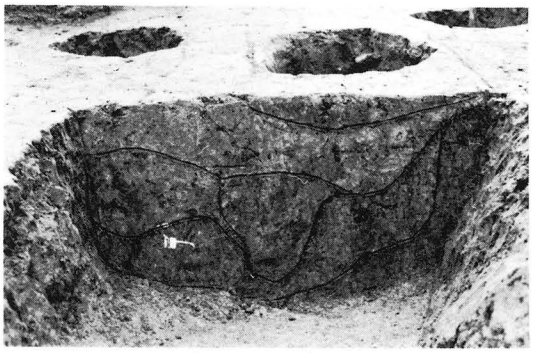


写真25　33号溝断面

(19) 34号溝

〔形態、規模、方向〕　調査区の北東角に東壁北寄りから北壁東端に伸びる。上面幅185cm以上、底面幅40cm、深さ85cmを計り、断面形は逆台形を呈するが、中央部がU字状に20cm程一段低くなっている。方向はN－31°－Wを指す。底面は南東側が10cm程低い。

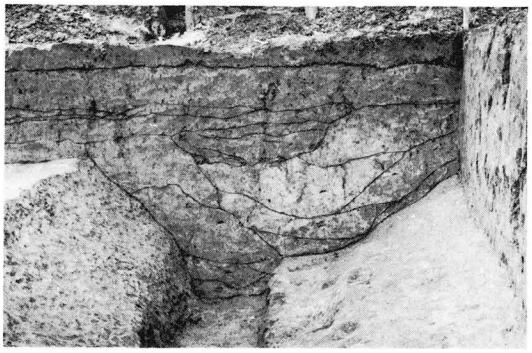
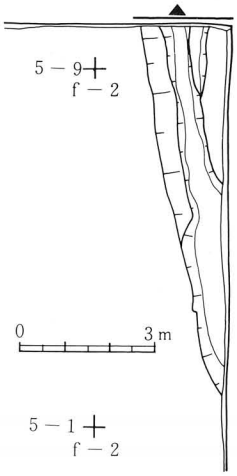
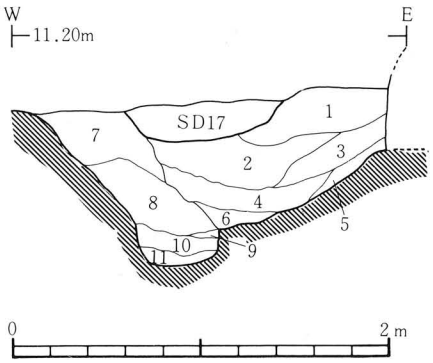


写真26
◀34号溝断面



第49図　34号溝平面図

層位	土　色	土　質	その他
1	10YR5/3にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄 マンガン粒を含む
2	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄 マンガン粒を含む
3	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄 マンガン粒を含む 粘性あり
4	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄 マンガン粒を含む
5	10YR5/3にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄を含む 粘性あり
6	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄 マンガン粒を含む 粘性しまりあり
7	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄 マンガン粒を含む
8	10YR6/3にぶい黄橙色	砂質シルト	酸化鉄 マンガン粒 炭を含む しまりあり
9	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む
10	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄 マンガン粒を含む 粘性あり
11	10YR3/6 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む

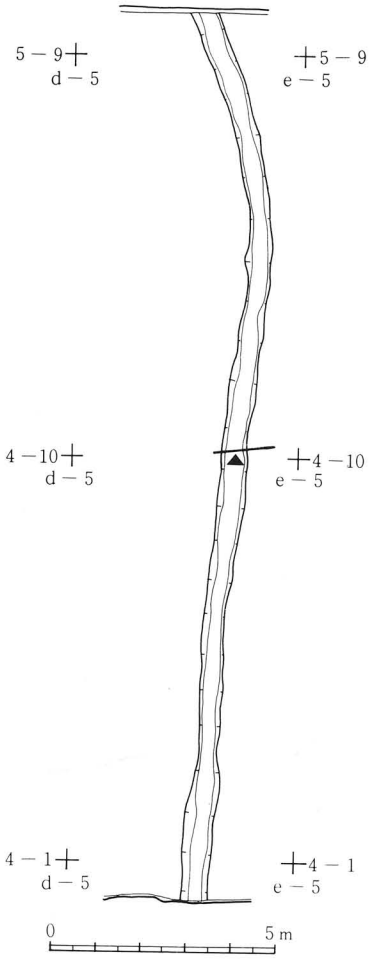


第50図　34溝土層断面図

〔重複〕　16、17号溝によって切られている。

〔堆積土、出土遺物〕　堆積土は、第50図のように11層に分けられる。これは１～６層までと、７～11層までに２分することができることから、34号溝は西側に寄っていた時期と東側に寄ってからの２時期に分けられる可能性もある。出土遺物には土師器片が５点あるだけである。

(20) 35号溝



第51図　35号溝実測図

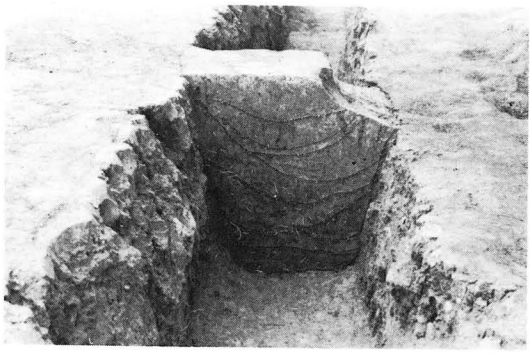
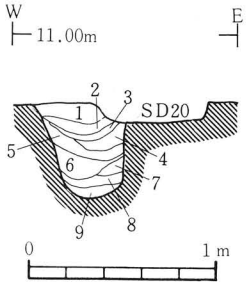


写真27　35号溝断面



層位	土　色	土　質	そ の 他
1	10YR4/4　褐　色	砂質シルト	
2	10YR4/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	１層よりも粘性有り
3	10YR4/4　褐　色	粘土質シルト	
4	10YR4/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む
5	10YR5/4にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む
6	10YR4/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む
7	10YR5/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄をブロック状に含む
8	10YR5/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む
9	10YR5/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む

第52図　35号溝土層断面図

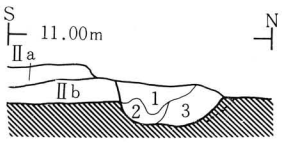
〔形態、規模、方向〕　調査区南壁中央よりやや東に寄った所から北西方向に直線的に伸び、北壁東半の近くで緩く西側にカーブする。上面幅50cm、底面幅30cm、深さ50cmを計り、断面形はU字形を呈す。方向はN－26°－Wを指す。底面はほぼ平坦である。

〔重複〕　18、19、20号溝に切られている。

〔堆積土、出土遺物〕　堆積土は９層に細分された。１層は褐色砂質シルト、２層はにぶい黄褐色粘土質シルト、３層は褐色粘土質シルト、４～９層まではにぶい黄褐色の粘土質シルトからなる。出土遺物には土師器片が３点ある。

(21) 36号溝

〔形態、規模、方向〕　東壁北寄りにＬ字形に検出された。東方向側が南北方向側よりやや狭く、深さも浅い。東西側は上面幅50cm、底面幅30cm、深さ15cmを計り、南北側は上面幅70cm、底面幅30cm、深さ40cmを計る。断面形は舟底状を呈す。方向は南北側がＮ－40°－Ｗを指す。底面は南北側が15cm前後低くなっている。



第53図
36号溝土
層断面図

層位	土　色	土　質	そ　の　他
1	10ＹＲ3/3　暗褐色	粘土質シルト	マンガン粒・酸化鉄を少量含む
2	10YR5/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	
3	10ＹＲ2/3　黒褐色	シルト	酸化鉄･マンガン粒を少量含むしまりあり

〔重複〕　38号溝を切っている。

〔堆積土、出土遺物〕　堆積土は、東西側の西壁断面で３層に分けられる。１層は暗褐色粘土質シルト、２層はにぶい黄褐色粘土質シルト、３層は黒褐色シルトからなる。出土遺物はない。

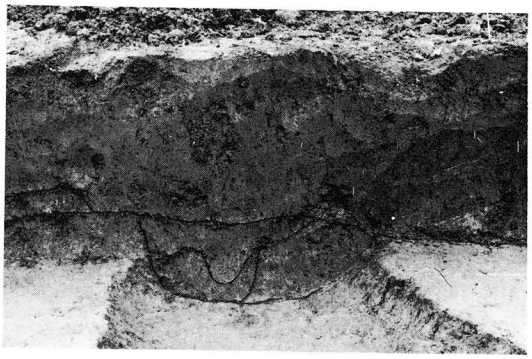
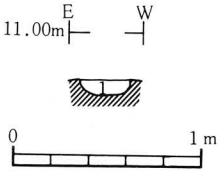


写真28　36号溝断面 ▶

(22) 37号溝

〔形態、規模、方向〕　31号溝の中央付近から調査区北西角にかけて検出された。北西角では検出面で、東西190 cm、南北170 cmの略方形に広がっている。溝部と方形部との底面に落差はなく、ほぼ平坦になっている。溝は上面幅26cm、底面幅16cm、深さ８cmを計り、底面は舟底状を呈す。溝の方向はＮ－55°－Ｗを指す。



第54図
37号溝土層断面図

層位	土　色	土　質	そ　の　他
1	10ＹＲ4/6暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む 灰黄褐色土を下部に含む

〔重複〕　40号溝を切り、31号溝に切られている。

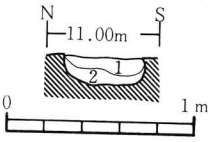
〔堆積土、出土遺物〕　堆積土は溝部、方形部とも暗褐色の粘土質シルトからなる。出土遺物はない。

(23) 38号溝

〔形態、規模、方向〕　調査区の西壁の中央やや北寄りに、東端を40号溝に、西側を36号溝に切られて検出された。検出された部分の長さは110 cmである。上面幅40cm、底面幅25cm、深さ15cmを計り、断面形は舟底状を呈す。溝の方向はN－50°－Eを指し、底面に傾きは認められない。

〔重複〕　36、40号溝に切られている。

〔堆積土、出土遺物〕　堆積土は2層からなる。1層は褐色砂質シルト、2層は褐色粘土質シルトからなる。出土遺物はない。



第55図
38号溝土層断面図

層位	土　色	土　質	そ の 他
1	10YR4/4　褐　色	砂質シルト	しまりなし
2	10YR5/6　褐　色	粘土質シルト	しまり有り

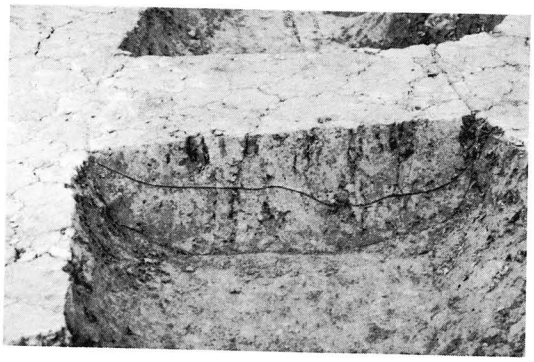


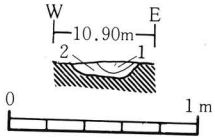
写真29　38号溝断面 ▶

(24) 39号溝

〔形態、規模、方向〕　調査区の北部中央付近で、1号性格不明遺構の調査後に検出された。北端を33号溝に、南部を40号溝により切られ、南端はさらに40号溝の南側に伸び、17号住居跡に切られて消えている。東側に内を向けて緩い弧状に伸びている。上面幅36cm、底面幅20cm、深さ7 cmを計り、断面形は浅い逆台形を呈す。方向はN－8°－Eを指し、底面は南西側が5 cm程低くなっている。

〔重複〕　33、40号溝及び1号性格不明遺構によって切られている。

〔堆積土、出土遺物〕　堆積土は2層からなる。1層は褐色シルト、2層は暗褐色粘土質シルトからなる。出土遺物はない。



第56図
39号溝土層断面図

層位	土　色	土　質	そ の 他
1	10YR5/6　褐　色	シ ル ト	しまり有り
2	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	しまり有り

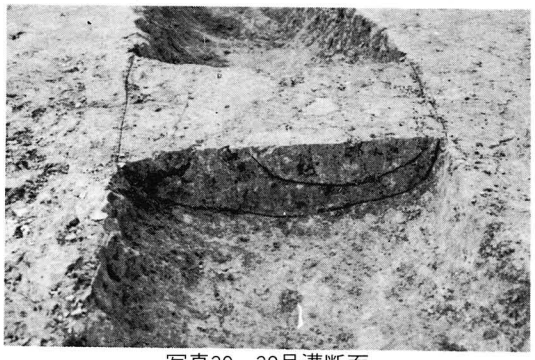


写真30　39号溝断面

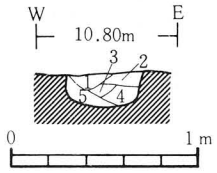
(25) 40号溝

〔形態、規模、方向〕　調査区中央やや南寄りから北壁に至るまで緩やかに蛇行しながら伸び

ている。南端は19、20、35号溝に切られたところで浅くなり切れている。中央部では上面幅41cm、底面幅34cm、深さ18cmを計り、切断面はU字形を呈す。平均的な方向はN－41°－Wを向く。底面は17号住居跡の北側で段がつき、南側が一部低くなっているが、検出した両端部の底面を比較すると、北西側が10cm程低くなっている。

〔重複〕　38、39号溝を切り、19、20、24、25、31、33、35、37号溝及び、17、18号住居跡、10、11号土壙、1号性格不明遺構によって切られている。

〔堆積土、出土遺物〕　堆積土は、中央部で5層に分けられた。1、2、4層はにぶい黄褐色砂質シルト、3層は暗褐色粘土質シルト、5層は黄褐色粘土質シルトからなる。出土遺物には土師器細片が11点あるだけである。



第57図
40号溝土層断面図

層位	土　色	土　質	その他
1	10YR5/3にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む しまり有り
2	10YR5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	しまり有り
3	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	しまり有り
4	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む しまり有り
5	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む しまり有り

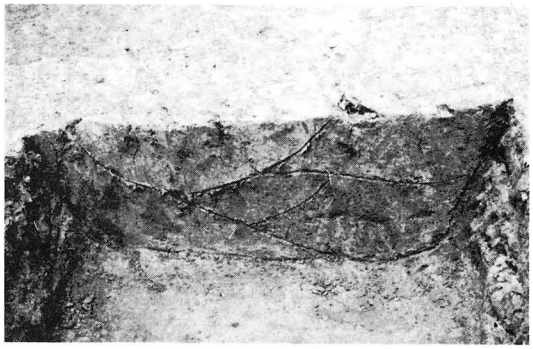


写真31　40号溝断面

(26) 41号溝

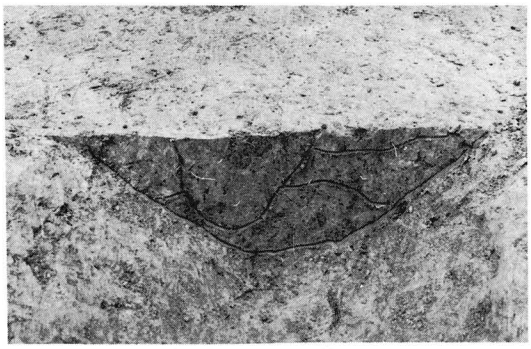
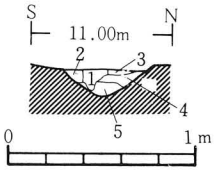


写真32　41号溝断面



第58図
41号溝土層断面図

層位	土　色	土　質	その他
1	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	しまり有り
2	10YR5/4にぶい黄褐色	粘土質シルト	しまり有り
3	10YR5/4 褐色	粘土質シルト	しまり有り
4	10YR5/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	しまり有り
5	10YR5/4にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭若干混入しまり有り

〔形態、規模、方向〕　調査区北部の東壁際で検出された。西側を33号溝に切られ、東側を削平によって失なう。長さ120cmの短かい溝である。上面幅42cm、底面幅5cm、深さ14cmを計り断面形はV字状を呈す。方向はN－41°－Eを指す。底面の傾きは認められない。

〔重複〕　33号溝に切られる。

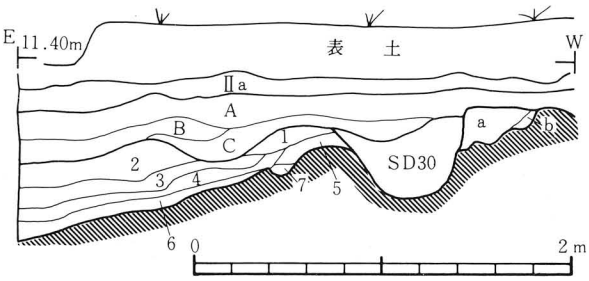
〔堆積土、出土遺物〕　堆積土は5層からなる。1、3層は褐色粘土質シルト層、2、4、5層はにぶい黄褐色粘土質シルト層からなる。出土遺物はない。

(27) 42号溝

〔形態、規模、方向〕　調査区の南東角を斜めに横切って検出された。上面は西側だけが検出された。壁面は調査区東壁に至るまで傾斜を続けているため、底面は不明となっている。溝ではなく大形の土壙の可能性も考えられる。検出範囲で上面幅は140 cm、深さ50cmを計る。方向、底面の傾きはともに不明である。

〔重複〕　18、30号溝に切られている。

〔堆積土、出土遺物〕　堆積土は南壁断面で7層に分けられた。2層はにぶい黄褐色粘土質シルト、3～5層は灰黄褐色シルト、6層は灰黄褐色粘土質シルト、7層はにぶい黄褐色粘土質シルトからなる。出土遺物には土師器及び須恵器の破片が19点ある。



層位	土　色	土　質	そ　の　他
Ⅱa	10YR4/3にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を少量含む
A	10YR6/4にぶい黄橙色	砂質シルト	酸化鉄を含む　粘性が強い
B	10YR5/3にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄を含む
C	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む　粘性あり
a	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄を含む　粘性あり
b	10YR6/3にぶい黄橙色	シルト	酸化鉄を含む
1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む
2	10YR5/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を多量に含む　しまりが弱い
3	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄を多量に含む　粘性あり
4	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄を多量に含む　しまり有り
5	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄を含む　しまり有り
6	10YR6/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む　しまり有り
7	10YR5/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む

第59図　42号溝土層断面図

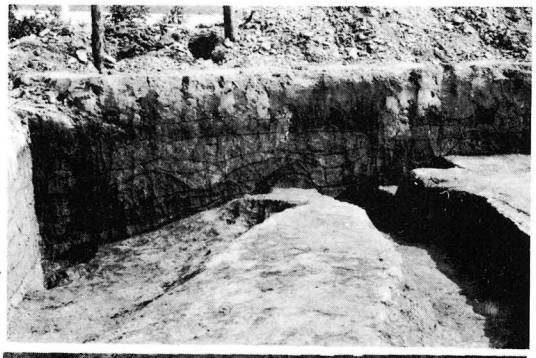


写真33
42号溝断面

(28) 43号溝

〔形態、規模、方向〕　調査区北東角付近で東壁から北壁に向かって直線的に伸びて検出された。上面幅50cm、底面幅25cm、深さ32cmを計り、断面形は逆台形を呈す。方向はN－32°－Wを指す。底面は北西側が約3 cm低くなっている。方向、規模、断面形等から、23号溝の延長と考えられる。

〔重複〕　2号性格不明遺構より古いと考えら

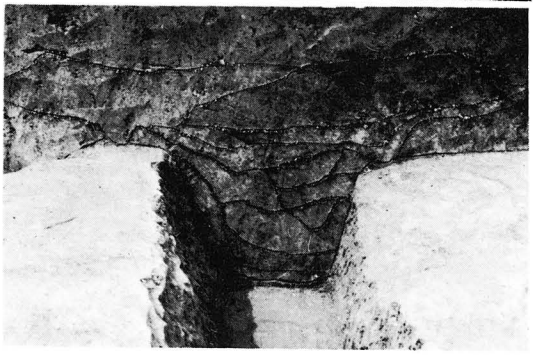
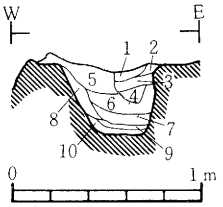


写真34　43号溝断面



層位	土　　色	土　質	そ　の　他
1	10YR5/6黄　褐　色	シ　ル　ト	マンガン粒を含む
2	10YR6/4にぶい黄橙色	シ　ル　ト	マンガン粒を含む
3	10YR5/6　褐　色	粘土質シルト	酸化鉄　マンガン粒を含む
4	10YR5/4にぶい黄褐色	粘土質シルト	
5	10YR4/4　褐　色	シ　ル　ト	酸化鉄　マンガン粒を含む
6	10YR6/3にぶい黄橙色	シ　ル　ト	酸化鉄のブロックを含む　マンガン粒を含む
7	10YR5/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄　マンガン粒を含む
8	10YR4/3にぶい黄褐色	シ　ル　ト	マンガン粒を含む
9	10YR6/4にぶい黄橙色	シ　ル　ト	酸化鉄を含む　しまりなし
10	10YR5/4にぶい黄褐色	シ　ル　ト	酸化鉄　マンガン粒を含む　しまりなし

第60図　43号溝土層断面図

れる。

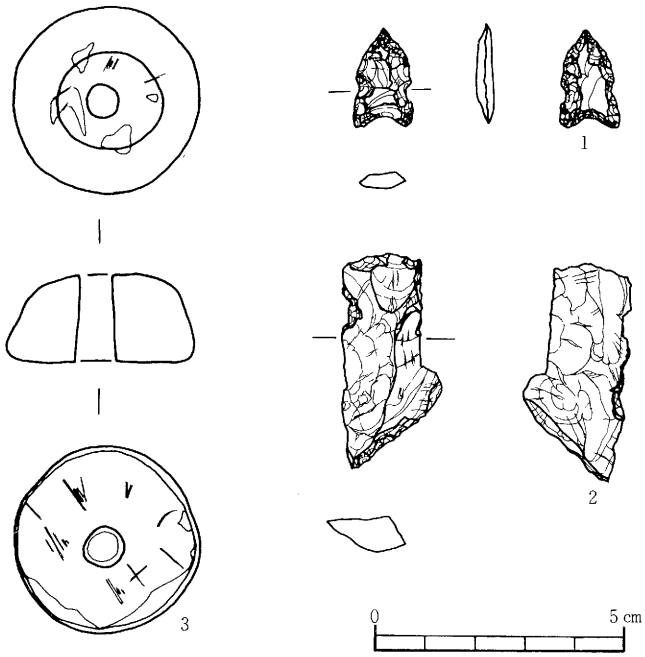
〔堆積土、出土遺物〕　堆積土は10層に細分された。1層は黄褐色シルト、2、6、9層はにぶい黄橙色シルト、3層は褐色粘土質シルト、4、7層はにぶい黄褐色シルト、5層は褐色シルト、8、10層はにぶい黄褐色シルトからなる。出土遺物はない。

Ⅵ．遺物・遺構の総括

1．遺物の総括

（1）石　　器

石器類には、第61図に示した石鏃と二次加工痕のある剥片がある。第61図1の石鏃は、23号溝から出土したもので、長さ20mm、幅12mm、厚さ3.5mmを計るアメリカ型のもので、白色を呈する。2の二次加工痕のある剥片は、長さ44mm、幅20mm、厚さ7.5mmを計る。2点の石器の他には少数の剥片が出土している。これらの石器は、南小泉



第61図　石器・石製品実測図

遺跡としては最古の時期と考えられている弥生時代に属するものと思われる。

（2）弥生土器

弥生土器は全て小破片で、11点出土している。出土地点はⅡb層から5点、27号溝から5点、18号住居跡カマド埋土5層中より1点出土している。文様としては、押し引き列点文のあるものが1点あるだけで、他はLR縄文または撚糸文が施されているだけである。

（3）土師器

土師器は図化できるものは5点だけであるが、ロクロを使用しないものと、ロクロを使用したものとに大別される。

①ロクロを使用しない土師器

ロクロを使用しないものには、小形壺（坩）1点と甕が2点ある。

〈坩〉　6号土壙から出土した第12図1に図示したもので残存高6.5cm、口径6.6cm、体部径7.6cmを計る。外面は磨滅しているが、内面には体部にナデ痕跡、口縁部にヨコナデが認められる。南小泉式または引田式と考えられるが、南小泉式に比べると体部に比して口縁部が径、高さともにやや小さく作られている。

〈甕〉－1　17号住居跡より出土した第8図1に図示したものは、器高18.1cm、口径16.8cm、底径7.9cmを計る。底部は器高の大きさに比してやや大きく偏平な造りで、底面と体部との接続部は段状の折曲はみられず、⌒形を呈す。最大径は口縁部にあり、体部最大径はその上半にある。口縁部と体部の境はわずかにくびれ、口縁部は短かく、「く」字状に外反する。器面調整は、体部外面上半がナデ、下半がヘラケズリ、体部内面はヘラナデ、口縁部は内外面ヨコナデによる。

〈甕〉－2　17号住居跡より出土した第8図2に示したもので、器高14.8cm、口径13.6cm、底径7.1cmを計る。この甕も器高に比して底径が大きい。底部と体部の境はわずかに折曲するが、底部は台状を呈せずに偏平な造りとなっている。最大径は体部上半にあり、口縁部と体部の境は大きくくびれ、口縁部は短かく、強く外反している。器面調整は、体部外面がハケメ後下端部がヘラケズリされ、体部内面はヘラナデ、口縁部はヨコナデされている。

甕1、2とも底部には木葉痕が認められる。

甕1、2の編年的位置については、このような甕と類似する特徴を有するものが高清水町西手取遺跡2号住居跡（註1）、古川市藤屋敷遺跡18号住居跡（註2）、白石市青木遺跡21号住居跡（註3）、白石市家老内遺跡1号住居跡（註4）等で、底部に回転糸切り痕を有するロクロ土師器の坏と共伴していることから、表杉ノ入式期に属するものと考えられる。

②ロクロ使用土師器

ロクロを使用したものには、18号住居跡カマド内から出土したもの（第10図１）と10号土壙から出土したもの（第19図１）の２点がある。18号住居跡の甕は体部の下半部を欠損するが、上半部は10号土壙出土のものに類似する。10号土壙のものは、いわゆる長胴形を呈し器高27.9㎝、口径21.2㎝を計り、体部最大径と口径はほぼ等しい。体部上半は内外面ともロクロ調整されるが、底部付近は外面がヘラケズリ、内面がヘラナデにより調整される。

２点とも表杉ノ入式期に属するものである。

（４）須恵器

須恵器で実測可能なものは、坏３点、甕２点、壺１点の計６点である。

〈坏〉　完形のものはピット９出土の１点（第25図２）だけで、他はＳＸ１出土の口縁部片（第27図１）とＳＸ２出土の底部片（第28図１）である。ピット９出土品は底部回転糸切り無調整で、体部から口縁にかけては直線的に外傾する。ＳＸ２出土品は外側に張り出す高台が付く。

〈甕〉　17号住居跡から出土した底部から体部下半にかけての破片（第８図３）と、ＳＸ１出土の口縁部片（第27図２）が実測できた。

17号住居跡出土品は、外面が平行叩き目後体部下端がヘラケズリされ、内面はヘラナデ調整されている。ＳＸ１出土品は頸部が外反し、口縁部が強く外反するもので、端部は単純に外面に向けて平坦につくられている。内外面ともロクロ調整されるが、外面には平行叩き目痕も残っている。

〈壺〉　ピット９出土品で、偏平な球形の体部に外側に張り出した高台が付く。口頸部は欠損するが、長頸壺であったと考えられる。体部外面には肩部から底部に至るまで、ロクロ回転によるヘラ削り痕を有する。体部の⅔程の範囲には自然釉が付着し、体部上半部にはほぼ等間隔の三ヶ所に円形の剝離痕がある。

出土須恵器の年代については、17号住居跡出土甕は、共伴する土師器から表杉ノ入式期と考えられる。

ピット９出土の坏は、岡田茂弘・桑原滋郎氏の「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」（註５）による分類では６－６類に相当し、８世紀末から９世紀の年代が与えられている。また、最近の白鳥良一氏による「多賀城跡出土土器の変遷」による分類では、Ｃ群土器の年代は８世紀末から９世紀中葉の年代が与えられている（註６）。共伴の壺についてもこの年代に属するものであろう。

（5）石製品

石製品としては、27号溝から出土した紡錘車と、6号土壙（井戸）より出土した石臼片が各1点ある。

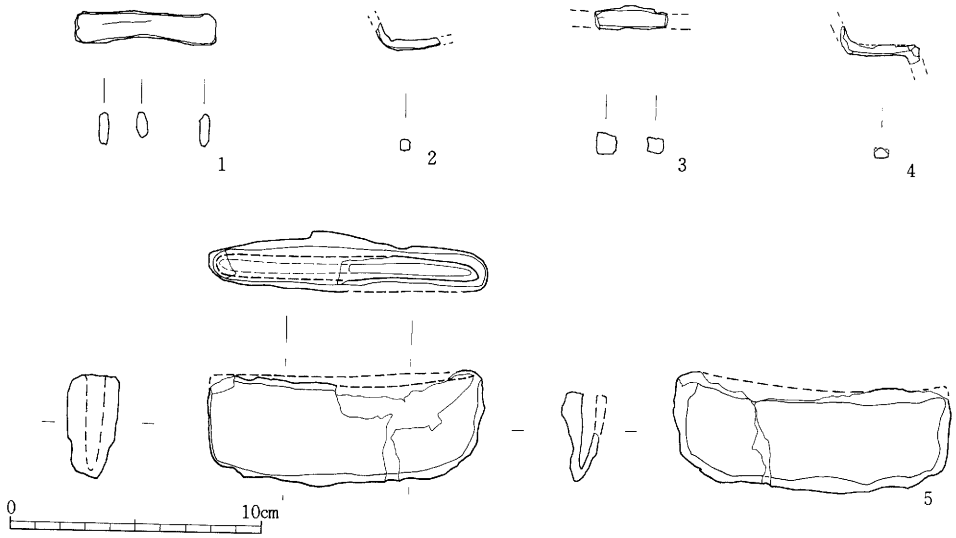
〈紡錘車〉　第61図3に示した円錐台形を呈し、孔径は底面径が上面径よりわずかに大きくなっている。蛇紋岩製で、全面が丁寧に研磨されている。

石製で、しかもこのような形状を呈する紡錘車は、栗遺跡（註7）や清水遺跡（註8）から出土しており、両遺跡の出土品の年代は、栗囲式期の年代が与えられているので、本遺跡出土品の年代も栗囲式期（7世紀代）と考えられる。

〈石臼〉　茶臼の下臼の周縁部付近の破片と考えられる長さ5cm、幅3.5cmの破片である。安山岩製で、厚さが2.5～3cmある。

（6）鉄製品

鉄製品としては、第62図に示したように、板状のもの(1)と、断面方形の釘状のもの（2～4)、鍬先(5)がある。



遺物No.	種別	遺構名	層位	法量 長さ	法量 幅	写真図版
1	?		表土	5.6	1.3	
2	釘 ?		Ⅱa層	2.6	0.5	
3	釘 ?	SD−16	1～2層	2.9	0.9	
4	釘 ?	Pit45		3.1	0.4	
5	鍬 ?	SD−33		4.2	11.1	57−1

第62図　鉄製品

〈鏃先〉　幅11.1cm、長さ4.2cm、厚さ2.1cmを計る。断面形はV字状を呈し、木部挿入口の内法幅は6mm前後となっている。

鉄製品の他に、鉄滓が1・2号性格不明遺構・27号溝・表土中より出土している。

（7）古　瓦

古瓦は表土中より丸瓦片6点、平瓦片2点、不明片4点、6号土壙より平瓦片2点が出土した。図示したものは、6号土壙出土の平瓦片1点だけである。6号土壙出土の2点は、凸面縄叩き目、凹面布目痕を有する一枚造りのものである。表土中出土のものは、平瓦、丸瓦とも凹面は布目痕を有し、凸面は縄叩き目のものと、縄叩き目の後ナデ調整されるもの、ナデ調整だけのもの（丸瓦片）がある。

出土した瓦は、多賀城や陸奥国分寺跡出土品と同類のもので、奈良時代から平安時代のものと考えられる。

（8）近世瓦

近世の瓦類は6号土壙の1～5層中から一括して11点出土している（第13、14図）。

〈丸瓦〉　7点出土している。凸面はナデ調整、凹面は布目痕を有し、部分的にヘラケズリされている。両側面及び両端面は、接着面とその内側に二面の面取りがされている。

丸瓦のうち1点には、玉縁との境の段上から6cm程の所に直径1.2cmの釘穴の穿たれているものもある（第13図1）。

〈平瓦〉　2辺間の長さのわかるものはなく全て小破片である。凸面、凹面ともナデ及び一部ケズリによって調整される。側面及び端面は1面となっているものが一般的であるが、第　図では、側面の凹面側角が2度のケズリによって面取り状に丸味をもって仕上げられている。

丸瓦、平瓦ともやや砂を多く含むが、表面は滑らかに仕上げられている。焼成は、古代の瓦一般に比べるとやや軟質で、いわゆる燻し焼きによる瓦である。色調は、表面1mm前後が黒色から黒味を帯びた銀色を呈し、内部は灰白色を呈するものが大部分であるが、表面までも灰白色を呈するものもある。

これらの瓦は、仙台城や陸奥国分寺薬師堂から出土するものと同質のものである。仙台城は伊達政宗が慶長5年（1600年）に縄張りし、翌6年に普請を始めており、陸奥国分寺薬師堂は慶長十二年（1607年）に再興されている。また、寛永5年（1628年）には若林城が完成している。本遺跡出土の近世瓦が、どのような状態のものがいつここへ運ばれ、さらに井戸へ廃棄されたかは不明であるが、仮に上記の二城、一寺の築造時に近い時期にここへ運ばれてきたとすれば、江戸時代初期の年代が与えられる。この年代については共伴の陶器類の年代とも大差な

いと考えられる。

（9）陶　　器

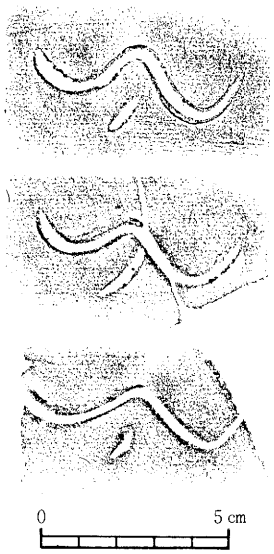
陶器は6号土壙から出土した無釉の擂鉢2点と施釉の皿1点の計3点がある。

①無釉陶器

〈擂鉢〉－1　第12図3は、器高10.2cm、口径21.2cm、底部径7.4cmを計り、かなり使用され磨滅している。筋目は幅1.8cmに5本と荒く、また単位間の間隔も広い。口唇部は平坦となっており、内外面ともわずかに肥厚する。二次的な火を受けて内外面とも器面が荒れているが、燻し焼きによるものと考えられる。須恵器や中世陶器の一般と比較して、焼きぱやや軟質で、前記の近世瓦に類似する。

〈擂鉢〉－2　第12図4は口径31cmで、底部を欠損する。内外面ともロクロ調整されているが、外面はロクロ調整により生じた凸部をヘラ状工具によって削るようにナデている。筋目は幅2.0cmに5本と荒く、また単位間の間隔も広い。口唇部は平坦となっており、内外面両方向に肥厚する。口唇部と筋目との中間には、ヘラによる文様が、ある間隔を置いて描かれている。Wの中央頂部の下に短い斜線を引いたもので、第12図4に2ヶ所と他の同一個体片に1ヶ所の計3ヶ所に認められている。第63図は文様の拓影である。この文様は飛んでいる鳥を表現していると思われる。

この擂鉢も燻し焼きによるもので、表面は黒色を呈するが、内部はにぶい黄橙色を呈す。焼成は、前記の擂鉢と同様である。



第63図　6号土壙（井戸跡）出土擂鉢ヘラ描き文様拓影

②施釉陶器

〈皿〉　第12図2は、器高3.6cm、口径13.6cm、底径5.4cmを計り、底部の高台は造り出しによる。底部から口縁部にかけては緩やかに立ち上がり、口縁部は軽く外反する。口縁部の内面には軽い段が形成される。釉は半透明の灰オリーブ色を呈し、内面と外面上端部にかけられる。

陶器類の年代は、共伴の瓦類との関係からみて、江戸時代のものと考えられる。江戸時代のどのくらいの時期に相当するかについてはの判断ができる資料はないが、その初期的な様相が強いように思われる。

2．遺構の総括

（1）住居跡

住居跡は2軒検出された。両住居跡とも表杉ノ入式期（平安時代）のものである。住居跡の規模は、17号が約3m四方、18号が約4m四方と比較的小型であり、両住居跡とも竪穴内における柱穴は検出されていない。床面にはカマド以外には周溝、貯蔵穴といった施設はなく、数個の用途不明のピットが検出されるだけである。

カマドは両住居跡とも北側の壁面に接して付設され、住居跡の外に煙道が伸びている。17号住居跡のカマドの場合は北壁の中央よりやや東寄りに付設されている。

住居の主軸の方向をカマドによって計測すると、17、18号住居跡とも真北を基準として、N－9°－Wを向いている。（磁北基準N－2°－W）

（2）土　　壙

土壙は7基検出されたが、このうち6号土壙は井戸跡であることがわかった。他の土壙については、10号土壙の年代が出土土師器によって表杉ノ入式期（平安時代）と判明しているだけで、年代、性格についても不明であり、土壙の相互関係もないようである。ただし、12号土壙は17号住居跡に切られている小溝状遺構より古いものであることから、平安時代以前の土壙であることは明らかである。

ほぼ完形の土師器甕を出土した10号土壙についてみると、甕は底面近くから横転した状態で出土し、甕の中には土が充満していた。甕の中の土は、甕の横断方向―横転した状態では垂直方向―で2層に分けることができた。このことは、甕の中に土が詰った状態で埋められたことを示していると考えられる。土壙に甕を埋める例としては甕棺があるが、甕棺の場合は、中が空洞であるため土圧によって潰れ、甕内に土が入っていることがないことからすると、本例は甕棺とは別のようである。

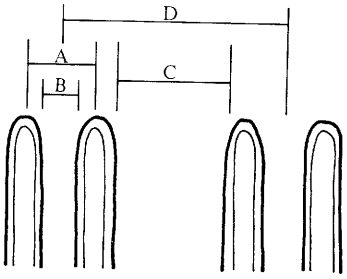
（3）井戸跡

6号土壙は調査の結果井戸跡であることが明らかになった。平面形は直径約2mの円形を呈す。断面形は、本来は縦長の逆台形であったと考えられるが、下半部の壁が崩落し、フラスコ状を呈す。井戸枠施設はなく、素掘りの井戸である。瓦、陶器等の出土遺物により近世と考えられる。この井戸に関係すると考えられる建物等については発見することができなかった。

（4）小溝状遺構

本調区発見の小溝状遺構は、先述したように２条１組となっている。その関係を表としたのが第１表である。対内の内壁間の距離は、ＥＷ２－３間は60～70cmとやや広いが、他は20～40cmの間隔となっている。これに対し、対間の外壁間の距離は、ＥＷ６－７とＥＷ８－９間がやや広く130～150cmとなっているが、他は70～120cmとなり、対内の内壁間距離の２～５倍となっている。このことは、明らかに２条１組となるように、そして組と組の間には、組間よりも広い間隔をとるように意識的に掘られたことを意味している。なお、間隔の広い２条が対となるのではなく、間隔の狭い方が組になることは、その配置から明らかであり、かつ対間の外壁間距離よりも対内の内壁間距離の方に統一性があることからも考えられる。

小溝状遺構は、仙台市内においてもこれまでに、安久東遺跡（註９）、六反田遺跡（註10）、山口遺跡（註11）、南小泉遺跡中央部（註12）で発見されている。安久東遺跡の場合は平安時代の住居跡に切られ、５世紀後半頃の木棺墓及び箱式石棺墓を切っている。山口遺跡では古墳時代から奈良時代にかけての地層で発見されている。これまでの発見例では、本例も含め、平安時代の住居跡に切られる場合があっても、これを切っている場合がないことから考えると、時期的には平安時代よりは古いものと考えられる。市内でこれまでに発見された小溝状遺構はほぼ等間隔に列状に並ぶ場合が多く、本例のように２条１組となるような例はなかった。



計測位置略図

第１表　小溝状遺構計測表

小溝状遺構番号	対内		対間	
	A．中軸間距離	B．内壁間距離	C．外壁間距離	D．中軸間距離
ＮＳ１－２	60	30		
↕両対間距離			70	
ＮＳ　３				
ＥＷ２－３	90	60～70		
↕両対間距離			70～100	180
ＥＷ４－５	45～70	20～40		
↕両対間距離			100～120	200
ＥＷ６－７	50	25～30		
↕両対間距離			130～150	220
ＥＷ８－９	60～70	30～40		
ＮＷ－ＳＥ１－２	60	40		

小溝状遺構の機能としては、六反田遺跡では天地返し（畑地）の可能性を含めた作物栽培に関する遺構と考えており、また、このような遺構を広範囲に調査した群馬県高崎市芦田貝戸遺跡では「形状からしていわゆる畑として何かを栽培した可能性は高く……中略……畝の上面を

乾燥させるために溝を掘って同時に土壌の酸化を促がしていたのか……。」（註13）と考えている。本調査区の小溝状遺構も他の類例から畑に関係する遺構と考えられる。この場合、畝を作るための掘り込みなのか、単なる天地返しなのか、それとも畝を乾燥させるための排水用の溝であったのかは明らかではない。しかし、畝を作ることを目的としてできた溝状の掘り込みであるならば、本例のように畝の間隔の広いものは、畝と畝との間隔がある程度の幅がなければならないものが栽培されていたものと考えられる。

（5）ピット

ピットのうち、須恵器の坏と壺を出土したピット9についてみると、坏はピットの底面に接し、壺は坏の上に整然と重ねられていた。このことは、これら2点の土器が単にピット中に捨てられたものとは考えられない。しかしながら、坏は口縁の一部が欠損し、壺は口頸部全てと台のほとんどが欠損しているものであることからすれば、2点の土器はその機能を十分に果しえなくなっていたものであることもまた確かである。この遺構の性格については、現段階では明らかではない。

（6）性格不明遺構

1号性格不明遺構は、方形の竪穴状を呈し、周辺部には多数のピットがみられる。床面上からの出土遺物はなく、堆積土中から多くの遺物が出土しているが、いずれも古代に属するものである。重複遺構中では、数個のピットを除いては最も新しい遺構であるが、時期としては、ロクロ土師器出現後の古代（平安時代）に属すると考えられる。堆積土中の出土遺物にあっては鉄滓が15点とフイゴ羽口が1点出土しており、小鍛冶との関係を考えさせるが、この遺構内からは焼土を伴う施設や、焼土・炭等が検出されていないので、小鍛冶との直接的な関係はないと思われる。

2号性格不明遺構は、大部分は調査区外であるので、その全容は明らかでないが、土壙状の落ち込みと考えられる。年代としては、堆積土中及び遺構の上部堆積土中に中世以降の遺物がなく、古代の遺物が多量に含まれていることから、ロクロ土師器出現以降の古代（平安時代）と考えられる。この遺構の堆積土中からも鉄滓とフイゴ羽口が出土しており、1号性格不明遺構と同様に小鍛冶との関係が考えられるが、決定的な資料はない。この遺構の周辺は遺構の埋没後も窪地であったようで、遺物を多量に含む土砂が堆積している。

（7）溝

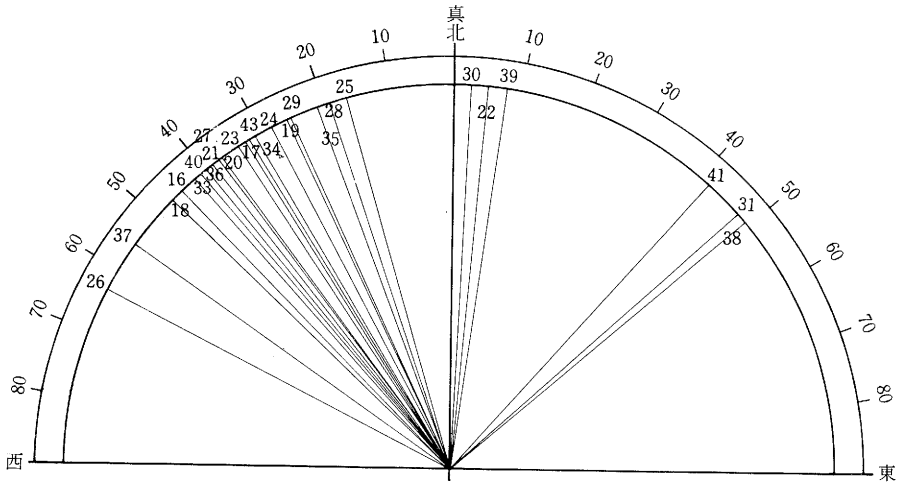
本調査区においては27条の溝が検出された。これらの溝のうち、38・39・40号溝は平安期の

竪穴住居跡との重複関係によって、平安時代以前の年代が考えられ、29号溝は6号土壙(井戸)

第2表　溝観察表

	方　向	傾　斜	上　幅	底　幅	深　さ	断面形	時　期
16	N－45°－W	わずかに南が低い	138	118	12	浅い逆台形	
17	N－33°－W	―――	84	70	20	舟底形	
18	N－47°－W	―――	47	20	11	舟底形	
19	N－26°－W	NW╲10╲SE	55	45	5～20	舟底形	
20	N－37°－W	―――	135	120	10	浅い逆台形	
21	N－39°－W	―――	25	18	8	舟底形	
22	N－5°－W	―――	18	12	5	舟底形	
23	N－34°－W	―――	44	34	36	逆台形	
24	N－28°－W	NW╱10╱SE	35	20	6	浅い逆台形	
25	N－16°－W	NW╲10╲SE	43	30	30	逆台形	
26	N－63°－W	NW╱13╱SE	36	26	14	逆台形	
27	N－38°－W	小W ― 4 ― E NW ―― SE	65	35	35	逆台形	
28	N－19°－W	―――	20	14	6	舟底形	
29	N－25°－W	⌒	68	30	23	舟底形	江戸以前
30	N－2°－W	SW╱5╱NE	65	30	45	舟底形	
31	N－43°－W	―――	80	55	28	舟底形	
32	欠　番						
33	N－42°－W	NW╱20╱SE	62	45	31	U字形	
34	N－31°－W	NW╲10╲SE	185以上	40	85	逆台形	
35	N－26°－W	―――	50	30	50	U字形	
36	N－40°－W	西壁部浅い	50	30	15	舟底形	
37	N－55°－W	―――	26	16	8	舟底形	
38	N－50°－W	―――	40	25	15	舟底形	平安以前
39	N－8°－W	SW╱5╱NE	36	20	7	浅い逆台形	平安以前
40	N－41°－W	NW╲10╲SE	41	34	18	U字形	平安以前
41	N－41°－W	―――	42	5	14	V字状	
42	不　明	不　明	140以上	不　明	不　明	不　明	
43	N－32°－W	NW╱3╱SE	50	25	32	逆台形	

第3表　溝方向グラフ



との重複関係により江戸時代以前の年代が考えられるが、他の多くの溝については年代の位置付けに足る資料を得ることが出来なかった。したがって古代のものであるか、あるいは中世・近世のものであるかは不明であるが、遺物を出土した16・19・20・23・27・28・29・33・34・35・40・42号溝の資料を見ると、土師器・須恵器の類が大部分で、中世以降の遺物は見ることができない。

溝の規模について一覧表にしたのが第２表である。この表により規模から溝を下記のように分類することができる。

大型ａ＝上面幅が１ｍを超える溝で、深さが20cm以下と浅いもの。

〔16・20号溝〕

大型ｂ＝上面幅が１ｍを超える溝で、深さが50cm以上と深いもの。

〔34・42号溝〕

中型　＝上面幅が１ｍ以下40cm以上の溝

〔17・18・19・23・25・27・29・30・31・33・35・36・38・40・41・43号溝〕

小型　＝上面幅が40cm未満の溝

〔21・22・24・26・28・37・39号溝〕

この分類によれば、大型・小型の溝は少なく、中型の溝が多い。大型の溝は、重複関係において、浅いものは比軟的新しく（ＳＤ16・20)、深いものは古い（ＳＤ34・42）傾向が認められる。小型の溝は検出される長さの短いものが多い。(ＳＤ21・28・37)

溝の方向としては、第２表及び第３表のグラフに示したようにＮ－15°～50°－Ｗ（北北西～北西）を指す溝18条が大部分を占め統一性が感じられる。他の方向としては、北と北東の溝がそれぞれ３条と西北西の溝が２条だけである。

溝両端の底面の傾斜は、第２表のように、傾斜のあるものと、ほとんど平坦なものとは約半々で、傾斜のあるものも33号溝を除くと10cm以下と差は小さく、平坦に近いものである。傾きとしては、北西が下がる溝が６条、南東が下がる溝が３条と、両方向のものがあり、自然地形等による傾向は認められない。

Ⅶ. ま と め

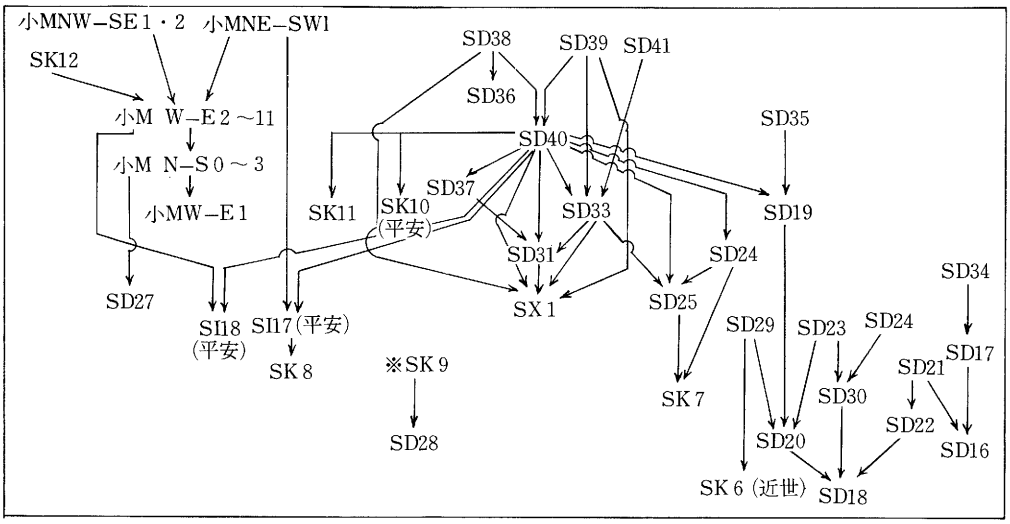
1．本調査区は、南小泉遺跡の南端部に位置するが、竪穴住居跡・土壙・井戸跡・小溝状遺構・溝・ピット等多数の遺構が発見され、遺構はさらに南側にも広がっている可能性が考えられるようになった。

2．発見遺構で、年代の明らかなものは、平安時代より古い小溝状遺構・平安時代の竪穴住居跡２軒・土壙１基・ピット１個・平安時代前後の多数の溝・江戸時代の井戸跡１基がある。年代の明らかな遺構のなかでは、平安期に属するものが多い。

3．出土遺物としては、古い方から石鏃・スクレイパー・弥生式土器・古墳時代の石製紡錘車・古墳時代～平安時代の土師器・平安時代の須恵器・古代瓦・近世瓦・近世の施釉及び無釉陶器がある。また時期は明らかでないが鍬・鉄滓・フイゴ羽口・石臼片も出土した。出土遺物のなかで、数量的に最も多いのが土師器で、土師器のなかでも平安期と考えられるのが大部分を占め、古墳時代のものは少ない。

4．発見された遺構には多くの重複関係があり、これをまとめると第４表のようになり、平安時代以前より近世に至るまでの人々の生活の跡が連綿として続いて来たことが窺われる。

第４表　発見遺構重複関係一覧表



註　　記

註１　早坂春一・阿部　恵：「西手取遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ」『宮城県文化財調査報告書』第63集　宮城県教育委員会（1980）

註２　加藤道男・佐藤好一：「藤屋敷遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ」『宮城県文化財調査報告書』第63集　宮城県教育委員会（1980）

註３　小川淳一　：「青木遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書』第71集　宮城県教育委員会（1980）

註４　真山　悟　：「家老内遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第81集　宮城県教育委員会（1981）

註５　岡田茂弘・桑原滋郎：「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要』Ⅰ　宮城県多賀城跡調査研究所（1974）

註６　白鳥良一　：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ　宮城県多賀城跡調査研究所（1980）

註７　東北学院大学考古学研究部：「栗遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第14集　仙台市教育委員会（1979）

註８　丹羽　茂・小野寺祥一郎・阿部博志：「清水遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第77集　宮城県教育委員会（1981）

註９　仙台市教育委員会　：第１回・第２回「安久東遺跡現地説明会」資料　仙台市教育委員会・宮城県教育委員会（1977）

註10　田中則和・柳沢みどり：「六反田遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第34集　仙台市教育委員会（1981）

註11　仙台市教育委員会　：「山口遺跡現地説明会資料」　仙台市教育委員会（1982）

註12　結城慎一・工藤哲司・伊東信雄：「南小泉遺跡範囲確認調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第13集　仙台市教育委員会（1978）

註13　田村　孝・小野和之・金井潤子：「芦田貝戸遺跡Ⅱ」『高崎市文化財調査報告書』第19集　高崎市教育委員会・高崎市文化財保護協会（1980）

① 表土（Ⅰ層）

出土地点	表土								計
種別	土師器		須恵器		瓦	中世・近世陶	鉄製品		
器種	坏	甕	坏	甕				鉄滓	
破片数	74	187	20	21	13	8	2	8	333

② Ⅱa層

出土地点	Ⅱa層					計
種別	土師器		須恵器	瓦	鉄製品	
器種			坏			
破片数	32	207	6	2	1	248

③ Ⅱb層

出土地点	Ⅱb層		計
種別	土師器	須恵器	
器種	甕	甕	
破片数	85	2	87

④ 17号住居跡

種別		土師器										須恵器	計
器種		坏	甕									甕	
部位		体位	口縁部	体部								体部	
調整	外面	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラケズリ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケ目	ハケ目	不明	不明	タタキ目	
	内面	ヘラミガキ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ナデ	不明	ヘラナデ	ナデ	ヘラナデ	不明	ヘラナデ	
層位	1	1		1	1						7	1	
	床		2	1	2	3	1	5	1	1	10		
計		1	2	2	3	3	1	5	1	1	17	1	37

⑤ 18号住居跡

種別		土師器						弥生土器	計
器種		坏	甕					甕	
部位		底部	体部			底部		体部	
調整	外面	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ナデ	ロクロ	ヘラケズリ	ナデ		
	内面	ヘラミガキ	ヘラナデ	ナデ	ロクロ	ヘラミガキ	ヘラミガキ		
層位	カマド煙道		5						
	カマド5		6	1				1	
	カマド6		3		1	1			
	床	1					1		
	ピット6		1						
計		1	15	1	1	1	1	1	21

⑥ 6号土壙

種別		土師器							須恵器	瓦			無釉陶器	施釉陶器	石製品		計
器種		坏				甕			坏	丸瓦	平瓦		擂鉢	皿	石斧？	スクレイパー	
部位		口縁部～体部				体部			口縁部								
調整	外面	ナデ	ロクロ	ロクロ	不明	ナデ	ハケ目	不明	ロクロ	ヘラナデ	ヘラナデ	布目	ハケ目				
	内面	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ロクロ	不明	ナデ	ヘラナデ	不明	ロクロ	布目	ヘラナデ	縄目	筋目				
層位	1～2									4		1			1		
	2					1				1							
	3	1	2	3	1			5									
	1～4								1	16	7		4	1			
	1～5						1				1		1			1	
計		1	2	3	1	1	1	5	1	21	8	1	5	1	1	1	52

⑦ 11号土壙

種別		土師器		計
器種		坏	甕	
部位		体部	体部	
調整	外面	ナデ	不明	
	内面	ヘラミガキ	不明	
層位		1	1	
計		1	1	2

⑧ 12号土壙

種別		土師器		計
器種		坏		
部位		体部		
調整	外面	ヘラケズリ		
	内面	ヘラミガキ		
層位		1		
計		1	1	

⑨ 小溝状遺構群

種別		土師器				計
器種		甕				
部位		体部				
調整	外面	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラケズリ		
	内面	ヘラミガキ	ヘラナデ	ナデ	不明	
	南北	1	5	1	1	
	東西5		1			
	XWSE1		1			
計		1	7	1	1	10

⑩ ピット9

種別		土師器		計
器種		甕		
部位		体位		
調整	外面	不明	不明	
	内面	ヘラナデ	不明	
層位		2	7	
計		2	7	9

⑪ 1号性格不明遺構

種別		土師器										須恵器			土製品	弥生土器	鉄製品	計
器種		坏		甕								坏		甕	フイゴ		鉄滓	
部位		体部		口縁部	体部					底部		口縁部	底部	底部	羽口			
調整	外面	ナデ	ナデ	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	(ロクロ)ナデ	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ロクロ	ヘラケズリ	ロクロ				
	内面	ヘラミガキ	ナデ	ヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ	ナデ	ナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ナデ	ロクロ	ロクロ	ロクロ				
層位	1～3	9	2	2	6	4	15	16	9	1	1	3	1	1	1	4	15	
計		9	2	2	6	4	15	16	9	1	1	3	1	1	1	4	15	90

⑫ 2号性格不明遺構

種別		土師器														
器種		坏						高台付坏	甕							
部位		体部						高台部	体部							
調整	外面	ヘラケズリ	ナデ	ナデ	ヘラミガキ	ロクロ	ロクロ	ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ目	ハケ目	ロクロ
	内面	ナデ	ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ロクロ	ナデ	ヘラナデ	ナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ナデ	ヘラナデ	ロクロ	ヘラナデ
層位	A～F層	3	26	27	1	1	3	2	10	12	1	1	4	1	1	6
	1～5層		1		1				1	2				1		
計		3	27	27	2	1	3	2	11	14	1	1	4	2	1	6

種別		土師器						須恵器								瓦
器種		甕						坏			高台付坏	甕				丸瓦
部位		体部		底部				体部	底部		底部	頸部	体部			
調整	外面	ロクロ	不明	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	ヘラケズリ	ロクロ	ロクロ	ヘラケズリ	タタキ目	カキ目	ナデ
	内面	ロクロ	不明	ヘラナデ	ナデ	ハケ目	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ナデ	ナデ	ナデ	布目
層位	A～F層	1	48	4	2	1	1	15	1		1	7	1	6	1	1
	1～5層	3						2		1				3		
計		4	48	4	2	1	1	17	1	1	1	7	1	9	1	1

種別		瓦		土製品	鉄製品	計
器種		丸瓦	平瓦	フイゴ	鉄滓	
部位				羽口		
調整	外面	縄目	布目			
	内面	布目	縄目			
層位	A～F層	2	4			
	1～5層			2	6	
計		2	4	2	6	211

⑬ 16号溝

種別		鉄製品	計
器種			
部位			
調整	外面		
	内面		
層位	1～2	1	
計		1	1

⑭ 19 号 溝

種別		土師器						計
器種		坏	甕					
部位		体部	体部					
調整	外面	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ナデ	ナデ	ヨコナデ	
	内面	ミガキ	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	ナデ	不明	
層位	不明	1	2	1	1	1	1	
計		1	2	1	1	1	1	7

⑮ 20 号 溝

種別		土師器							計
器種		坏	甕						
部位		体部	体部					底部	
調整	外面	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ナデ	ナデ	ヘラケズリ	
	内面	ミガキ	ヘラケズリ	ヘラナデ	不明	ヘラナデ	ナデ	ヘラナデ	
層位		1	1	3	2	1	2	1	
計		1	1	3	2	1	2	1	11

⑯ 23 号 溝

種別		土師器	石製品	計
器種		甕	鏃	
部位		体部		
調整	外面	ヘラケズリ		
	内面	ヘラケズリ		
層位		1	1	
計		1	1	2

⑰ 27 号 溝

種別		土師器						須恵器		弥生土器	鉄製品	石製品	計
器種		坏	甕					坏		甕	鉄滓	紡錘車	
部位		体部	体部					体部	底部	体部			
調整	外面	不明	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ナデ	ハケ目	ハケ目	ロクロ	ヘラケズリ				
	内面	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ	ロクロ	ロクロ				
層位	1～2	1	2	1	2	1	1	1		3	1		
	3								1	2		1	
計		1	2	1	2	1	1	1	1	5	1	1	17

⑱ 28 号 溝

種別		土師器				須恵器		瓦	計
器種		坏	甕			坏		平瓦	
部位		体部	体部			体部			
調整	外面	ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ハケ目	ロクロ	ナデ	縄目	
	内面	ロクロ	ヘラケズリ	ナデ	ハケ目	ロクロ	ロクロ	布目	
層位	1	1	2	1	2	1	1	1	
計		1	2	1	2	1	1	1	9

⑲ 29 号 溝

種別		土師器	計
器種		甕	
部位		体部	
調整	外面	ハケ目	
	内面	ヘラナデ	
層位		1	
計		1	1

⑳ 33 号 溝

種別		鉄製品	計
器種		鍬？	
部位			
調整	外面		
	内面		
層位		1	
計		1	1

㉑ 34 号 溝

種別		土師器			計
器種		坏		甕	
部位		体部	底部	体部	
調整	外面	ロクロ	ヘラミガキ	不明	
	内面	ヘラミガキ	ヘラミガキ	不明	
層位		2	1	2	
計		2	1	2	5

㉒ 35 号 溝

種別		土師器			計
器種		甕			
部位		体部			
調整	外面	ナデ	ハケ目	ハケ目	
	内面	ナデ	ヘラナデ	ハケ目	
層位		1	1	1	
計		1	1	1	3

㉓ 40 号 溝

種別		土師器							計
器種		坏			甕				
部位		口縁部	体部		体部				
調整	外面	ナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	不明	
	内面	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	不明	不明	
層位		2	1	1	1	4	1	1	
計		2	1	1	1	4	1	1	11

㉔ 42 号 溝

種別		土師器									須恵器		計
器種		坏					高坏	甕			坏		
部位		口縁部	体部			底部	脚部	体部			体部	底部	
調整	外面	ナデ	ヘラケズリ	ナデ	ロクロ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ナデ	ハケ目	ハケ目	ロクロ	回転ヘラ切り	
	内面	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ロクロ	ナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ナデ	ハケ目	ロクロ	ロクロ	
層位	白色土	1	1	1	2	2	1	1	1	2	5	2	
計		1	1	1	2	2	1	1	1	2	5	2	19

写真35　調査区全景(南より)

写真36　調査区全景(北より)

写真37　調査区南東部(北より)

写真38
17号住居跡全景
（南より）

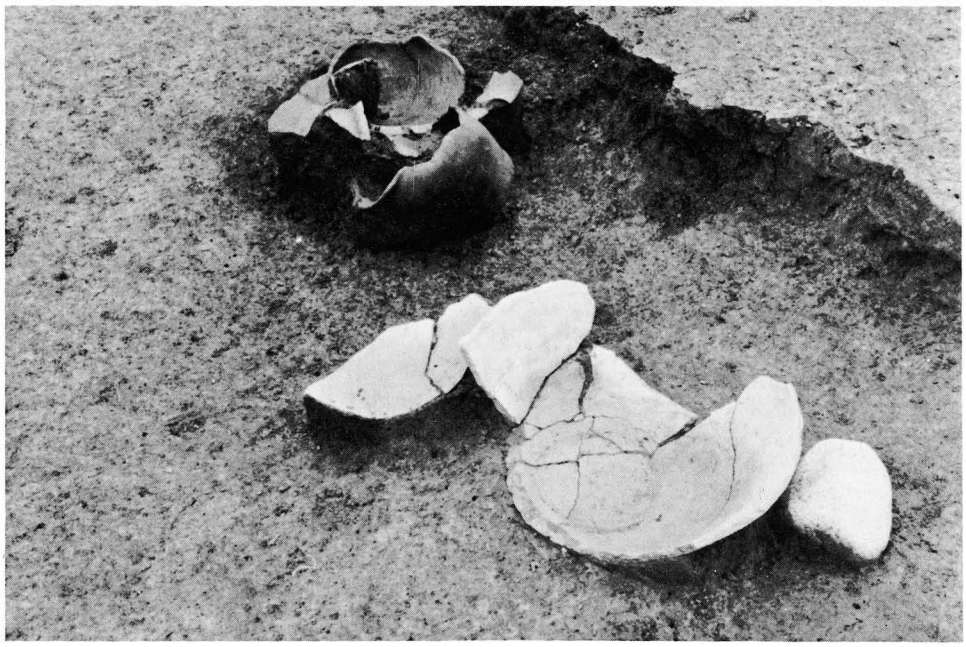


写真39
17号住居跡遺物出土状況
（南西より）

写真40
18号住居跡全景
（南より）

写真41
18号住居跡カマド
（南より）

写真42
1号性格不明遺構
（南東より）

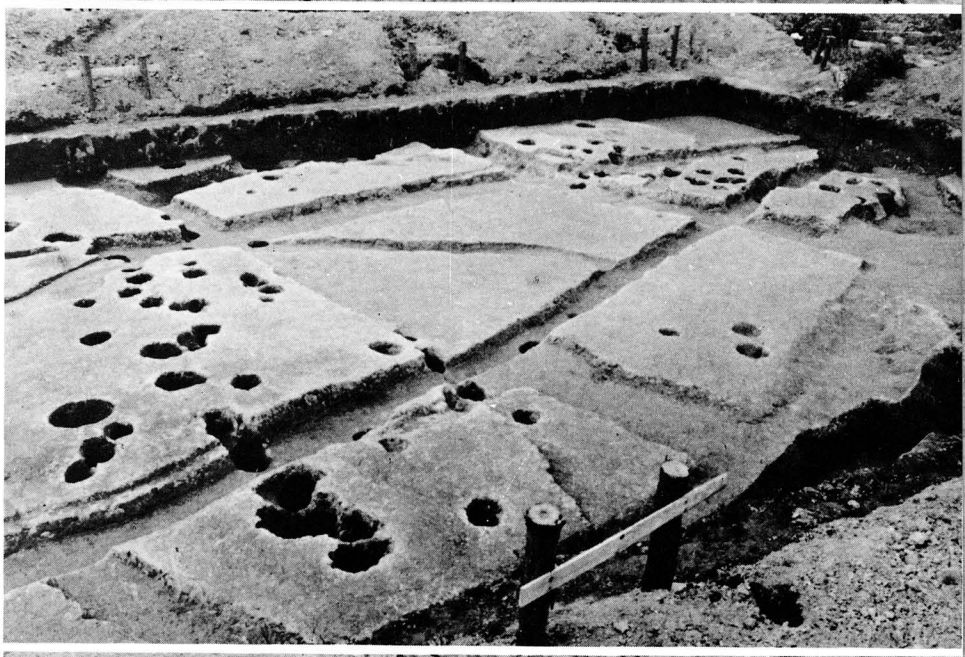


写真43
2号性格不明遺構
（北西より）

写真44
6号土壙(井戸跡)
(西より)

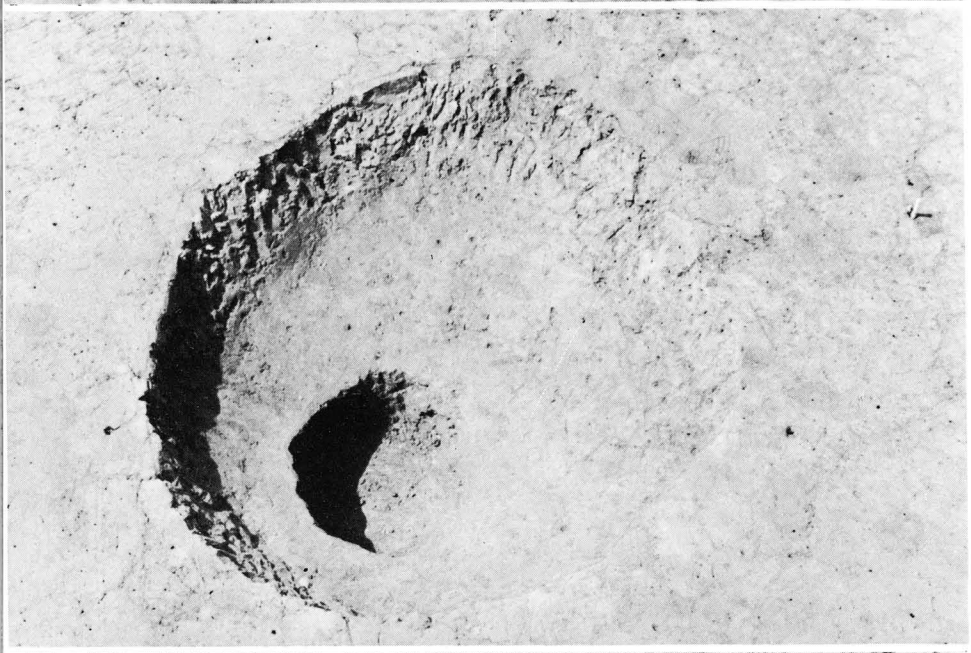


写真45
7号土壙
(南より)

写真46
9号土壙
(北より)

写真47
10号土壙
（南より）

写真48
11号土壙
（南より）

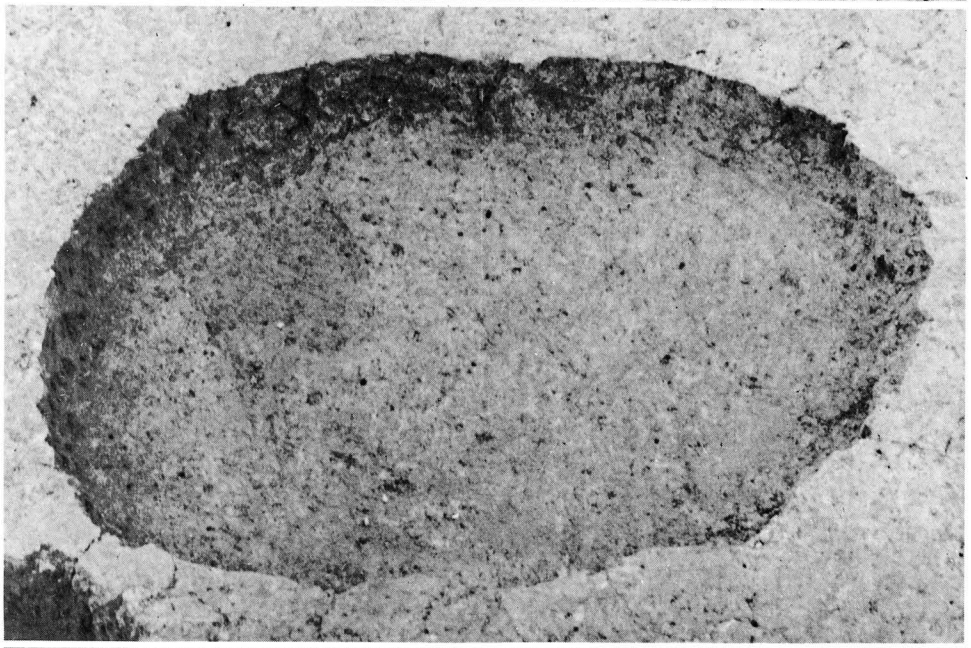


写真49
12号土壙
（東より）

写真50
ピット50
（西より）

写真51
小溝状遺構
（南より）

写真52
16・22・34号溝
（南より）

写真53
28号溝及び
9号土壙確認状況
（北より）

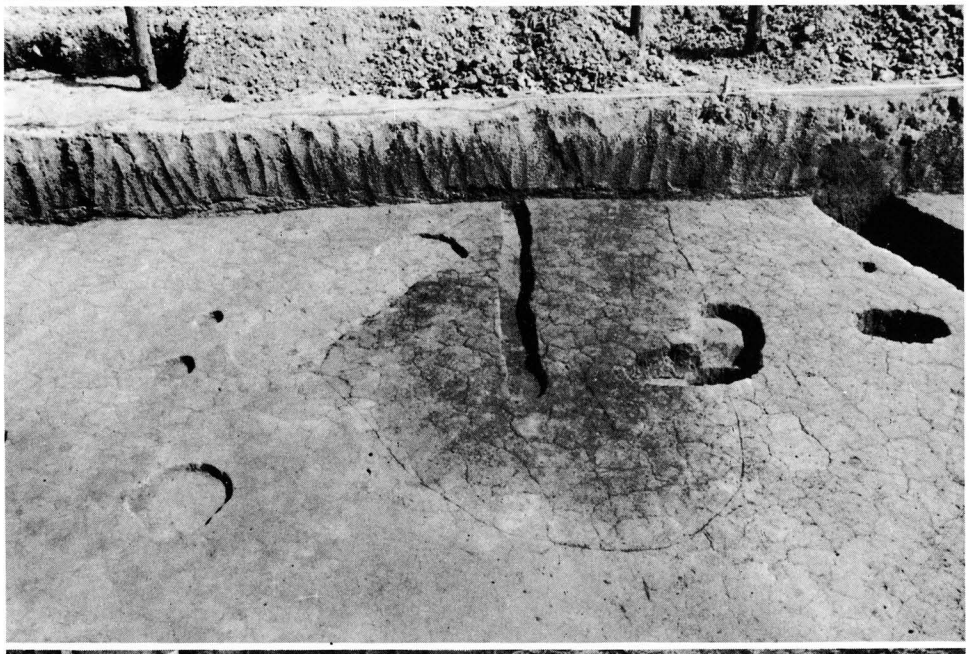
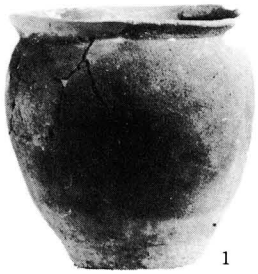
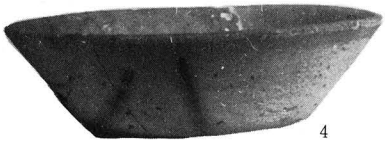


写真54
23・30・42号溝
（北より）

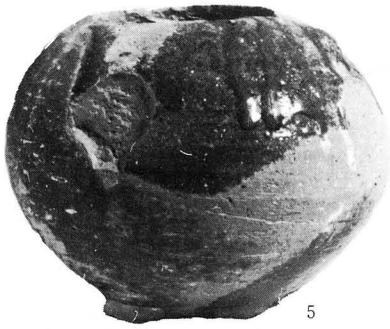


1



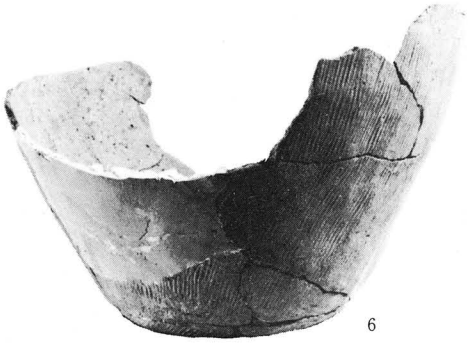
4

2



5

3



6

1．土師器・甕(SI－17 出土)
2．土師器・甕(SI－17 出土)
3．土師器・甕(SK－10 出土)
4．須恵器・坏(ピット9 出土)
5．須恵器・壺(ピット9 出土)
6．須恵器・甕(SI－17 出土)

写真55　出土遺物1

1

3

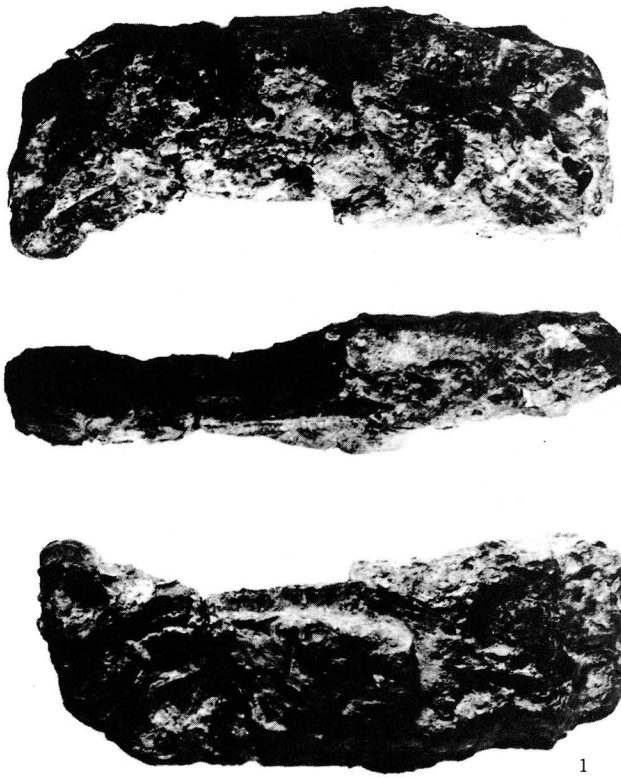
2

1．無釉陶器・擂鉢・内面(SK－6井戸跡出土)
2．　　同　　外面(　　同　　)
3．施釉陶器・皿　　(SK－6井戸跡出土)
4．近 世 瓦・丸瓦・凸面(SK－6井戸跡出土)
5．　　同　　凹面(　　同　　)

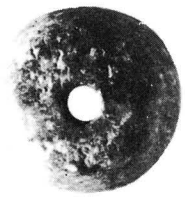
4

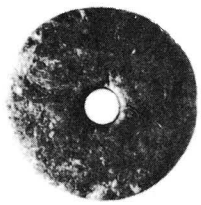
5

写真56　出土遺物2



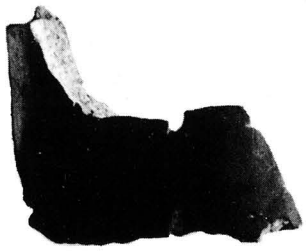
2





3

1．鉄製器・鍬　　(SD－33　井　戸　)
2．石　　鏃　　(SD－23　井　戸　)
3．石製紡錘車　　(SD－27　出　土　)
4．近世瓦・丸瓦・凸面(SK－6井戸跡出土)
5．　　同　　凹面(　　同　　)



4

5

写真57　出土遺物3

付１　仙台市周辺の窯跡および遺跡出土土器の胎土分析

奈良教育大学　三 辻 利 一

１．はじめに

粘土を1350℃もの高温で焼成しても、化学組成に変動がないことが確かめられているので、窯跡から出土する須恵器胎土を分析することによって、その窯で生産された須恵器胎土の化学的特性を知ることができる。そしてそのデータを遺跡から出土する須恵器の胎土分析の結果と対応する窯、または地域がその産地と考えられる訳である。筆者はこの方法で各地の遺跡出土須恵器の産地を数多く推定した。また、全国各地の多数の窯跡から出土する須恵器を分析した結果、須恵器胎土の地域特性はその地域の粘土の母岩の化学特性に関連することが推定された。

この結果を活用すると、窯跡の残っていない土師器や埴輪なども胎土分析によって、その産地を見当づけることができる。本報告では、仙台市周辺の窯跡出土須恵器を分析し、その結果を仙台市周辺の遺跡から出土した土器の胎土分析の結果に対応させて、その産地を推定した。

２．分析方法

表１には、今回分析対象となった窯跡と遺跡、および土器種をまとめてある。資料は仙台市教育委員会、および仙台育英高校の渡辺泰伸氏から提供された。資料は表面を研磨して、付着汚物、灰釉などを除去したのち、タングステンカーバイド製乳鉢（硬度9.5）で100～200メッシュ程度に粉砕した。粉末試料は10トンの圧力を加えてペレットに成形し、蛍光X線分析用試料とした。エネルギー分散型蛍光X線分析装置により、土器の蛍光X線スペクトルが測定された。土器中の成分として、Si（ケイ素）、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Fe（鉄）、Rb（ルビジウム）、Sr（ストロンチウム）が定量された。定量分析には、標準試料として岩石標準試料ＪＧ－１が使用された。分析データは標準試料による規格化値で表示された。規格化値は次式によって求められた。

表１　分析対象となった遺跡名および土器種

遺跡名	土器種	出土、表採年
大蓮寺窯跡	須恵器、瓦	1975、1981
五本松窯跡	瓦	1981
堤町窯跡	須恵器	1981
次橋窯跡	須恵器	1980、1981
吹付窯跡	須恵器	1981
山口遺跡	須恵器	1980
栗遺跡	須恵器	1981
大野田古墳	須恵器	1981
郡山遺跡	須恵器	1981
下ノ内遺跡	須恵器	1981
南小泉遺跡	土師器、須恵器、中世陶器	1981
今泉城跡	中世陶器	1981

$$\overline{X}=\frac{(\text{実試料中のXの全カウント数})}{(\text{岩石標準試料JG-1の中のXの全カウント数})}$$

Xは各々、Si、K、Ca、Fe、Rb、Srである。これらのうち、Siには殆んど地域差がなく、またKとRb、CaとSrの間には各々、正の相関関係があったので、これらのうちの2因子は不必要である。結果として、地域の特性を表わす因子としてはRb、Sr、Feの3因子を選択した。とくに全国各地の400余基の窯跡から出土した約5000点の須恵器を分析した結果、Rb−Sr分布図が地域特性を表わすのに有効であることが分かったので、Rb−Sr分布図を採用した。

3．分析結果

図1には大蓮寺窯跡出土の須恵器と瓦のRb—Sr分布図、およびFe量を示してある。Rb—Sr分布図上の中央に引かれた新座標軸は全国の窯跡出土須恵器のRb、Srの平均値である。窯跡出土須恵器の分析データはいずれもよくまとまって分布しており、同一窯跡でつくられた土器粘土は同質であることを示している。また、須恵器と瓦でも、同一窯跡でつくられたものは類似しており、本質的には同質の胎土であることが分かる。これらを全部含むようにして大蓮寺窯領域が決められた。

図1　大蓮窯跡出土瓦・須恵器のRb−Sr分布図とFe量

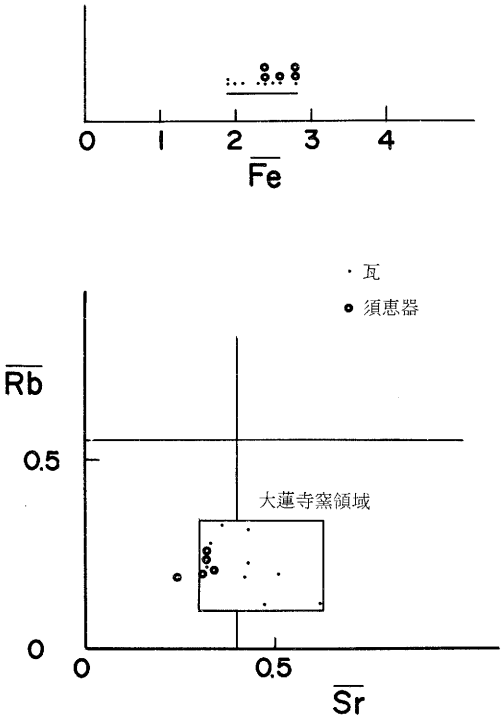


図2　仙台市五本松窯跡出土瓦のRb−Sr分布図とFe量

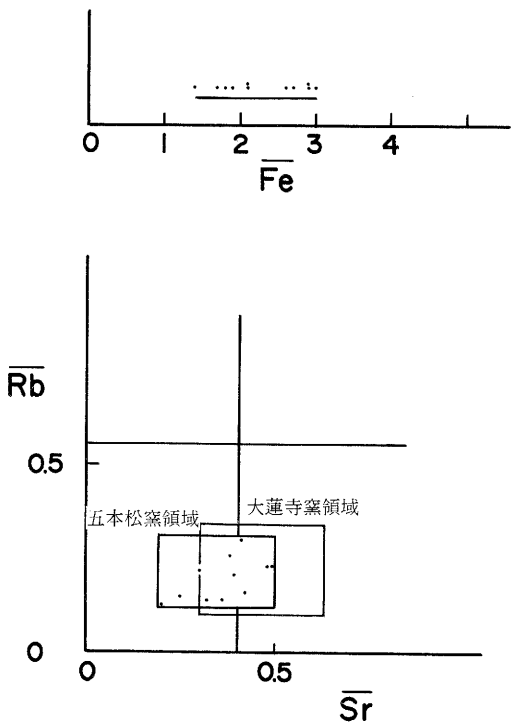


図３　仙台市堤町窯跡出土須恵器のＲｂ－Ｓｒ分布図とＦｅ量

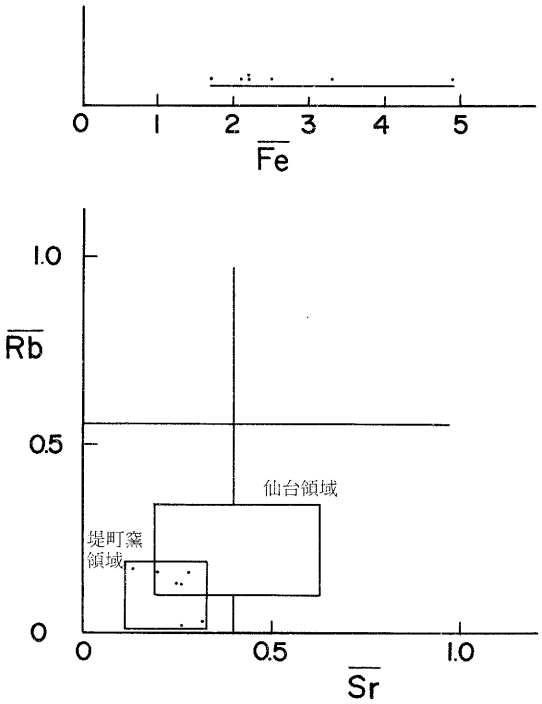


図４　松山町次橋１・２号窯跡出土須恵器のＲｂ－Ｓｒ分布図とＦｅ量

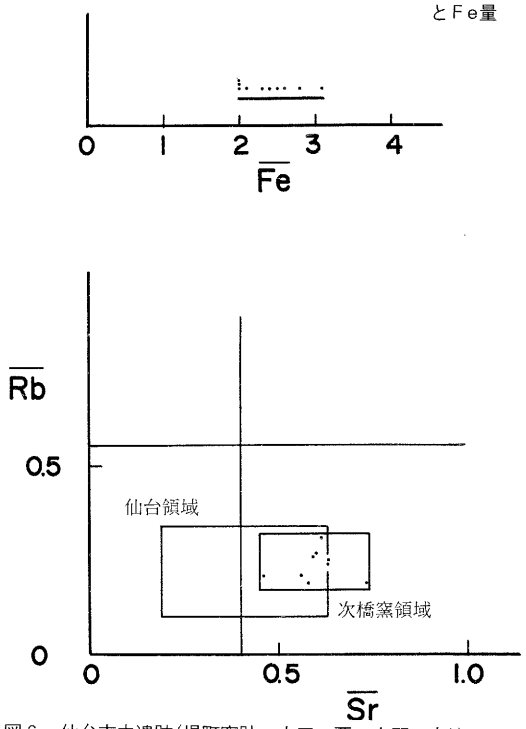


図５　大衡村吹付窯跡出土須恵器のＲｂ－Ｓｒ分布図とＦｅ量

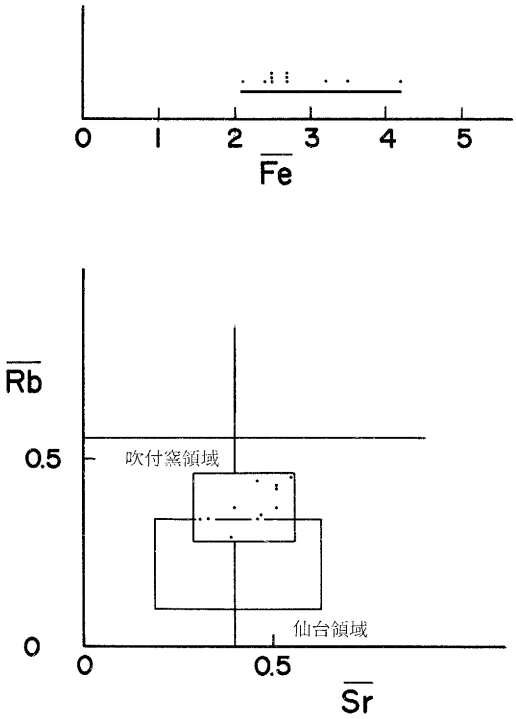


図６　仙台市内遺跡（堤町窯跡・山口・栗・大野田古墳・郡山・下ノ内）出土須恵器のＲｂ－Ｓｒ分布図とＦｅ量

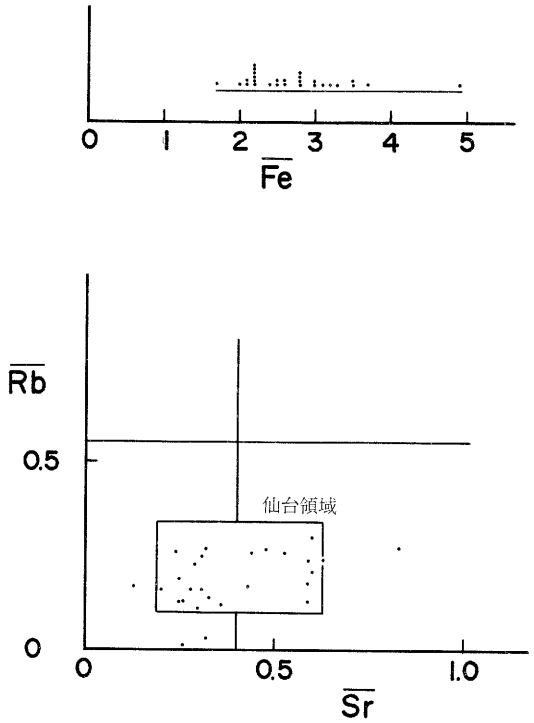


図２には、同じ仙台市内五本松窯跡出土瓦のRb—Sr分布図、およびFe量を示してある。同時に図１で求めた大蓮寺窯領域を示してあるが、五本松窯の瓦はほとんど大蓮寺窯領域に対応することが分かる。

図３には、仙台市堤町窯跡出土須恵器のRb—Sr分布図を示してある。大蓮寺窯および五本松窯の須恵器と瓦を含むようにして決めた仙台領域にほぼ対応することが分かる。

図４には、志田郡松山町次橋１、２号窯出土須恵器のRb—Sr分布図とFe量を示してある。図１、２で求めた大蓮寺窯、および五本松窯の須恵器、瓦を全部含むようにして仙台領域としてある。そうすると、次橋１、２号窯の須恵器の大半が仙台領域に入ることが分かる。したがって、仙台を中心としたかなり広い地域の土器胎土がRb—Sr分布図上で同じ特性を示すことが分かる。

図５には、黒川郡大衡村吹付窯跡出土須恵器のRb—Sr分布図とFe量を示してある。この窯跡の須恵器のRb量は仙台グループに比較して少し多く、仙台領域から少しずれることが分かる。したがって、吹付窯跡の須恵器は仙台グループから相互識別できる可能性をもつ。また、Fe量は図１から図５までを比較して分かるように、仙台を中心とする地域の窯間では殆んど差がないことも分かる。

次に、遺跡から出土する土器の胎土をみてみよう。図６には、仙台市内の６遺跡から出土し

図７　南小泉遺跡出土の土師器と須恵器のRb－Sr分布図とFe量

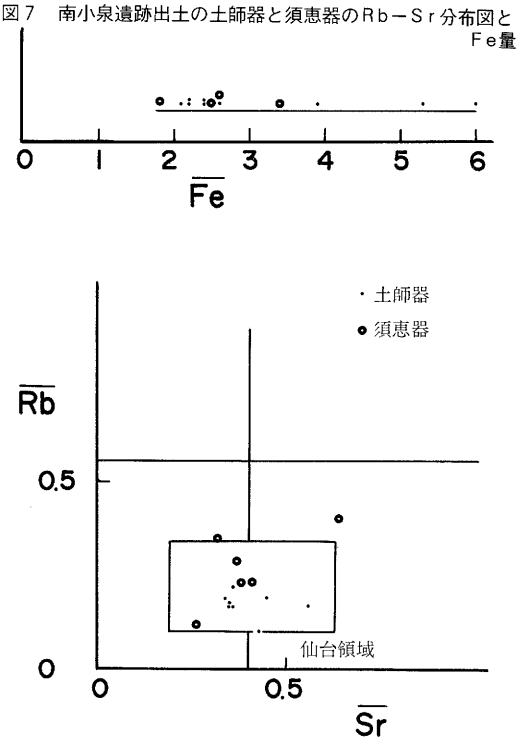


図８　今泉城跡出土中世陶器のRb－Sr分布図とFe量

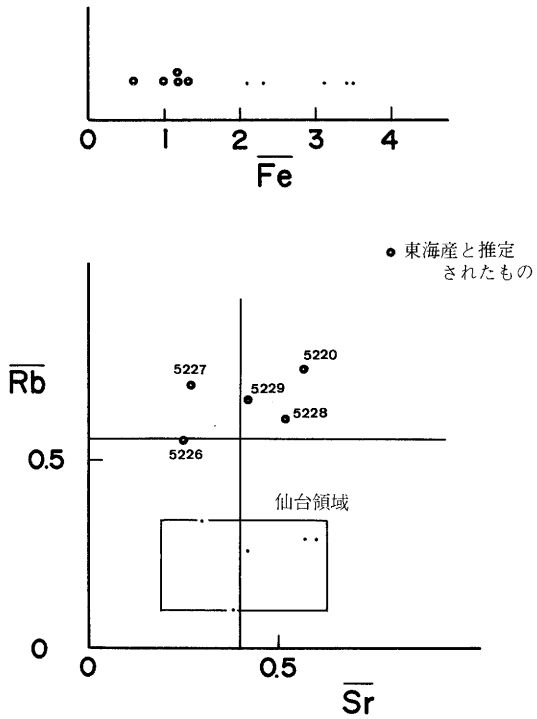
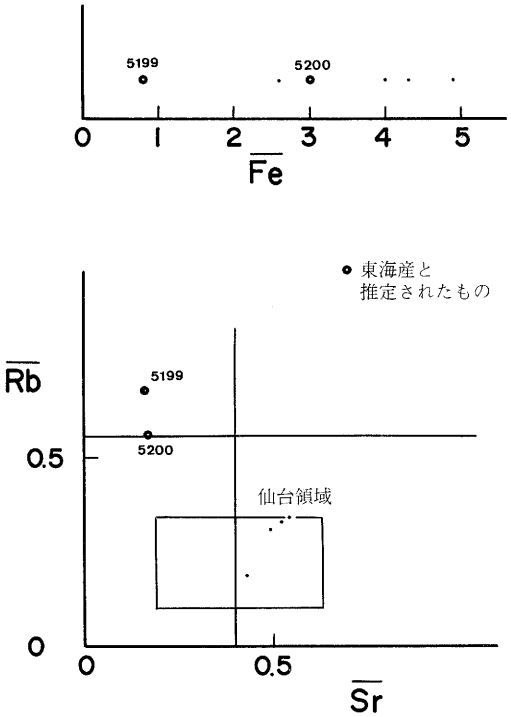


図９　南小泉遺跡出土中世陶器のＲｂ－Ｓｒ分布図とＦｅ量



た須恵器のRb—Sr分布、およびFe量を示してある。Rb—Sr分布図では全試料が仙台領域内、またはその近傍に分布し、これらの須恵器の産地が仙台市内、またはその周辺にあることを示唆している。

図７には、南小泉遺跡出土の土師器と須恵器のRb—Sr分布図とFe量を示してある。ここでも殆んどの試料は仙台領域内に入り、その産地が仙台周辺にあることを示す。土師器には、Fe量が著しく多いものがあるが、その理由はよくわからない。

図８には、仙台市今泉城跡出土の中世陶器の分析結果を示してある。10点の試料のうちの半分は仙台領域に入っており、仙台周辺産の中世陶器であることを示している。一方、試料番号5220、5226、5227、5228、5229の５点は完全に仙台領域外に逸脱して分布する。このことはFe量でも確かめられる。これらの試料のFe含有量は少なく、Fe量でも仙台領域に対応しない。したがって、これら５点の試料は県外からの搬入物と推定される。とくに、Rb量が全国平均より高いことは西日本型であることを示唆する。Rb量、およびFe量から岐阜、名古屋を中心とした東海地方がその産地と考えられた。岐阜、名古屋か常滑かは放射化分析によるNa量から推定できるので、次の機会にこれらの試料の放射化分析を行なう予定である。

図９には、南小泉遺跡出土の中世陶器の分析結果を示してある。ここでも、６点の試料のうち、４点は地元の仙台産の中世陶器である。しかし、試料番号5199と5200の２点は県外からの搬入物である。Rb—Sr分布図の分布位置より、岐阜、名古屋、知多、渥美の東海地方がその産地と推定される。

以上述べたように、今回分析した資料では、土師器、須恵器はことごとく地元産であったが、中世陶器にはかなりの率で東海産と推定されるものが検出された。

付２．　胎土分析結果について

胎土分析による土器の産地推定は、考古学的分析と重ねることによって成果を確実なものとすることができる。特に交易がさかんになった中世における陶器の移動を科学的に把握するためには有効な方法と考えられる。

今回、奈良教育大学の三辻利一氏に仙台市及びその周辺の窯跡、また市内の遺跡出土の瓦や土器を分析していただいた結果、土師器、須恵器は地元産、中世陶器には東海産と推定されるものも多いという意見をまとめていただいた。

そこで、今後、この分析結果をいかしていくために、所見を以下にまとめておきたい。

１．仙台領域の決定には、大蓮寺窯領域と五本松窯領域を使用しているが、当然、堤町窯領域も念頭におく必要がある。また、氏が以前に分析している大蓮寺窯、金山窯、富沢窯出土遺物の分布も、(註1)仙台領域の設定に関連させてよいものと思われる。

２．図１の大蓮寺窯領域を見ると、須恵器の方が瓦と比べてSrが少ないようであるが、今後、仙台領域内でも区別できるものか検討を要する。これは、須恵器が５世紀後葉で、瓦が７世紀末に比定されることから、同じ地元産品で、同窯跡であっても、５世紀と７世紀では、粘土の採取地点を異にしていることを現わしているとも解釈できる。

３．図６を見ると、仙台領域から比べてSrが極端に多いものは、郡山遺跡出土の須恵器の１片である。氏が現在まで行っている他地域の分析結果に照し合せても、当てはまる領域はないようである。仙台領域、大きくは陸前領域の分析資料の増加によって、今後、この１点を包含するような領域が設定できるようになるのか。たしかに、図４の松山町次橋窯領域を見ると、仙台領域に比べてSrの含有量が多い。郡山遺跡は窯跡でないので、その近隣からの土器の移動は当然考えられてよい。

４．図７によると南小泉遺跡出土の須恵器と土師器も、若干、仙台領域外に飛び出しているものがある。これも分析量の増加で、仙台領域が拡大され、それに包含されるか、Rbが若干多いことを考慮すれば、図５の大衡村吹付窯領域に示されているように、陸前地方の他地域からの移動が考えられる。

５．図８の今泉城跡出土の中世陶器の半分は東海産という推定がなされている。しかしながら、九州唐津の製品ではないかと思われるものがあり、放射化分析の結果がまたれる。特に資料番号5220、5228、5229の３点は、氏が行った分析では九州の領域に入っている。(註2)

以上、所見を述べたが、残念ながら、報告書の刊行までに三辻氏と分析結果について、いろいろ検討ができなかった。今後、放射化分析結果がだされた折に再検討したいと思っている。

（註１）　三辻利一、児島玉貴ほか　「元素分析による古代土器の産地推定の実例（２）」奈良教育大学紀要第29巻第２号（自然科学）1980・11を参照。

（註２）　三辻利一　「胎土分析による古代土器の産地推定」古文化談叢第７集（九州古文化研究会）1980・４を参照。

職　員　録

社会教育課

課　長	永野昌一
主　幹	早坂春〃

文化財管理係

係　長	大沢隆夫
主　事	山口　宏
〃	渡辺洋一

文化財調査係

係長（兼）	早坂春一
教　諭	佐藤　隆
〃	渡辺忠彦
〃	佐藤　裕
〃	加藤正範
主　事	田中則和
〃	結城慎一
〃	成瀬　茂
教　諭	青沼〃民
主　事	柳沢みどり
〃	木村浩二
〃	篠原信彦
〃	佐藤　洋
〃	金森安孝
〃	佐藤甲二
〃	吉岡恭平
〃	工藤哲司
〃	渡部弘美
〃	主浜光朗
〃	斎野裕彦
〃	長島栄一
〃	荒井　格
派遣職員	高橋勝也
嘱　託	鈴木　実

仙台市文化財調査報告書刊行目録

第1集　天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年4月）
第2集　仙台城（昭和42年3月）
第3集　仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
第4集　史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
第5集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
第6集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第7集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
第8集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
第9集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
第10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
第11集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
第12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
第13集　南小泉遺跡―範囲確認調査報告書―（昭和53年3月）
第14集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
第15集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
第16集　六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
第17集　北屋敷遺跡（昭和54年3月）
第18集　枡江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
第19集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
第20集　史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
第21集　仙台市開発関係遺跡調査報告1（昭和55年3月）
第22集　経ヶ峯（昭和55年3月）
第23集　年報1（昭和55年3月）
第24集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
第25集　三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集　史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
第27集　史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
第28集　年報2（昭和56年3月）
第29集　郡山遺跡Ⅰ―昭和55年度発掘調査概報―（昭和56年3月）
第30集　山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）
第31集　仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ（昭和56年3月）
第32集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第33集　山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第34集　六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
第35集　南小泉遺跡都市計画街路建設工事関係第1次調査報告（昭和57年3月）
第36集　北前遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
第37集　仙台平野の遺跡群Ⅰ―昭和56年度発掘調査報告書―（昭和57年3月）
第38集　郡山遺跡Ⅱ―昭和56年度発掘調査概報―（昭和57年3月）
第39集　燕沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
第40集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ（昭和57年3月）
第41集　年報3（昭和57年3月）
第42集　郡山遺跡―宅地造成に伴う緊急発掘調査―（昭和57年3月）
第43集　栗遺跡（昭和57年8月）
第44集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）
第45集　茂庭―茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第46集　郡山遺跡Ⅲ―昭和57年度発掘調査概報―（昭和58年3月）
第47集　仙台平野の遺跡群Ⅱ―昭和57年度発掘調査報告書―（昭和58年3月）
第48集　史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備調査概報（昭和58年3月）
第49集　仙台市文化財分布調査報告Ⅰ（昭和58年3月）
第50集　岩切畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第51集　仙台市文化財分布地図（昭和58年3月）
第52集　南小泉遺跡都市計画街路建設工事関係第2次調査報告（昭和58年3月）

仙台市文化財調査報告書第52集

南　小　泉　遺　跡

昭和58年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町3－7－1
仙台市教育委員会社会教育課

印刷　㈱　東北プリント
仙台市立町24－24ＴＥＬ63－1166